



研究報告

I 今年度の国語科の教科経営

1. 本校の生徒の実態

言葉や表現に着目し、根拠をもって物語や評論を読み取ろうとする姿勢は概ね定着しているが、文章全体と部分との関係に注意して構造的に読み取る力や、文章の構成や論理の展開、表現の効果について批判的に読む力が十分に身に付いているとはいえない。また、受験のための学力を求める傾向があり、言葉がもつ価値を認識し、言葉の力を活用して心を豊かにしたり自他の存在について理解を深めたりしようとする態度には個人差が見られる。

2. テーマ・サブテーマと教科の特質

	言葉がもつ価値を認識し新たな発想や思考を生み出す — 個々の言葉を大切にしたい問いの練り上げを通して —
特 質	言葉による見方・考え方を働かせて考えること。具体的には、自分の思いや考えを深めるために、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること。

3. 具体的な実践事項

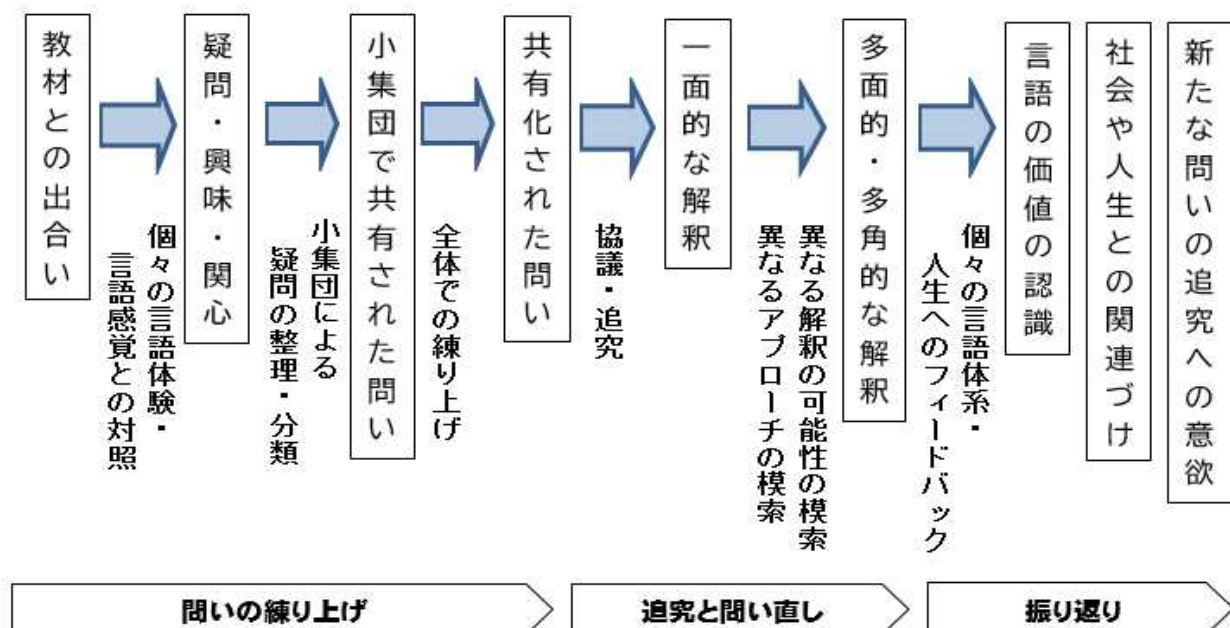
(1) 多面的・多角的な思考の土台をつくる語彙指導の充実

語彙は全ての教科の基盤となる言語能力を支える重要な要素である。意味を理解している語句の数を増やすだけでなく、話や文章の中で使いこなせる語句を増やすとともに、語句の意味や使い方に対する認識を深め、語感を磨き、語彙の質を高めることを目指して指導の工夫・改善に取り組む。具体的には、語義の細かな違いへの意識を促す発問や言語活動、習得した語句や表現を使って書く活動等を通して汎用的な言語能力の育成を図る。

(2) 学ぶ意欲を引き出す「問い」の練り上げ

全ての生徒が考える必然性に迫られ、追究意欲をもって主体的に学習に取り組むことができるように、問いを練り上げる過程を充実させる。具体的には、ICTを活用したり、ミュルトークを充実させたりすることにより、一人一人の言語体験や言語感覚から発した疑問を生かして全体の問いへとまとめていく過程の充実に取り組む。

4. 学びのプロセス



II 具体的な実践事項について

○ 1年生の実践

(1) 多面的・多角的な思考の土台をつくる語彙指導の充実

1年生では、分からない言葉はすぐに国語辞典を引く習慣が身に付くように、「どんな意味？」と問い掛けることを多くした。また、言葉の辞書的な意味だけでなく、文章中の他の言葉と結び付けて考えるような発問をした。例えば、「蕭々と」は「ものさびしいさま」を意味する言葉だが、「ものさびしく」と「蕭々と」の差異について問い掛けると、「蕭々と」の音の響きにも考えが及ぶ生徒が出てきた。授業の中で、「作者はなぜあえてこのような表現をしたのか」と問い掛けることで生徒の読みが深まっていく。その過程を板書で示せるように、カードを使って工夫した。



(2) 学ぶ意欲を引き出す「問い」の練り上げ

コラボノートを使ってクラス全員の感想を共有することがすぐにできるようになった。これを使って、「みんなが満足するためにはどんなことを読んだらよいか」と問い掛け、学習の課題を焦点化することができた。また、授業の中ではある程度読みが深まった段階で、初読の感想にあった生徒の疑問を投げ掛けたり、生徒が気付いていないことを問い掛けたりすることで、生徒が読み直したり考え直したりする視点を広げ、「よく読むとおもしろいな」という実感をもたせることができた。

大阿蘇 疑問に思ったこと 読み深めたいこと C組		1問 山崎隆夫	2問 山崎隆夫	3問 山崎隆夫	4問 山崎隆夫
		1問 山崎隆夫 どうして阿蘇に火を燃やしたのか？	2問 山崎隆夫 著者の思いを語ってあるが、その思いがどうしてあんなに強いのか？	3問 山崎隆夫 阿蘇を燃やした「阿蘇の燃やしている」という表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	4問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？
1問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	2問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	3問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	4問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	5問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	6問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？
7問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	8問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	9問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	10問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	11問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	12問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？
13問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	14問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	15問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	16問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	17問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	18問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？
19問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	20問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	21問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	22問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	23問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	24問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？
25問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	26問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	27問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	28問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	29問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？	30問 山崎隆夫 阿蘇を燃やしているという表現が、阿蘇の火を燃やしているという表現と異なるが、その違いをどう捉えているのか？

○ 2年生の実践

(1) 多面的・多角的な思考の土台をつくる語彙指導の充実 — 『枕草子』での言語活動

文章の中で使いこなせる語彙を増やすとともに、語感を磨くことによって言語生活を充実させる態度を養うことを目的として、『枕草子』第一段の学習後に「自分流枕草子」を書く活動を取り入れた。指導計画は次の通りである。

- ①音読して古文のリズムに慣れる。現代語訳を参考に、重要な単語の意味を確認して、描かれている情景をイメージする。
- ②春・夏・秋・冬の四部構成を確認し、それぞれの季節の共通点や相違点を見つけることで、構造の特徴を捉える。
- ③「さらなり」「言ふべきにあらず」「さへ」「なほ」「まいて」などの言葉の意味や表現の特徴に着目しながら、定説となっている「美」と作者独自の「美」を区別してまとめる。
- ④『枕草子』第一段に見られる工夫を取り入れながら「自分流枕草子」を書いて読み合う。

構造の特徴や語彙に着目して作者の独自なものの見方を読み取る学習を通して、一見、自由闊達に書かれているように見える第一段が、実はさまざまな工夫が施されている文章であることに生徒たちは気付いていた。その上で「自分流枕草子」の活動に取り組むことで、「言うまでもない」「そうでなくても」「～もやはり」「～はまして」などの表現を使って一般的な価値観に対する自分独自のものの見方を示すことや、共通点をもたせた上で相違点を入れることによって文章に表情や変化を付けるといった工夫を自分の文章に取り入れることができていた。また、自分が感じていることを読み手に伝えることの難しさを感じながらも、ぴったりの言葉を探すことを通じて語彙を増やし、表現の幅を広げる意識を高めようとする姿勢が見られた。アンケートの中に「自分流枕草子を作るにあたって、知らない言葉を覚えて使いました。その単語は今も時々使うので、表現の幅が広

がって楽しいです。」という振り返りがあった。創作する活動により、生きた語彙を増やすことが期待できるが、お手本となる文章を学習した上で行うことで、さらに効果的なものになることが確認できた。

自分流 祝草子を書こう

二年 組氏名

春は	昼時。	心は	人の	数	てい	下	梅と	緑	は
な	てい	に	梅	も	その	木	の	影	で
照	ら	し	合	わ	せ				
夏	は	梅	雨。	雨	が	降	る	の	は
言	う	ま	で	も	な	い	か		
晴	れ	時	に	心	も	晴	れ	せ	の
は	な	り	の	は	言	う	ま	で	も
な	い	か							
秋	は	夕	暮	れ。	夕	日	が	さ	し
て	虫	の	音	が	あ	る	の		
は	言	う	ま	で	も	な	い	か	
夜	に	な	り	風	や	虫	の	音	
を	聞	き	な	ば	ら	秋	風	も	感
じ	ん	道	の	と	ま	で	も	な	い
け	の	小	さ	く	大	き	い	楽	し
た	ま	に	は	心	地	良	く	感	じ
る	の	小	さ	く	大	き	い	楽	し
じ	ん	道	の	と	ま	で	も	な	い
冬	は	早	朝。	一	年	初	め	て	の
雪	が	降	る	の	は	言	う	ま	で
は	言	う	ま	で	も	な	い	か	
見	渡	す	限	り	の	地	面	が	真
実	い	と	ま	に	こ	た	つ	を	家
族	で	出	掛	け	ず	に	固	む	
の	も	と	ま	に	は	た	い	の	し
出	掛	け	る	前	に	雪	が	融	け
て	し	ま	う	の	は	降	ま	し	

20×20

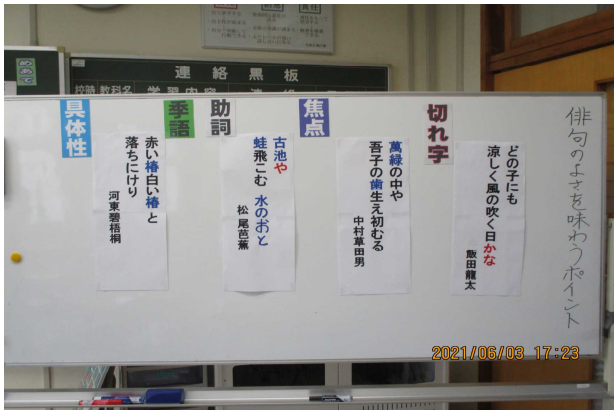
(2) 学ぶ意欲を引き出す「問い」の練り上げ — ICT活用の試み

・チームズを活用して、初発の感想や疑問の共有、学び合いによる問いの追究を図った。これまでは授業者がパソコンで打ち直したり生徒が書いたものをコピーして切り貼りしたりと、手間がかかっていたことを簡単に実現できるという利点があった。今までは埋もれがちだった、自ら発言することが難しい生徒の考えをクラス全体のものとするところができるというメリットもある。ただし、チームズは全員の投稿を一目で見ることが難しく、後から出てきたコラボノートのほうが使い勝手が良さそうである。反面、チームズには返信・リアクション機能があり、場面による使い分けが必要かもしれない。

・短歌創作では、ZOOM ミーティングにペンネームで参加して、創作した短歌をチャット欄に投稿する活動を行った。できあがった歌が次々とリアルタイムで投稿されるおもしろさがあり、匿名で自作の短歌をクラスメイトに見てもらえる体験は、気恥ずかしさを感じずにのびのびと取り組むことができる分、生徒にとって達成感や満足感の大きい学習となったことが振り返りから窺えた。

○3年生の実践について

3年生では、ミエルトークを通して俳句表現を推敲する授業を行った。互いの考えを尊重し、表現のよさを認め合いながら一語一語に着目して話し合う様子が見られるなど、言葉を吟味することの意味や価値について深く考えることができていた。また、生徒が書いた俳句を題材とし、全体で表現の効果を考える場面を設定したことが、自然な形で問いの練り上げや追究、問い直しへとつながり、学ぶ意欲を引き出すための重要な手立てとなった。



基礎知識の確認をしたことで、俳句を推敲する際に自信をもって「季語や助詞、語順、言葉の選び方を工夫することができた。

ミエルボードを活用したことで、思考の過程を可視化しながら内容を整理して話し合いを進めることができた。

○全学年で取り組んだこと

(1) 多面的・多角的な思考の土台をつくる語彙指導の充実 — 辞書指導の徹底

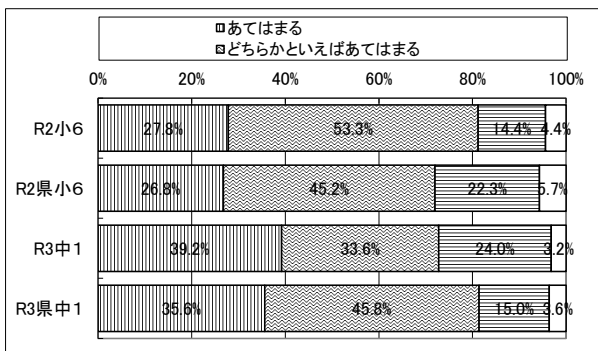
今年度から、全ての学年でクラス全員分の辞書を毎時間の授業で準備することができるようになった。授業の時は必ず机の上に辞書を置いておくことを昨年度以上に徹底した結果、生徒が自ら辞書を引く機会を増やすことができた。

(2) 学ぶ意欲を引き出す「問い」の練り上げ — 授業カードの活用

全学年共通のプロセスカード（「めあて」「自分の言葉で考える」「磨き合う」「高める深める」「まとめ」）を作成して使用したことに加え、見方・考え方のカードを単元ごとに作成して示した。板書がより構造的なものになった結果、生徒は、課題追究のプロセスの中で今どの段階にあるのかを捉えやすくなり、この単元・この時間で身に付けて活用すべき「見方・考え方」は何かを明確に意識して授業に臨むことができるようになった。これにより、生徒が書く授業のまとめの内容もポイントを押さえたものになり、質の向上が見られた。

III 生徒の変容について

○1年生 「国語の勉強は好きだ」

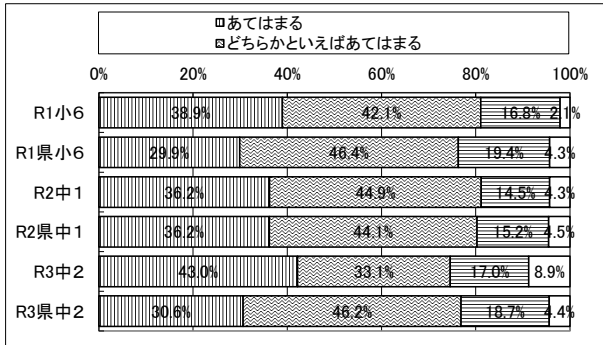


国語が大好き・好きの理由		(右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)												
学年	①内容に興味があるがおもしろい	②わかりやすい	③将来、社会に出たときに役立つ	④生活の中で役立つ	⑤人とかかわりの中で役立つ	⑥考えるのが楽しい	⑦得意	小計						
R1小6	13.7%	▲ 3.9%	5.3%	▲ 4.4%	13.7%	▲ 4.4%	2.1%	▲ 7.6%	35.8%	▲ 2.6%	4.2%	▲ 0.7%	74.8%	▲ 2.7%
R2中1	19.7%	0.0%	7.3%	▲ 4.4%	7.3%	▲ 7.8%	5.8%	▲ 2.5%	26.3%	▲ 14.3%	7.3%	0.0%	73.7%	▲ 1.0%
R3中2	20%	1.1%	6.7%	▲ 2.0%	9.6%	▲ 5.0%	3%	▲ 4.0%	26.7%	▲ 16.6%	1.5%	▲ 4.0%	67.5%	▲ 3.0%
R4中3														

国語が嫌い・大嫌いの理由		(右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)												
学年	①内容に興味がない	②わかりにくい	③将来、社会に出たときに役立つ	④生活の中で役立つ	⑤人とかかわりの中で役立つ	⑥考えるのがめんどう	⑦得意	小計						
R1小6	2.1%	▲ 3.0%	2.1%	1.1%	0%	0%	0%	2.6%	15.8%	▲ 4.3%	20%	▲ 3.0%		
R2中1	5.1%	0.5%	3.6%	▲ 1.0%	0%	0.0%	0.7%	▲ 0.4%	1.5%	1.0%	6.6%	1.8%	17.5%	1.6%
R3中2	4.4%	2.1%	5.2%	▲ 1.6%	1.5%	▲ 1.0%	0%	0.2%	3%	▲ 1.1%	11.9%	▲ 2.1%	26%	▲ 4.0%
R4中3														

※国字の概6.7%を抜く

○ 2 年 生 「国語の勉強は好きだ」



学年	①内容に興味がある	②わかりやすい	③将来、社会に出たときに役立つ	④生活の中で役立つ	⑤人とのかわりの中で役立つ	⑥考えるのが楽しい	⑦構文	小計
R2 小6	20%	2.9%	5.6%	▲4.6%	14.4%	▲2.4%	15.6%	▲4.4%
R3 中1	23.2%	▲3.4%	8%	▲3.9%	11.2%	▲3.3%	11.2%	▲3.7%
R4 中2								
R5 中3								

学年	①内容に興味がない	②わかりにくい	③将来、社会に出たときに役立つ	④生活の中で役立つ	⑤人とのかわりの中で役立つ	⑥考えるのがめんどう	⑦構文	小計
R2 小6	4.4%	▲1.7%	0%	▲3.4%	1.1%	▲1.0%	0%	▲0.1%
R3 中1	5.6%	▲0.7%	1.6%	▲0.4%	0%	▲0.2%	0%	▲0.1%
R4 中2								
R5 中3								

※⑦その他1.2%を除く

1 年生・2 年生に共通する特徴として、全県と比較して「国語が嫌い・大嫌い」の割合が高いことが挙げられる。一つの要因として、学習量が分かりやすく得点に結び付き、学力の向上が見えやすい教科を好み、そうでない国語を敬遠しがちな傾向があると考えられる。本校生徒は通塾率が高く、進学や学習に対する意識も高い生徒が多い。したがって、勉強すればするほど学力の伸びが実感できる英語や数学、一つの答えが明確に導ける理系教科に対して肯定的な感情を抱きやすく、国語に対しては「勉強しても伸びが感じられづらい」「答えがはっきりしない」などの印象をもっているものと考えられる。

一方で、今年度の調査では「国語が大好き」と答えた生徒の割合が、1 年生・2 年生とも全県の数値を上回っており、国語科のメンバーが協力して指導の工夫に取り組んできたことの成果が表れたものとも受け止めている。

日々の授業の中での実感として、根拠をもって読み取る意識が高まり、積極的に辞書を活用するなど、言葉と言葉の差違への関心が高まっているという手応えはある。しかし国語への苦手意識や抵抗感をもつ生徒、学ぶ意義を実感できない生徒に対してどのように言葉の価値を伝えていくかについては、今後も研究を重ねていく必要があると感じている。

年度末に生徒対象のアンケートを行い、国語の学習を通しての自分の変容を書いてもらった。そこに記された言葉を一部紹介して、生徒の変容のまとめとしたい。

言葉を根拠に読み取る	<ul style="list-style-type: none"> ○自分で本を読んだり、歌の歌詞を読んだりするときも、ただ言葉の意味だけではなく、<u>どんな場面でどう使っているかや、前の場面や段落、文との関係を考えながら読んで、自分なりに深く読み取ることができるようになった。</u> ○たった一語の言葉にも作者の思いが込められていて、「<u>なぜそのように書いたのか</u>」を考えることが大切だと分かった。古文や漢文でもそれは同じで、対句や比喻など表現技法の意味を考えることが作者の思いを理解する上で大切だった。 ○小説では、<u>登場人物のプラス面、マイナス面</u>を挙げたことで、同じ要素でも多面性が見えてきて、より深く、立体的な読み取りにつながったと思います。 ○情景やセリフ、その前後から考えられる読み取りを 30 人以上で出して、一つ一つを議論していくことがきっかけとなり、<u>一人で問題集を解いている時も真っ白な紙に全て書き込んでいって、できるところまで追究する癖</u>ができました。 ○小学校のころは、何となく国語と道徳は同じ位置にありましたが、これまでの学習を通して、<u>感情に左右されることのない大事なものに気付けた</u>気がします。自分の周りにある言葉をもっと大切にしていきたいです。
ICT活用	<ul style="list-style-type: none"> ○タブレットの活用により、クラスの人たちと意見を共有する機会が多かった。その結果、<u>自分の意見との共通点は何か、差違点は何か見極めるようになり、考えを深められた。</u> ○チームズを使ったことで、集団の中でのよさである、<u>異なった意見や新しい言葉（知らない言葉彙）</u>を知ることができた。 ○友達の言葉での発表を聞いたり、それを紙に書いているだけだと、残らずに時間が過ぎてしまったり、気になってもきけなかったりしたが、チームズに振り返り等を書いたことにより時間が過ぎても残って確認できるため、<u>深めることができた。</u>

	<p>○短歌の創作では、匿名で ZOOM で行ったからこそ、<u>平等性があり率直な感想を聞くことができて、とても貴重な時間だった</u>と思います。</p> <p>○チームズ上では文章が無制限で書くことができるので、<u>他の人の意見を詳細に受け取ることができた</u>。</p> <p>●<u>対面のミエルトークが一番コミュニケーションがとりやすく、書いているうちに新しい意見が出てくるが多かった</u>です。自分の意見と相手の意見を合わせて、よりの確な言葉で表すことができたときは、うれしかったです。</p> <p>●<u>タブレットを使った学習は私はあまり好きではなかった</u>です。<u>パソコンに打ち込むのって発言するより勇気が必要</u>でした。</p> <p>●チームズは他教科では多く使うが、国語の場合、<u>あまり使わなくても良い授業ができる</u>と思う。</p> <p>●チームズも良かったけれど、<u>細かい点を聞くのにはあまり向いていなかった</u>と思うので、私は話し合いのほうが良いと思った。</p>
語彙の土台をつくる	<p>○1分前学習などで、<u>辞書に多く触り、自分が気になる語句の意味などを調べることができた</u>。</p> <p>○自分の思っていること、考えていることをより表せる言葉で表現しようと頑張ったので、自分の思いを表現する力は伸ばせたと思う。どう表現すればいいかわからなかったものは<u>辞書なども活用して適する言葉を見つけて、表せた</u>。また、<u>対義語・類義語を知ることで、その言葉の本質的な意味をつかみやすくなるとわかった</u>ので、これからもっと<u>たくさんの対義語・類義語を学び、言葉の本質に迫って</u>いきたい。</p> <p>○自分の気持ちを短歌に表すときに、<u>もっとおしゃれな言葉はないか</u>ということを考えながら作った。「自分流枕草子」では、<u>授業で学んだ枕草子のすごいところを活用しながら書くことができた</u>。</p> <p>○自分の考えていることを実際に言葉にするのは難しいのですが、<u>単元を重ねるごとに自身の語彙も増え、さまざまなことを言い表せるようになることに喜び</u>を感じました。</p> <p>○使える言葉が増えて、伝えられる表現が増えることは楽しかったし、<u>新しく覚えた言葉は使いたい</u>と思えるようになった。これらのことは日常の会話でもとても役立つし、<u>もっと自分の知らない言葉を知りたい</u>と思った。</p> <p>○1学期よりも2学期のほうが、自分の気持ちを適している言葉で書けました。(前は思っていることがあっても合っている言葉が見つからず、諦めていたこともありましたが)だから、<u>自分の考えを理解するためにも、たくさんの言葉に触れる機会を大切に</u>していきたいです。</p> <p>○語彙を数多く覚えたおかげで、<u>思考の域が広がった</u>と思う。</p>
言葉の価値・情意面	<p>○<u>言葉に興味をもつようになった</u>ことです。国語の学習を通し、<u>言葉のもつ力や魅力をたくさん感じる</u>ことができました。それを<u>自分でも使ったり話したりしたい</u>と思うようになりました。</p> <p>○私は前からずっと国語が苦手なので、<u>苦手意識が強い</u>です。でも、<u>得意・不得意やセンスなどと関係なく、自分なりの考えを楽しむこともあり</u>かな、と思い始めました。</p> <p>○今年度になってから、<u>国語の学習を通して、考える活動の思い方が変わった</u>と思う。<u>これまでは考えることがあまり好きではなかったが、他の人の意見を取り入れながら進めていくと、あまり苦ではなくなった</u>。また、自分の中で古文の考え方が変化したと思う。今年度は古文から心情を読み取ることが多かったのでおもしろかった。</p> <p>○説明文のほうが得意なので、<u>説明文の単元がおもしろかった</u>。なぜなのか考えたら、<u>意見や結果がはっきりしているから</u>だと思った。しかし、<u>いろいろな読み方ができるのもおもしろい</u>と感じることができた。</p> <p>○国語は五教科の中で特殊で、<u>難しく感じたり、なぜ勉強するのだろうと</u>考えてしまったりすることがあったけれど、<u>皆で楽しく生きていくために大事な教科だと最近思うよう</u>になりました。<u>正しく読める、書けることで、気持ちを共有したり、誤解を減らしたり</u>することができると思うからです。</p> <p>○国語では、<u>一つ一つの言葉に注目することが多いので、一つの単語の意味を気にすることが、他教科でも多くなった</u>気がします。</p> <p>○今までは、あまり国語が好きではなく、<u>国語を勉強する意味が分かりませんでした</u>。でも最近になって、<u>少しずつ国語が楽しくなってきました</u>。それは、<u>おそらく私が読み取りを楽しみ</u>と感じられたからだだと思います。班のみんなと話し合いを深めることで、<u>どんどん頭に入</u></p>

っていったように思います。

- 古文や漢文の学習では、言葉が今と違って、はじめはよく分からなかったけど、意味をちゃんと理解して読んでみると、意外と今風のエッセーや SNS に似ていて共感できたり、現代人の感性とはちょっと異なる部分もあったけど、大切にしているモットーのようなものがあったり、韻を踏んでいたり、やっぱり今の文化にも通じているところがあるのだなと気付きました。
- 漢詩の学習では、あの数十個の漢字だけで一つの作品が構成されているのは、とても驚いた。日本語とは違った表現のしかたや考え方に触れることができ、おもしろかった。
- 古文や短歌といった日本の文学に触れて、私はそれらが好きになった。学ぶ前は昔の言葉が多そうで難しいと思っていたが、分からない言葉を調べてその作品の情景・意味・作者の思いを知ったときの、世界が広がるような感覚に感動した。昔の日本人と現代の私たちの価値観の違いを知ることもおもしろかった。
- 相手の心情を読み取ることもつながって、日常会話で相手を傷つける言葉は使わず、そのときの相手の心情に合わせて言葉を選ぶこともできた。また、物語に触れていると、自分だったらこうするなど、自分と比べて考えることができるようになった。だから物語を読むのはとても楽しいし、読書が好きになった。難しい単語を理解して会話をするのは楽しいと思えるし、自分が成長していると少し実感もできた。
- 筆者の主張、人物の心情・人物像を読み取る力が高まったので、普通の生活の中でも相手のことを考えたりすることができるようになり、会話などがより楽しく感じられるようになった。
- 古文や漢文のおもしろさをもう少し知れるようにしたい。シンプルに難しいです。
- 授業やテストのときに毎回思うのが、物語文の面白さがあまりわからないということだ。私は論説文の方が好きだし、しっかりとした結論の方があいまいな表現よりも好きだなと思った。

IV 来年度の国語科の教科経営

1. テーマ・サブテーマと教科の特質

言葉がもつ価値を認識し新たな発想や思考を生み出す －「対立」を生むことにより全員が参加する学び合いの実現を通して－	
特質	言葉による見方・考え方を働かせて考えること。具体的には、自分の思いや考えを深めるために、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること。

2. 具体的な実践事項

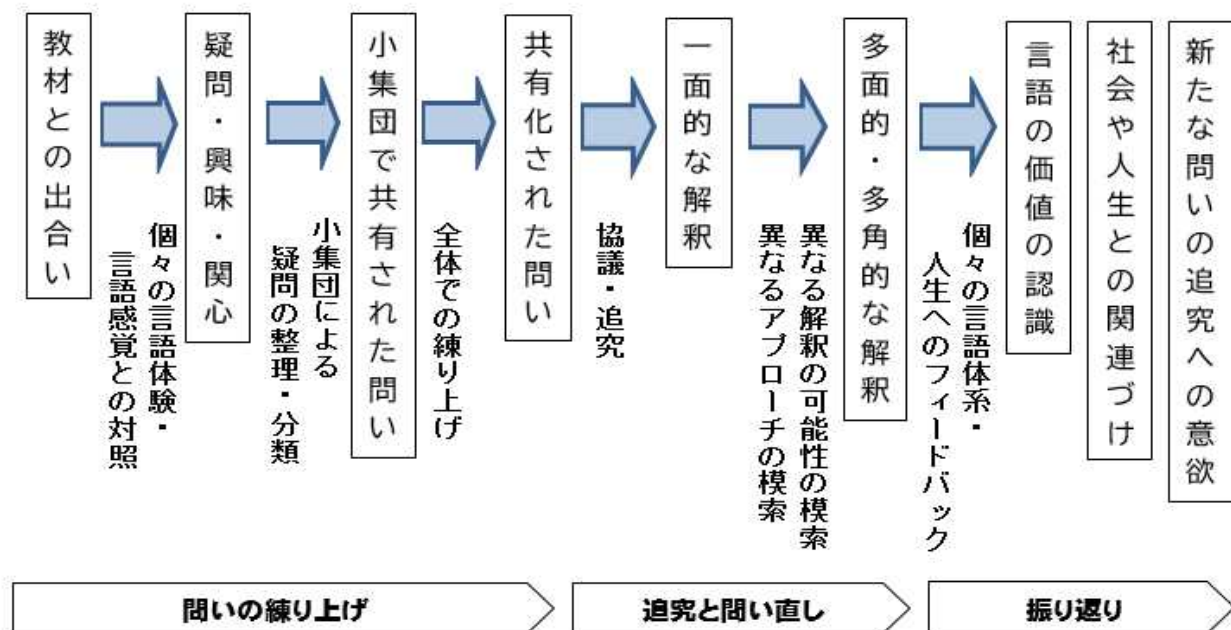
(1) ICTを活用した思考の可視化

追究課題に対する意見の違いが生まれて対立点が明確になることにより、生徒の追究意欲が高まると考えられる。その対立点を生み出すために、まずは個々の思考を可視化することが必要である。具体的には、コラボノートやT e a m s等のツールを効果的に活用して個々の思考の全員での共有を図る。その上で、生徒が互いの相違点に気付くための適切なコーディネートに努める。

(2) 思考の違いの焦点化

可視化され共有された個々の思考の違いを焦点化していくために、生徒が互いの意見を比較したり関連付けたりする過程を重視する。具体的には、その段階において全ての生徒が自分の思考を外言化し、他者と対話する機会をもてるようにする。そのために、各教材においての適度な難易度の課題設定と、多様な学び合いの形態の工夫について研究していく。

3. 学びのプロセス



I 今年度の社会科の教科経営

1. 本校の生徒の実態

授業での発言の様子や諸調査の結果等から、本校の生徒は総じて基本的な知識が豊富であり、自分の意見や考えを説明することも得意である。一方で、既習・既得の知識に頼りがちの一方的な主張や、主観や感情に基づいた一方的な主張をすることも少なくない。そのため、主張の根拠が曖昧だったり、異なる意見を受け入れることが苦手だったりする学習場面も散見される。

2. テーマ・サブテーマ・教科の特質

	社会的事象を時間、空間、相互関係の視点で捉える －事実を基に、特色や意味、理論などの概念を追究する学びを通して－
特質	資料を的確に選択し、読み取った事実に基づいて社会的事象等の特色や意味などを客観的に考察したり、社会に見られる課題を把握して公平・公正な解決策などを構想したりすること。

3. 具体的な実践事項

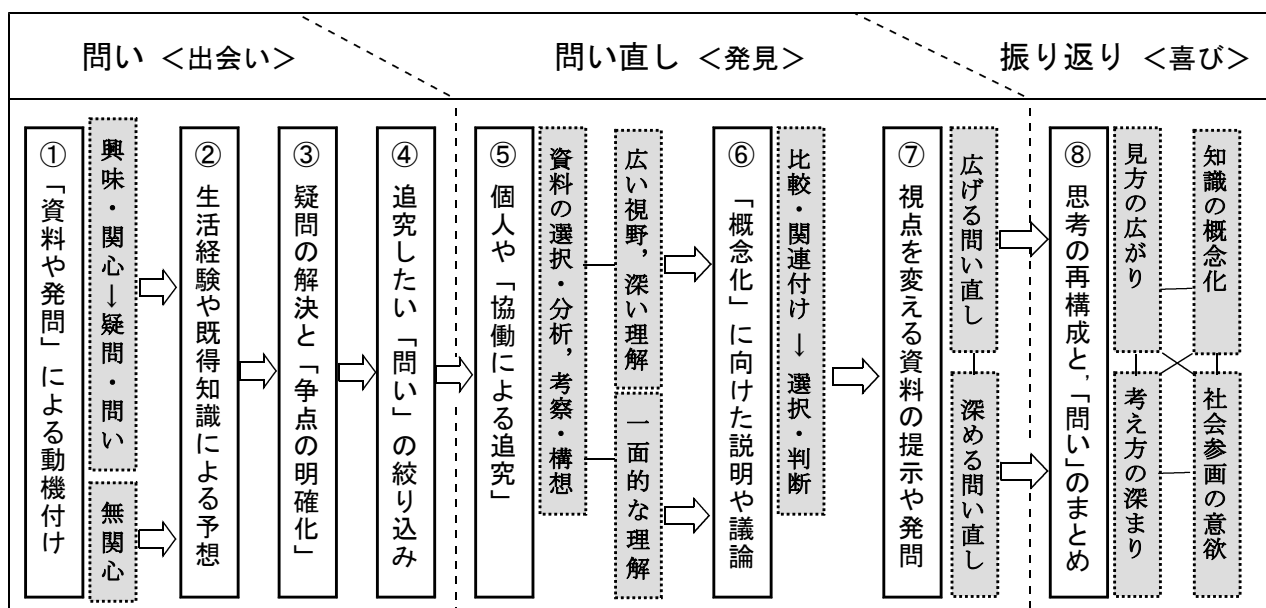
(1) 「学びのプロセス」の活性化

- ・【資料や発問】学習のねらいを基に、資料の情報量や見せ方、発問の大きさを絞り込む。
- ・【争点の明確化】生徒の予想や考え方を、時間的、空間的、相互関係の視点で整理する。
- ・【協働による追究】協働の目的を「仕事の分担」「対立の合意」「課題の解決」に分類する。
- ・【概念化】複数の知識や考え方、判断を、時間的、空間的、相互関係の視点で結び付ける。
- ・【問い直し】考察を活用する「広げる問い直し」の在り方についても実践を重ねる。
- ・【問いのまとめ】追究した「問い」について、自分なりの考えを表現する活動を工夫する。

(2) ICTの適切な選択・活用

- ・【資料による動機付け】資料（動画、写真、図表等）を効果的に提示し、瞬時に共有化する。
- ・【資料の選択・分析】SNSや映像資料等を活用し、必要な資料を収集できるようにする。
- ・【説明や議論】思考の可視化、共有化できるアプリを活用し、考え方を比較・関連付ける。
- ・【視点を変える資料】ねらいを踏まえて情報を絞り、見せ方を工夫して効果的に提示する。
- ・【思考の再構成】思考の過程を確認できるように、カメラ機能や録音等も活用させる。
- ・【問いのまとめ】学習履歴（スタディ・ログ）などの教育データの活用にも取り組む。

4. 学びのプロセス




II 具体的な実践事項について

(1) 「学びのプロセス」の活性化

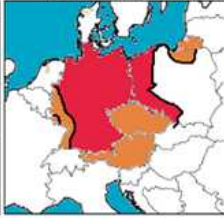
【資料や発問】学習のねらいを基に、資料の情報量や見せ方、発問の大きさを絞り込む。

3年生の授業の導入では、プレゼンテーションソフトを用いて、ナチス党が政権を取ってから始まるドイツ領の拡大について提示した。また、前時に学習した「もてる国」が領土を拡大していないことを想起させた。このように、時間の経過による事実の変化を提示するとともに、既習事項との差異を示すことにより、「なぜナチス・ドイツは領土を拡大したのか？」という疑問につなげた。

1935年までのドイツ領



1939年のドイツ領



【争点の明確化】生徒の予想や考え方を、時間的、空間的、相互関係の視点で整理する。

導入で示した問いに対し、予想を考えさせた。生徒の予想は、莫大な賠償金を背負っていること（相互関係）、資源の確保のための領土拡大（空間）、第一次世界大戦以来のドイツの経済力（時間）といった視点を伴っている。それらをまとめ、『もてる国』とドイツとの経済面の違いは何か。」という争点に明確化した。

T: 「なぜドイツは領土を広げたのでしょうか。」

S: 「第一次世界大戦で莫大な賠償金を背負っていて、資源や物資がほしかった」

S: 「土地を広げて資源を多くとって強い軍事国家にしようとした」

T: 「資源や物資面で不足しているということはドイツと『もてる国』はどんな面で違いがあるとと言えますか」

S: 「経済面です。」

【協働による追究】協働の目的を「仕事の分担」「対立の合意」「課題の解決」に分類する。

協働（グループ学習）が行われるのは、1つのグループだけでは解決できない大きな課題を分けて解決するとき（仕事の分担）、1つの課題への立場が分かれて1つにまとめなければならないとき、（対立の合意）、1つの課題について全員で解決に迫るとき（課題の解決）である。以上のうち、生徒が今どの活動を行っているのか意識化できるように、カードを黒板に掲示した。右図はその一例である。

問い なぜユニクロの商品は安いのか？

課題の解決

生産者 1000円

卸売業者 2000円

小売業者 3000円

消費者

運送費、倉庫費、保険費

ユニクロ

【概念化】複数の知識や考え方、判断を、時間的、空間的、相互関係の視点で結び付ける。

知識が複数集まると、それらが一般化されて概念が生まれる。右図は『もてる国』とドイツとの経済面の違いは何か。」という問いに対し、「土地」、「財源」、「失業者対策」の3つの視点で追究を行った様子。3つの視点をもとに資料を選び、「自国では解決できないこと」という概念を掴んでいる。この場合、用いた視点は「相互関係」である。

予想 資源を備える賠償金を負かる 土地を広げ産業を回復 強国になる

問い 『もてる国』とドイツとの経済面の違いは何か？

土地 土地の少ない(植民地領土が少い) 自国では解決できない

財源 賠償金(ワルサ条約) インフレーション 自国では解決できない

失業者対策 自由を奪う 軍用産業 ワルサ条約

概念 相互関係

【問い直し】考察を活用する「広げる問い直し」の在り方についても実践を重ねる。

「問い直し」には、1度解決された問いについて再考する「深める問い直し」と、1度解決された問いに基づいて生まれる別な疑問について考える「広げる問い直し」があると考え、今年度は後者を実践した。右図は、「問い」で相違点の追究を行ってきたことに基づき、「共通点は？」と問い直した様子を表した板書である。

時間 空間

問い直し 『もてる国』とドイツとの共通点は何か？

自国の国を最優先(自国第1主義)

国が一つ 被害を繰り返す

どこの国も領土を拡大している

【問いのまとめ】追究した「問い」について、自分なりの考えを表現する活動を工夫する。

「問い」に加えて「問い直し」で学んだ要素を踏まえ、「問い」に対する生徒個人の考えをまとめる。右図は、授業を通し、ヒトラーに対する評価が変わっていったことを示す生徒の振り返りである。

私は、ヒトラーはユダヤ人を迫害した悪者だと思っていました。しかし、ワルサ条約によって受けた大きなマイナスは自国だけで解決できるレベルのものではなく、「どうすることもできなかった」という背景もあつたのではないかと、新しい考えを持つことができました。ヒトラーがユダヤ人に対して行ったことは決して許されることではないし、それが最良の選択だったとも思いませんが、資料とともに、新しい視点を持つことができ、良かったと思います。手を挙げて

(2) ICTの適切な選択・活用

【資料による動機付け】資料（動画、写真、図表等）を効果的に提示し、瞬時に共有化する。

・大型モニタの活用

グラフや写真、プレゼンテーション、動画などの各種資料提示に用いることで、参加生徒全員に等しく情報を提示することができた。

・Teamsの活用

1年社会科では、学級ごとにチームを設定し、意見発表や情報共有の手段として活用した。事例としては、少人数グループで話し合った結論を「返信」することで瞬時の共有化を図り、他グループの意見も参考にしながら話し合いを深めた。



【資料の選択・分析】SNSや映像資料等を活用し、必要な資料を収集できるようにする。

・グーグルアースの活用

教師が地名を指定することで、生徒は自ら意欲的に検索し、様々な縮尺や角度で対象を観察していた。特徴的な自然や地形はもちろん、街並みや個別の建築物まで、臨場感をもって捉えることができていた。



【説明や議論】思考の可視化、共有化できるアプリを活用し、考え方を比較・関連付ける。

・デジタル教科書

1年地理で試験的に導入した。従来の教科書と併用し、生徒自身が選択して使用できるようにした。その結果、約半数の生徒がデジタル教科書を活用していた。拡大表示、重要語句解説、書き込み等の機能を活用する生徒が多く見られた。

【視点を変える資料】ねらいを踏まえて情報を絞り、見せ方を工夫して効果的に提示する。

・書画カメラ

大型モニタの機能に書画カメラを組み合わせることで、生徒が選択した資料や教師が見せたい部分を自在に拡大して提示することができた。これにより、情報共有にかかる時間を短縮することもできた。

【思考の再構成】思考の過程を確認できるよう、カメラ機能や録音等も活用させる。

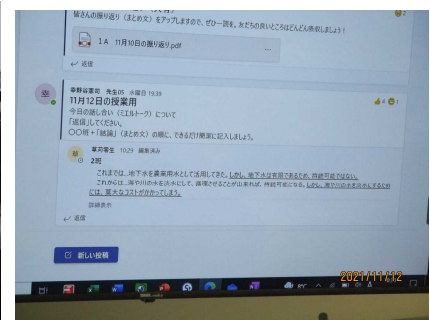
・Teamsの活用

授業終了時の板書を代表生徒が撮影して投稿することで、前時の振り返りに活用したり、欠席（あるいは遠隔参加）生徒がいつでもどこからでも参照してノートまとめに活用できたりした、等が挙げられる。

【問いのまとめ】〈ハード面〉

・Formsの活用

各学級の入力フォーマットを作成してアドレスをTeams上に掲載することで、生徒一人一人が授業（単元）の振り返りを入力できるようにした。教師は生徒の振り返りをExcelデータとして取り出せるため、一人一人にアドバイスを入力したり、まとめてから再投稿することで全員の振り返りを共有化したりすることができた。



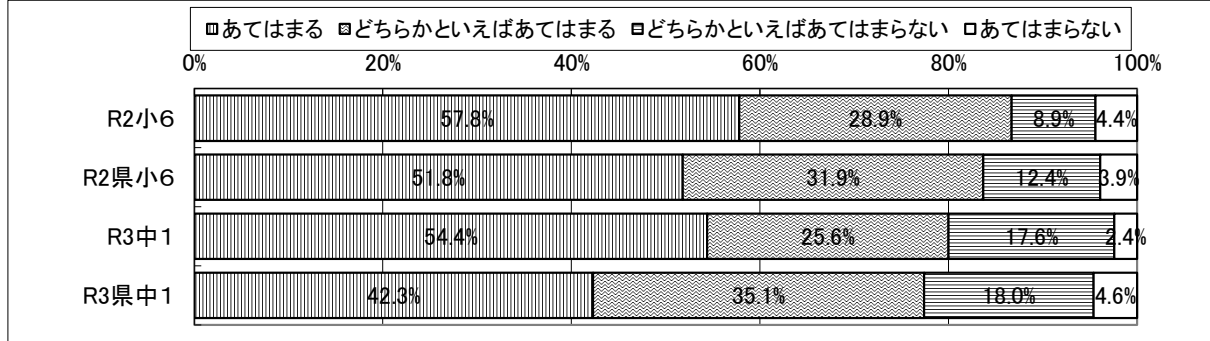
III 生徒の変容について

○1年生（県学習状況調査および学年独自アンケートの結果から）

1 情意面

- ・7月（学年独自アンケート）…社会科の授業に対する興味・関心を3段階評価した平均値は2.72（百分率で90.6）
- ・12月（県学習状況調査「社会の勉強は好きだ」）…大好き54.4%，好き25.6%，嫌い17.6%，大嫌い2.4%

社会科の授業を肯定的に捉えている生徒の割合は、県平均を上回っている。



2 通過率

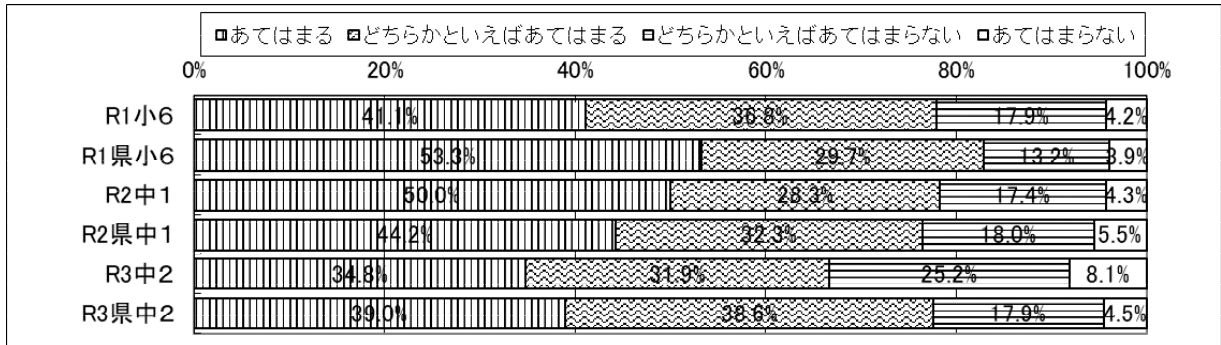
- ・全ての設問で県平均通過率を上回っている。
- ・R2小6：74.3%（県+3.5%）→R3中1附：80.4%（+15.1%）
R3中1：83.9%（+18.6%）

小6時に比べて通過率が向上し、県平均との差は拡大している。

○2年生（県学習状況調査から）

1 情意面

- ・県学習状況調査「社会の勉強は好きだ」
社会科の授業を肯定的に捉えている生徒の割合は、昨年度より11.6ポイント下がり、県平均を下回った。

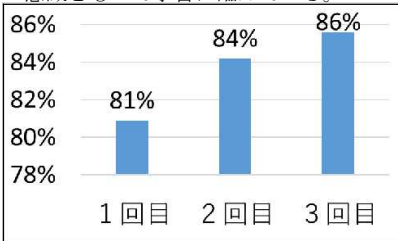


2 通過率

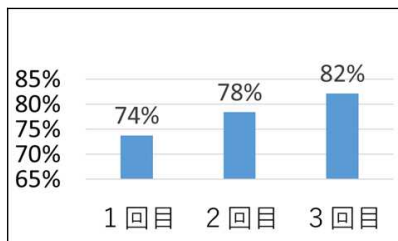
- ・全ての設問で県平均通過率を上回っている。
- ・R2中1附：73.3%（県+16.0%）→R3中2附：81.6%（県+20.1%）
中1時と比較すると、比県平均通過率+4.1である。

○3年生（学年独自のアンケートの結果から）

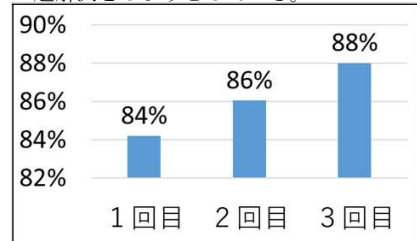
①社会科の学習に興味があり、課題意識をもって学習に臨んでいる。



②課題解決に必要な資料や結論に見通しをもって学習に臨んでいる。



③他者の意見をふまえ、よりよく課題解決をしようとしている。



「学びのプロセス」を活性化するため、「学びのプロセス」をカードにして黒板に掲示して授業を行う取り組みをの5月から本格化した。それに伴い、1ヶ月に1回ずつ、5月、6月、7月に行

った。アンケートの設問群は3つのグループに分かれており、①は興味と課題意識（「問い」）をもって授業に臨んでいるか、②は課題解決に必要な資料や結論に見通しをもっているか、③はよりよく、つまり批判的思考を伴って課題解決（「問い直し」）をしているかどうかを見取る内容になっている。結果を見ると、「学びのプロセス」の定着に伴い数値が向上していることが見て取れる。以上から、「学びのプロセス」の活性化は、一面的な主張や、主観や感情に基づいた一方的な主張をしたり、異なる意見を受け入れることが苦手であるという本校生徒の課題の解決に効果的であることが示唆される。

IV 来年度の社会科の教科経営

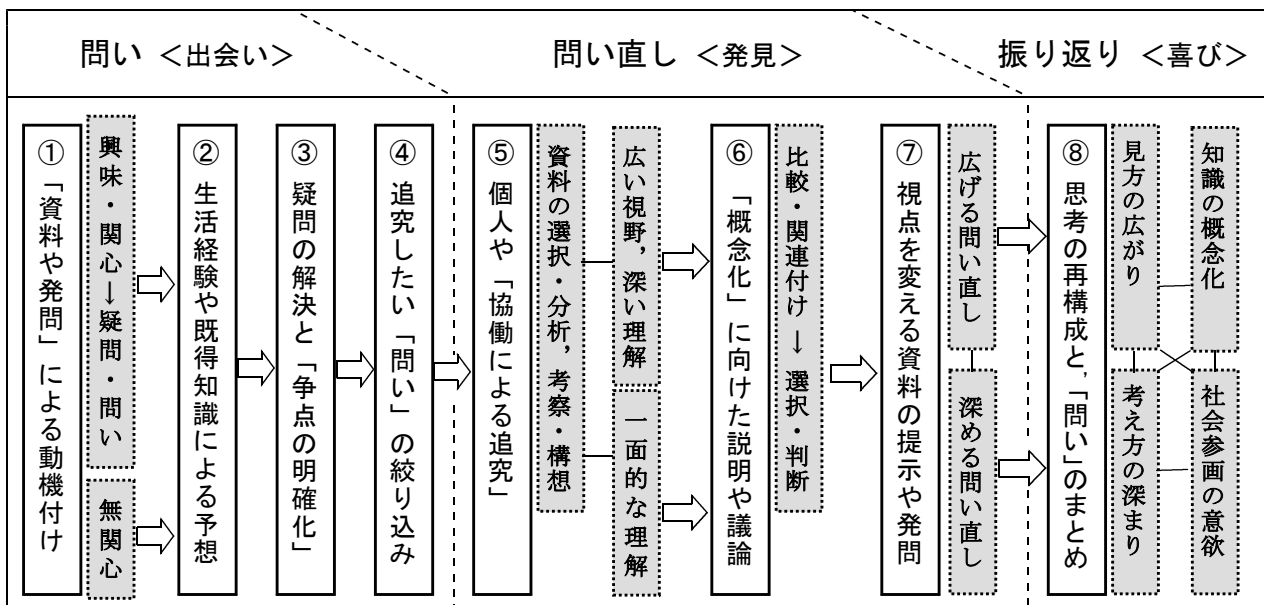
1. テーマ・サブテーマ・教科の特質

	社会的事象を時間、空間、相互関係の視点で捉える －主体的な「協働的な学び」を通して、批判的な「個別最適な学び」の実現を図る－
特質	資料を的確に選択し、読み取った事実に基づいて社会的事象等の特色や意味などを客観的に考察したり、社会に見られる課題を把握して公平・公正な解決策などを構想したりすること。

2. 具体的な実践事項

- (1) 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化を目指した「学びのプロセス」の活性化
「個別最適な学び」とは、答えの出ない問いに対して異なる考えのぶつけ合いを行う「協働的な学び」によって生み出されるものだと考える。そのために、昨年度から行ってきた「学びのプロセス」のうち、【協働による追究】と【問い直し】を異なる考えをぶつけ合う場として設定する。また、【問いのまとめ】では、【協働による追究】や【問い直し】に対する自分の考えをまとめるものとする。
- (2) 説明や議論、問いのまとめを行う手段としてのICTの活用
昨年度から行ってきたICT活用の目的のうち、【説明や議論】【問いのまとめ】を行うためのICT活用の方法を工夫する。そのために、チームズやフォームズを活用し、授業中の説明・議論や、問いのまとめをタブレットパソコン上で行う。

3. 学びのプロセス



I 今年度の数学科の教科経営

1. 本校の生徒の実態

数学について肯定的な感情をもつ生徒が多く、授業でも問題解決に意欲的に取り組む姿が見られる。また、諸調査の結果からも、数学的な知識や技能の習得率は高く、優れた学力をもっていることがうかがえる。一方、数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表現する力については個人差が大きく、課題が残っている。そのため、対話を通して事象を数理的に捉えて表現したり、図・数式・表などを相互に関連付けたりすることで、表現する能力を向上させる必要がある。

2. テーマ・サブテーマと教科の特質

	図・数式・言語で事実を数理的に解き明かす －数学のよさを視点に「なぜ」「本当に」が飛び交う学びを通して－
特質	既習事項を基に論理的に考え、新たな課題と関連付けること。具体的には、事象を数理的に捉えて問題を見出し、理想化したり単純化したりしながら考察した事象の本質を、数学的な表現を用いて論理的に説明すること。

3. 具体的な実践事項

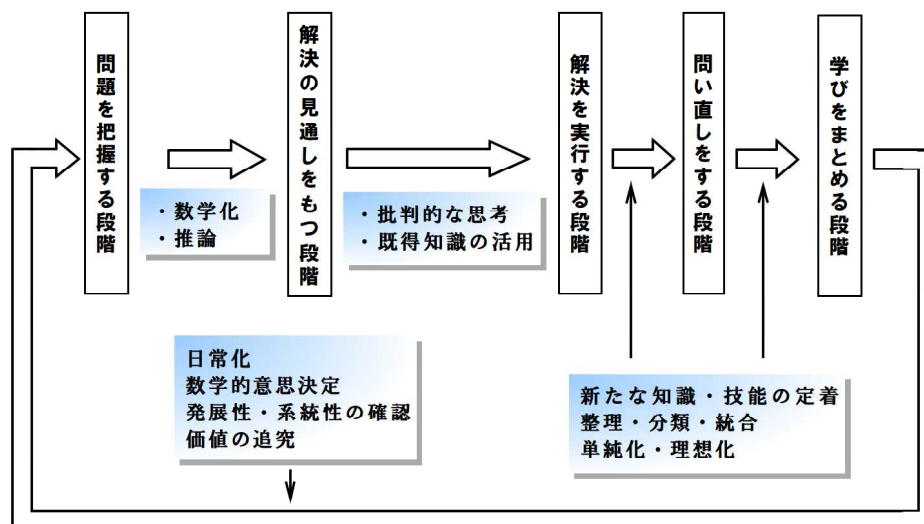
(1) 系統性や発展性、数学のよさを実感できる学びのプロセスの構築

「問題の解決を実行する段階」「問い直しをする段階」で、既習事項とどう関連付けたのか、課題を解決する上で何を根拠にしたのかを「ミエルトーク」によって明らかにする。その際、数学的な表現を用いて簡潔・明瞭・的確に伝え合うことができる力を育成したい。また、数学的表現を高めるために既習事項の「何に着目したか」という視点を授業の中に取り入れ実践していきたい。「学びをまとめる段階」では、既習事項を活用するよさに気付いたり、自分が働かせた見方・考え方を顕在化させたりできるよう、数学の特質やよさに着目することを促す自己評価のあり方を工夫改善したい。

(2) 説明場面、情報収集場面、振り返りの場面におけるICTの活用

ICTのよさは、数学的活動を視覚的に捉えることで楽しさを実感できることだけでなく、数学的対象の直接的な操作を可能にすること、再現性があること、試行錯誤を容易にできることなどがある。生徒がICTを活用し、数学的対象の直接的な操作を可能にすることによって、対話を通して事象と数学的な表現を関連付けることや、図・数式・表などを相互に関連付けたりすることを促進することにつなげたい。また、「情報を収集したり選択したりする」「自分の考えを文書にまとめたりする」「調べたことを表や図にまとめたりする」「わかりやすく発表したり表現したりする」「繰り返し学習したり練習したりする」こともできると考えられる。さらに、ICTは再現性があり、試行錯誤も容易にできるため、説明場面や振り返りの場面においても、有効に活用することで、多角的な省察力の向上も図りたい。

4. 学びのプロセス

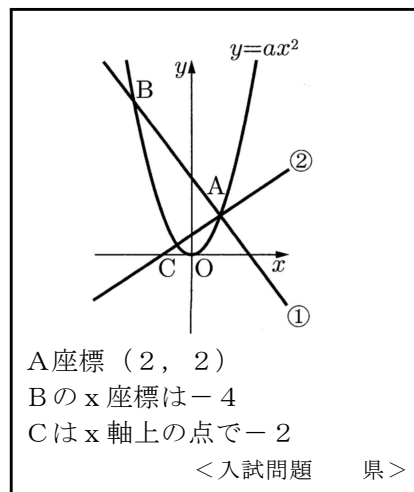


II 具体的な実践事項について

(1) 系統性や発展性、数学のよさを実感できる学びのプロセスの構築

① 系統性や発展性を実感できる指導（3年生「2乗に比例する関数」での実践）

「問題把握」「見通し」の段階で、生徒は与えられた条件をグラフの中に記入するだけではなく、B座標、C座標、 a の値、直線AB、ACの式をもとめまとめている。このことから、与えられた条件から、問題がどのように発展していくかを生徒自身が考え、主体的に学んでいることが分かる。また、「問い直し」の段階で、生徒が予測していない「見通し」を与える（この課題の場合は、直線ABとy軸の交点をDとしたとき、 $\triangle ABC$ の面積を2等分するDを通る直線の式を求める）ことで、「関数」の見方だけではなく、「図形」としての見方も必要であることに気付く。「問い直し」をグループ、一斉と段階的に行うことで、「面積からの解法」や「等積変形」といった様々な見方からの解法を共通理解し、これまで学習したことが1つの見方だけではなく、様々な見方から考えられるよさにも気付くことにつながった。



② 学習形態の工夫（1年生の実践）

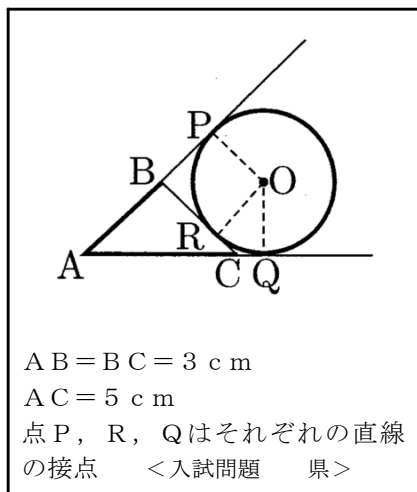
「解決の実行」「問い直し」の段階では、多様な学習形態をとることで、生徒の意見交流を活性化することができた。特に意識した学習形態は「自由交流」と「黒板前の一斉指導」である。自由交流は、生徒が焦点化した話合いの視点について、自由に移動して意見交換をする場面のことである。自由交流を取り入れることで、生徒同士「わからないな」「なぜ～になるの?」「本当に～なの?」などの発言が言いやすくなり、議論を活性化させることができた。また、黒板前の一斉指導は、自由交流で自分やグループの意見をもちよって全体で学び合うときに、黒板の前に集まって全体議論をすることである。生徒と教師の距離や生徒同士の距離が近くなることで、必要な時に生徒同士が意見交換することができたり、生徒の表情や発言を見取りやすくなった。そのため、生徒の発言のコーディネートをしやすくなるメリットがあった。



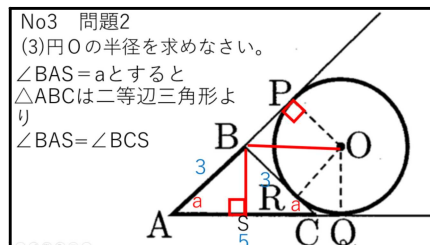
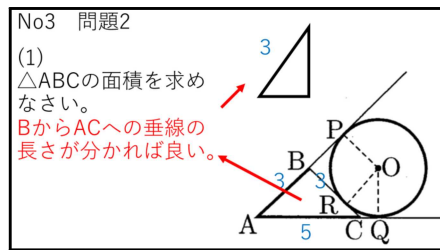
(2) 説明場面、情報収集場面、振り返りの場面におけるICTの活用

① パワーポイントの活用（3年生の実践）

今年度3年生では、1年を通して学習課題をパワーポイントで示し、モニターを用いて学習を進めた。ICTを活用することのメリットは、視覚的に課題を把握できる点がある。例えば「関数」の速さや動点の問題では、どのように変化していくかの「見通し」をもった後で動きの確認をICTを用い確認することで、自分の「見通し」の確認になったり、予測できなかった生徒へ、これまでは一人一人机間指導してきたことがヒントカードとして一斉に伝えられるというメリットにつながった。また、下の「図形」の問題を考える際も、「見通し」をもった後、一人一人の情報共有することで、課題解決につなげていった。特にICTでは、どこに着目すべきかがはっきり見える点で有効に活用できた。



「求められそうなものは？」
 「何が分かれば良い？」
 「注目するところは？」



② コラボノートの活用（2年生の実践）

2年生では、コラボノートを活用した。コラボノートでは、1つのシートに生徒が同時に書き込むことができるため、ICTの良さである瞬時の共有化を生かすことができた。特に、「解決の実行」や「問い直し」の段階では、自分と他者の考え方をすぐに比較することができたことにより、新たな考えに気付くことができた。また、「学びをまとめる」段階では、振り返りも全員で共有することで、生徒同士で友達のよさを称賛する態度を醸成することができた。

1番 硬貨1と硬貨2 名前をつけよう！	2番 硬貨Aが表、硬貨Bが裏と 硬貨Aが裏と硬貨Bが裏 は違う	3番 コインをそれぞれ区別し てことが大切だね。そう するといは2パターンにな るからイの方が出る確率 が高いね。
7番 方法が3通りだけで硬貨 のなるパターンというも のは4つありその中から なる確率だから4分の何とい う風になる。	8番 コイン①と②で区別して 考える	9番 ①
16番 あることがらの起こらな い確率について学習して 分からないところがあっ たのでしっかり復習した いと思う。	17番 出ない確率は1から引け ばいいと分かったのでよ かった。 確率にはダブるものやそ のままのものがあるの で見分けをしっかりと したい。	18番 約分を忘れて答えを出して しまう時があるのでそこに気 を付けたい。 Aの起こらない確率につい ても全通りを考えてからAの 起こる確率を引くことを 忘れずにしたい。
24番 選ぶものの順番が関係な い場合は、普通に樹形図 を書くとかぶりが出てく るので、気をつけたいと いけないとわかった。問 題を解くときは順番が関 係あるのか見極めたい。	25番 余事象の考え方を生かし て、より効率的に確率を 求められるようになった。 確率の重複についても 気を付けたい。	26番 人数や班を求める問題 では、かぶりを考えて解 くことが大事だと分かり ました。

③ C-Learning の活用（2年生の実践）

また、C-Learning を活用した取り組みにより、資料も共有化することができた。本時の評価問題に取り組んだ生徒に、C-Learning の教材倉庫に本時、本章に関連する応用問題を公開することで、自ら進んで意欲的に学習を進め、事象を数学化したり、数学的に解釈したり、数学的に表現したりする技能を身に付けることができた。



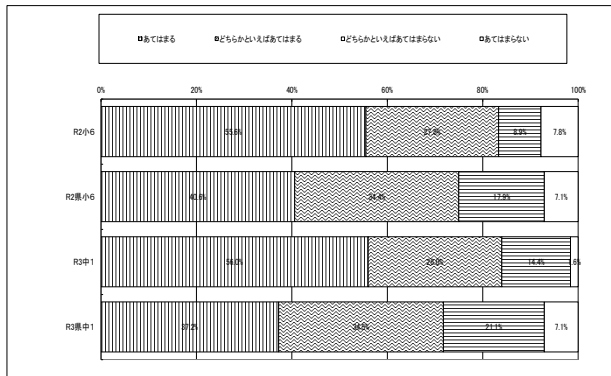
III 生徒の変容について

「令和3年度秋田県学習状況調査」において、数学の情意面の結果は次の通りである。ここから、数学に対して肯定的な感情をもっている生徒は、1年生、2年生ともに全体の8割を超えていることがわかる。また、中学校1年生においては、「①内容に興味があつておもしろい」が昨年度と比較し9.9ポイント、中学校2年生においては、「⑥考えることが楽しい」が昨年度と比較し11.4ポイントそれぞれ上昇しており、取り上げる問題や提示の仕方、学びのプロセスを構築したことによる考察力の高まりなどがこの結果に影響を与えていると考えられる。

また、数学の学習に対してマイナスのイメージを持っている生徒の理由に注目すると、両学年ともに「⑭不得意」が一番高く、「①内容に興味がない」や「②わかりにくい」が少なくなっている。こ

これは、生徒の「わかりたい」「もっと力をつけたい」という思いが現れている結果であると考えられる。

○1年生 「数学の勉強は好きだ」



数学が大好き・好きの理由 (右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

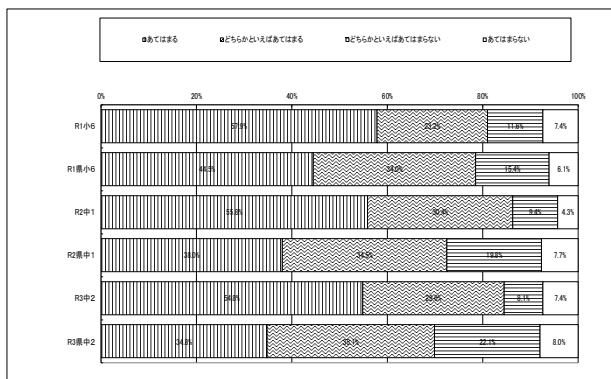
学年	①内容に興味 があるとおも しい	②わかり やすい	③将来、社会 に出たときに 役立つ	④生活の中で 役立つ	⑤人とのか かわりの中 で役立つ	⑥考えるのが 楽しい	⑦得意	小計
R2 小6	13.3 % 5.7	5.6 %▲ 3.7	18.9 % 2.1	11.1 %▲ 0.1		26.7 % 8.8	6.7 %▲ 4.0	82.3 % 8.8
R3 中1	23.2 % 14.5	12 % 0.7	10.4 %▲ 3.7	4 %▲ 3.9		22.4 % 4.4	10.4 % 1.1	82.4 % 13.1
R4 中2								
R5 中3								

数学が嫌い・大嫌いの理由 (右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	⑧内容に興 味がな い	⑨わか りに くい	⑩将来、社会 に出たときに 役立たない	⑪生活の中で 役立たない	⑫人とのか かわりの中 で役立た ない	⑬考えるのが めんどう	⑭不得意	小計
R2 小6	1.1 % 1.3	1.1 % 2.9	0 % 0.1	2.2 %▲ 2.1		2.2 % 1.1	6.7 % 7.5	13.3 % 10.8
R3 中1	0.8 % 1.5	0.8 % 4.4	0.8 %▲ 0.5	0 % 0.2		0.8 % 2.2	12 % 4.5	15.2 % 12.3
R4 中2								
R5 中3								

※⑭その他の%を除く

○2年生 「数学の勉強は好きだ」



数学が大好き・好きの理由 (右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	①内容に興 味があ るとお もしい	②わか り や す い	③将来、社会 に出たときに 役立つ	④生活の中で 役立つ	⑤人とのか かわりの中 で役立つ	⑥考えるのが 楽しい	⑦得意	小計
R1 小6	9.5 % 1.2	9.5 % 0.6	15.8 %▲ 2.3	6.3 %▲ 6.1		28.4 % 9.9	11.6 % 0.8	81.1 % 4.1
R2 中1	9.5 % 2.2	8.8 %▲ 1.0	6.6 %▲ 8.4	8.8 %▲ 1.1		23.4 % 5.2	21.9 % 13.0	79 % 9.9
R3 中2	14.1 % 4.9	7.4 %▲ 1.7	7.4 %▲ 5.2	5.9 %▲ 0.4		34.8 % 13.3	12.6 % 4.0	82.2 % 14.9
R4 中3								

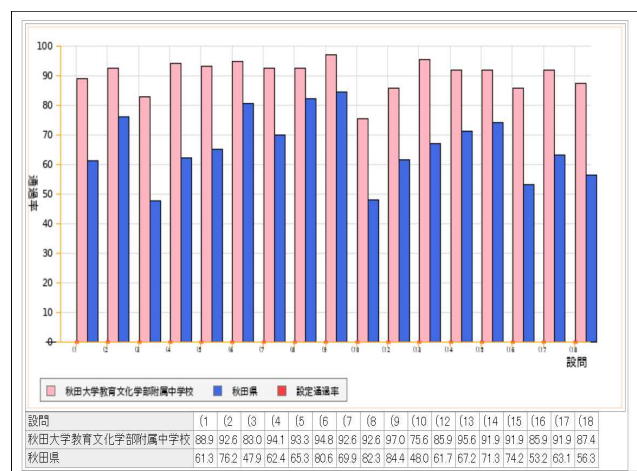
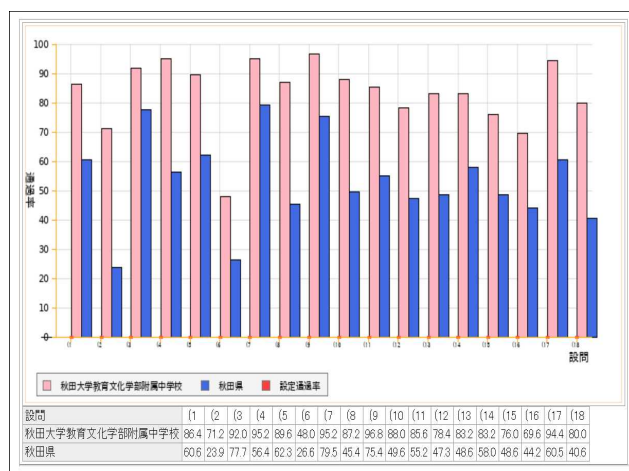
数学が嫌い・大嫌いの理由 (右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	⑧内容に興 味がな い	⑨わか りに くい	⑩将来、社会 に出たときに 役立たない	⑪生活の中で 役立たない	⑫人とのか かわりの中 で役立た ない	⑬考えるのが めんどう	⑭不得意	小計
R1 小6	2.1 %▲ 0.1	1.1 % 3.0	0 % 0.2	1.1 %▲ 1.0		5.3 %▲ 2.1	9.5 % 1.5	19.1 % 1.5
R2 中1	2.9 % 0.0	2.2 % 2.8	0 % 0.5	1.5 %▲ 1.2		2.9 % 0.8	4.4 % 10.4	13.9 % 13.3
R3 中2	1.5 % 1.4	0.7 % 5.0	0 % 0.7	0.7 %▲ 0.5		2.2 % 1.3	8.9 % 7.3	14 % 15.2
R4 中3								

※⑭その他の%を除く

また、同調査からは、数学的な知識・技能や思考力が高いことが読み取れる。表現力についても、授業において、自分の言葉で表現しようとする姿が多く見られるようになった。これは、多様な学習形態を設けたことに起因する結果であると考えられる。

一方で、同調査からは用語の理解に関する設問や、文章の読み取りを必要とする設問についての正答率が、他の設問と比較すると相対的に低いことがわかる。授業においても、グループでは活発な意見交流をするものの、全体場で数学の用語を使って簡潔に説明することに苦手意識をもっている生徒が少なくない。用語を適切に使用することによって、簡潔かつわかりやすい説明ができるということを実感し、そのような方法で表現しようとする態度を育成する必要がある。



ICTを活用した種々の取り組みもまた、情意面により影響を与えているものとする。前述の取り組みを含む、さまざまな活用方法を通して、ICTを手段としてさらに活用できる態度を育成する必要がある。

IV 来年度の数学科の教科経営

1. テーマ・サブテーマと教科の特質

	図・数式・言語で事実を数理的に解き明かす －数学のよさを視点に「なぜ」「本当に」が飛び交う学びを通して－
特質	既習事項を基に論理的に考え、新たな課題と関連付けること。具体的には、事象を数理的に捉えて問題を見出し、理想化したり単純化したりしながら考察した事象の本質を、数学的な表現を用いて論理的に説明すること。

2. 具体的な実践事項

(1) 数学的な見方・考え方や、数学のよさ・本質をいかす学びのプロセスの運用

生徒の「なぜ?」「本当に?」という問いを生かしながら学びのプロセスを回すことを心がける。プロセスを回すにあたり、特に次の点に力を入れたい。

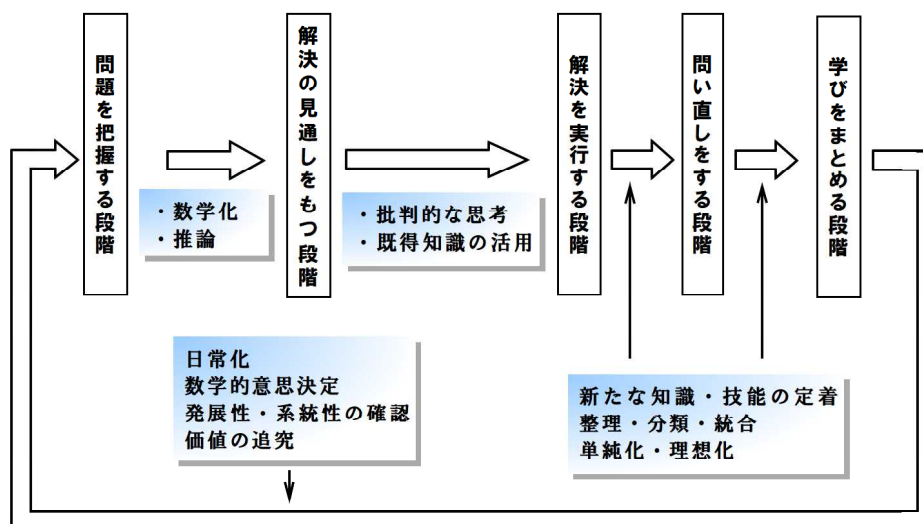
- ①「解決を実行する段階」や「問い直しをする段階」では、数学の用語を使ったり、数学の見方・考え方および良さと関連付けながら説明する活動を取り入れる。文章の数や発表時間に制約を設けることで、簡潔に説明する力を育成する。
- ②数学的な見方・考え方や、数学のよさ・本質のカードを活用した授業展開を意識する。課題解決に行き詰ったときによりどころとなるように、常に提示しておくことも心がける。また、「一般性」「効率性」など、数学の本質に関わる用語について、その言葉の意味を生徒と意見交換しながら定着を図りたい。
- ③「学びをまとめる段階」においては、数学的な見方・考え方や数学のよさ・本質、本校で育成する資質能力を視点としながら振り返る活動を取り入れる。また、「つぎにどんなことができそうか?」「どのようなことを調べたいか?」等の問いかけを通して、次時につながる問いを生徒から引き出し、「学びをまとめる段階」から、次の「問題を把握する段階」へとつなげられるようにしたい。

(2) よさを生かしたICTの効果的な活用法の構築

ICTのよさは、瞬時の共有化ができること、試行を繰り返すことができること、そして思考を可視化できることにある。生徒がICTを活用し、自らの考えを表現しそれを共有することや、数学的対象の直接的な操作をすることを進めたい。また、事象と数学的な表現を関連付けることや、図・数式・表などを相互に関連付けたりすることなどを可視化することにもつなげたい。

これまでの実践で効果的であった取り組みにとどまることなく、様々な活用法を積極的に取り入れ、身に着けたい力に対してどのようにICTを活用したらよいかについて、そのつながりを構築したい。

3. 学びのプロセス



I 今年度の理科の教科経営

1. 本校の生徒の実態

諸調査では、「観察・実験に興味がある」「考えるのが楽しい」と感じている生徒の割合が高い。観察・実験の結果から分析・解釈し結論を導く科学的思考力も高い。授業においても、科学用語を用いて説明しようとする姿が見られる。

しかし、予習などで得た知識に頼った主張をすることが多く見られ、本質的な部分を根拠として説明する問い直しの場面で自信をもって主張できないことが課題である。質的・量的な関係や、時間的・空間的な関係に視点をおいた「ミエルトーク」による話し合い活動を繰り返し行う中で、仲間と共に科学的に探究していく態度は高まってきている。

2. テーマ・サブテーマと教科の特質

自然の事物・現象を科学的な視点や方法で探究する －観察・実験の結果を問い直し、分析・解釈を深める学びを通して－	
特質	観察・実験を通して自然の事物・現象を科学的に探究すること。具体的には、観察・実験の結果を根拠として仮説の妥当性を検討することにより、様々な知識がつながり、より科学的な概念が形成され、その概念が次の学習や日常生活などにおける課題の発見や解決の場面で働くこと。

3. 具体的な実践事項

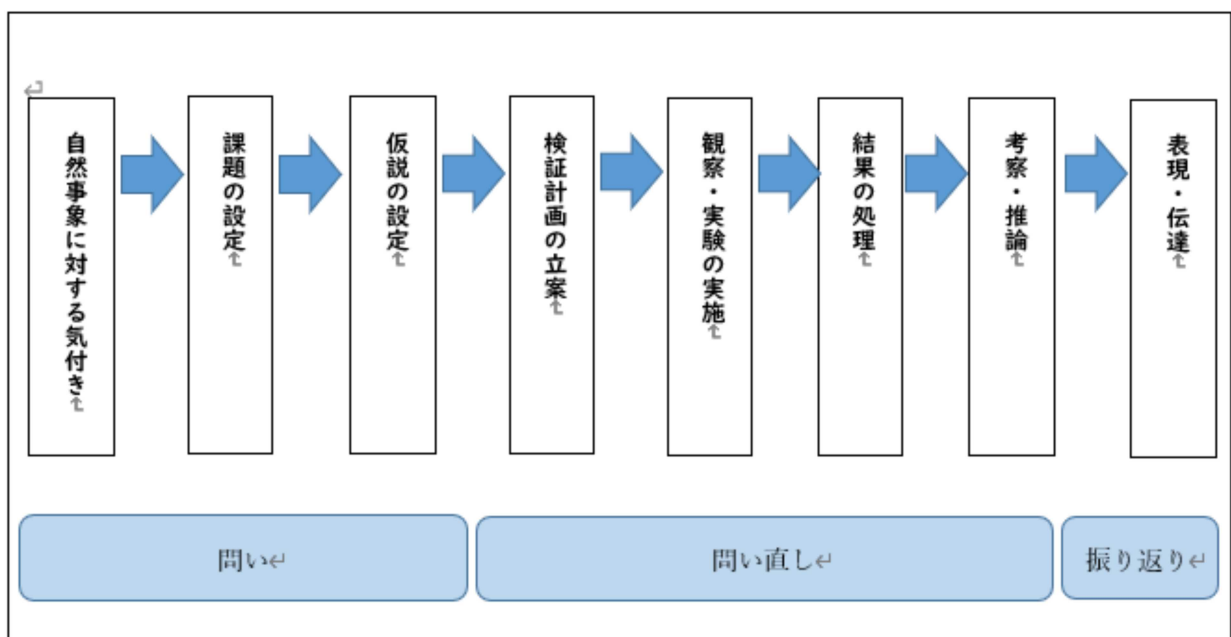
(1) 分析・解釈が深まる「問い直し」の工夫

- ・学習集団全体の課題意識を高めるために課題提示を工夫したり、既習内容を科学的根拠として課題解決の見通しをもたせたりする。また、少人数もしくは全体での話し合いの場を設定したり、発問の工夫をしたりしながら「問いの共有化」を実践する。
- ・「問い直し」で根拠を示して科学的に考える機会を設定し、自分の考えを整理したり、説明したりすることができるように、図やモデルなどのツールを工夫する。また、見方・考え方のカードを活用し、どの視点で「問い直し」をしたのかを可視化できるようにする。

(2) ICTの活用による科学的な視点の提示や転換

- ・ICTを活用し、実生活では見ることのできない視点を提示することで、知的好奇心を喚起したり、予想や仮説の妥当性の検討や他者の意見を批判的に思考したりすることにつながる。
- ・これまでは再現することが難しかった観察・実験の過程や結果を画像や動画に記録し、試行の繰り返しを行うことで、より深い分析・解釈ができるようにする。

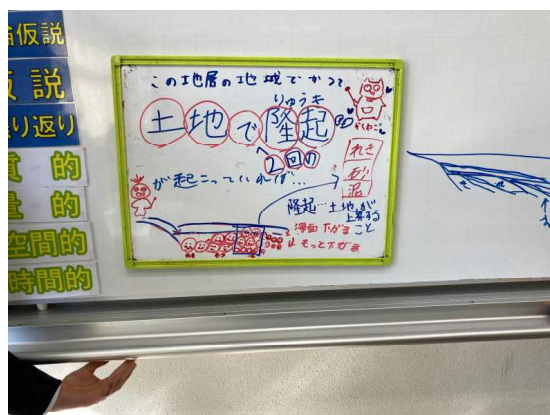
4. 学びのプロセス



II 具体的な実践事項について

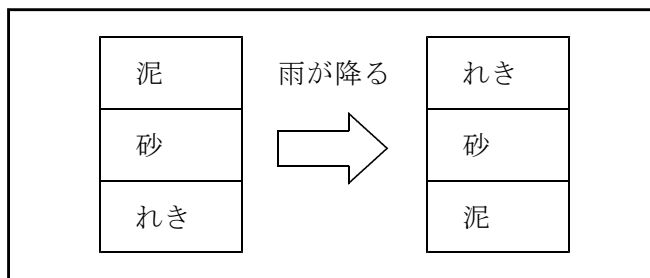
1 年生

(1) 分析・解釈が深まる「問い直し」の工夫



「大地の変化」

「泥→砂→れきの順番で重なった地層は、どのようにしてできあがったのか」を学習課題にして実践を行った。マーケティングディスカッションの手法を用いて、一度グループで話し合った後、近くのグループの意見から学びを得て仮説の精度を高めていった。



A は初期段階では、雨が降ることによって、小さな粒子で構成されている泥や砂がれきの間をすり抜けていくことで泥→砂→れきの順番の地層ができあがるという仮説を立てていた。しかし、周りとの交流を重ね、2度の隆起と3度の洪水がくり返されたことが原因であるという仮説に修正できた。これは、空間的視点・時間的視点・量的視点が A の中ではたらしき整理・再構成されたためであると考えられる。まさに、生徒同士の問い直しが有効に機能した例である。

(2) ICTの活用による科学的な視点の提示や転換



「身のまわりの物質」

再結晶・蒸留等の実験の課程や結果を何度も見返す「試行のくり返し」としてタブレットの録画機能を活用した。硝酸カリウムが温度変化によって徐々に結晶化していく様子や、エタノールと水の混合物が一気に温度変化していく一瞬の様子をくり返し見ることによって、細部にまで目が届き、深い分析や解釈につながっていった。また、生徒発表の場面で Teams を用いて、動画を共有する「瞬時の共有化」としても、有効活用できた。「動画のおかげでとても分かりやすかった」といった振り返りが多く見られた。

「学習のまとめ」や「振り返り」を共有するためにコラボノートを活用した。これは「瞬時の共有化」を目的としている。「学習のまとめ」や「振り返り」は授業の終末部分で行われるが、その際に互いの考えを、一瞬で共有し合えることで、次時へ意欲と新たな問いを作り上げていくきっかけとなった。

また、コラボノートの使用回数を重ねるたびに、生徒の文章が少しずつ長くなる傾向が見られた。これは、自分の考えを他に向けて分かりやすく発信しようとしている前向きな気持ちの表れであると考えられる。つまり、自己有用感や自己肯定感の高まりにも結びつく取り組みであると言える。

10番 三橋 光輝 川口の底から深く、泥-砂-れきの順に地層が重なった。河川に近くなった川底に土砂がれき-砂-泥の順に土砂が堆積した。	11番 吉村 颯太郎 川口の底から深く、泥-砂-れきの順に地層が重なった。河川に近くなった川底に土砂がれき-砂-泥の順に土砂が堆積した。	12番 金 聖那 れき-砂-泥の順で地層が重なっている。河川の底から深く、泥-砂-れきの順に地層が重なった。	13番 佐藤 守平 大雨が降って地層が崩れ、その上にまた地層が重なった。	14番 佐藤 聖哉 れき、砂、泥の順に地層が重なった。その間に地層が崩れて土砂がれき-砂-泥の順に地層が重なった。その間に地層が崩れて土砂がれき-砂-泥の順に地層が重なった。	15番 鈴木 湧司 れき、砂、泥の順に地層が重なった。その間に地層が崩れて土砂がれき-砂-泥の順に地層が重なった。	16番 中澤 拓郎 地層が海面が下がったから地層のれきの部分が見えて、そのおとに洪水で砂の上にれきができてそれが降り落ちて高砂の層が重なった。	17番 二田 中ずき kaiennosagaru れき、砂、泥の順に地層が重なった。その間に地層が崩れて土砂がれき-砂-泥の順に地層が重なった。	18番 本郷 玲生 海面が下がった、土がたたり、河川の底から深く、泥-砂-れきの順に地層が重なった。	19番 藤田 博也 地層が崩れ、海面が下がるの地面が上がるかして、れき-砂-泥の層になる。	20番 安岡 啓明 れき、砂、泥の順に地層が重なった。その間に地層が崩れて土砂がれき-砂-泥の順に地層が重なった。
--	---	---	---	--	--	--	--	---	--	--

2年生 「電気の世界」 秋季公開研の実践より

(1) 分析・解釈が深まる問い直しの工夫

課題解決にあたり、曖昧な点を補うための追加実験や班同士のマーケティングディスカッションを行うことで、根拠の妥当性を高められるようにした。マーケティングディスカッションを通じて情報交換を行い、班ごとの分析・解釈の違いに触れることにより、新たな視点に気付くと共に、確かな根拠に基づいて結論を導こうとする姿が見られた。既習事項をもとに理論仮説を立て、その理論を実証するための作業仮説を考え、検証実験を行い、その結果を分析・解釈して結論を導く活動は、古の科学者の思考過程を体験するものであり、まさしく理科の「見方・考え方」をはたらかせながら、根拠をもとに論理的に説明する力を培うことにつながったと考える。今後の課題としては、中学校で学習する理科の中でどの単元や題材がこのような追体験をさせるのにふさわしいものかを洗い出し、どう展開すれば生徒たちに十分な力をつけることができるかを検討することである。

(2) ICTの活用による科学的な視点の提示や転換



ICT機器を用いて実験を静止画や動画で記録することで、試行の繰り返しを可能にし、結果の分析・解釈に活用した。また、班ごとに分析・解釈した資料をデジタル化することにより、思考の可視化や瞬時の共有化をスムーズにできるようにした。今回の学習では、小単元を通して、ICT機器をフルに活用することを意識した。Zoomを用いてデジタルミエルトークを行ったり、実験を静止画や動画で記録することで、試行の繰り返しを可能にし、結果の分析・解釈に活用したりした。また、班ごとに分析・解釈した資料をデジタル化してTeamsにあげることにより、思考の可視化や瞬時の共有化をスムーズにできるようにした。これによって

生徒たちは、タブレットをはじめとするICT機器を活用する意義を実感し、指示がなくても必要に応じてこれらの機器を活用していこうとする意欲が高まった。一方で、活用能力には個人差があり、班で活動する場合にはどうしても得意な生徒が作業を進めてしまう傾向にある。今後を見据えたとき、得意、不得意に関わらず、当たり前のようにICT機器を使う時代になっていくことを考えれば、すべての生徒にそれらを活用できる力をつけておく必要がある。他教科とも連携を図りながら、生徒たちに何ができて何が未経験なのかを把握し、活用体験の機会を増やすと共に、理科においては自分で必要感をもって、必要なときにICT機器を使う習慣を身に付けさせたい。



↑ マーケティングディスカッション及び最終発表に用いられた生徒作成のプレゼン資料例

3年生



(1) 分析・解釈が深まる「問い直し」の工夫 「金星の見え方」

「問い直し」で外惑星も満ち欠けをすることを取り上げ、「なぜ金星は地球の内側を公転しているといえるのだろうか」を学習課題にして実践を行った。前時に学習した概念を根拠にして仮説や実験の説明する活動を取り入れた。

仮説→検証→考察のプロセスの中で、マーケティングディスカッションを用いて多様な意見に触れながら問い直すことで、仮説や検証方法の妥当性を検討したり、考察したりすることを通して理科的な見方や考え方を深めた。内惑星だと考えると、見える時間が限られることや見え方に大きな違いが出てくることなど、問い直しの仮説段階で議論が白熱した。火星の満ち欠けの画像や、金星の実験で使用した道具を使うことで、外惑星との違いを明確にした。

(2) ICTの活用による科学的な視点の提示や転換 「日食と月食」

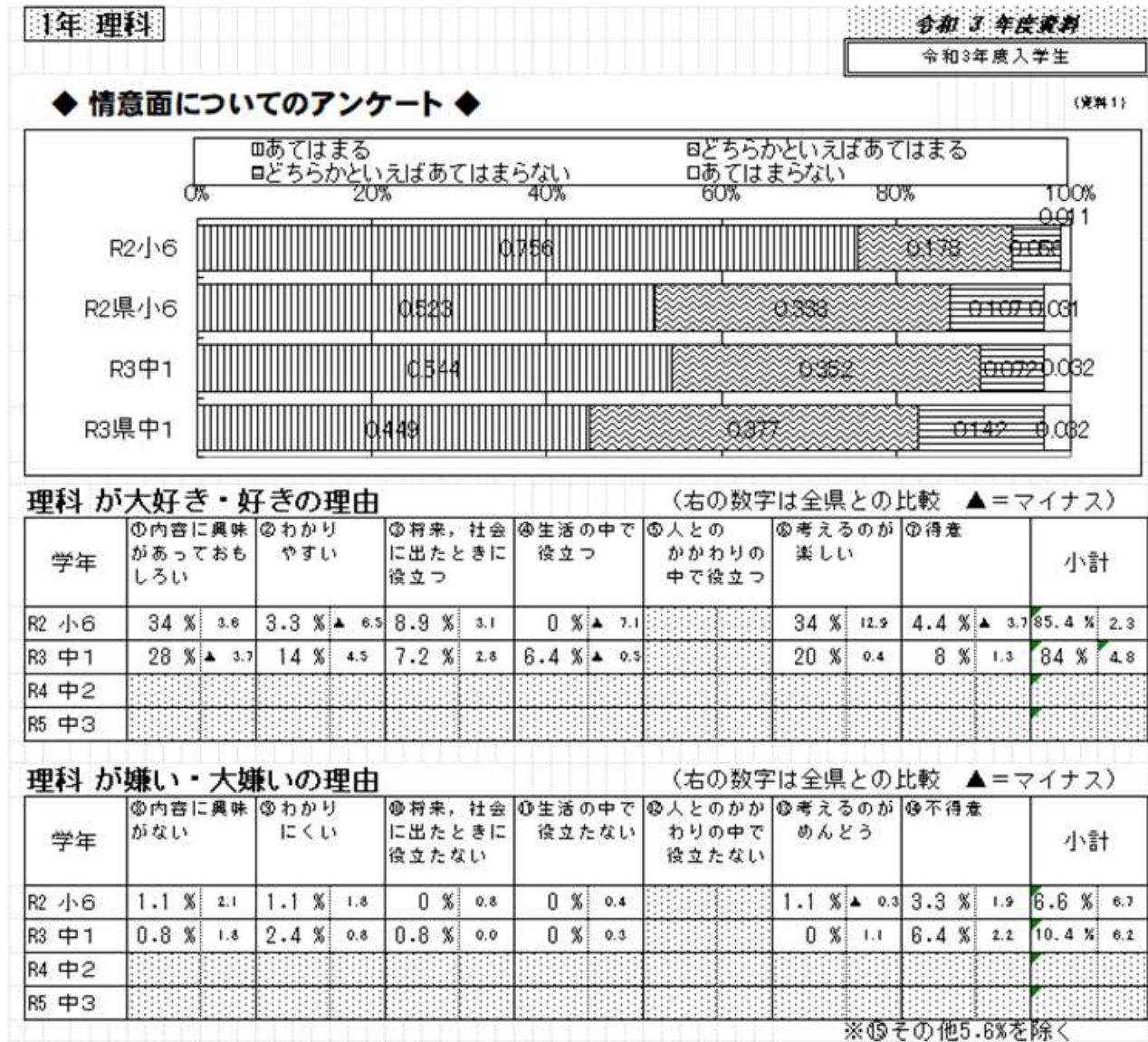
四次元ビューワーMitakaを一人一人が使用することで、地球上で今年度起こった日食や月食を確認した。また、モデルを使った実験では、カメラを使って視点移動する生徒も多かった。宇宙空間に視点を移動させるなど、実生活では見ることのできない視点を提示することで、天文学の基礎知識と地球を舞台にした相対的な見方や考え方（視点移動に伴う空間認識能力）を働かせて、観察・実験の結果を根拠として説明する力が伸びたと感じた。

また、大型スクリーンとの瞬時の共有化によって、生徒自身が作成した資料を全体で共有し予想や仮説の妥当性の検討をスムーズに行うことができた。

Ⅲ 生徒の変容について

諸調査からは、観察・実験の結果から分析・解釈し結論を導く科学的思考力が高く、授業においても、科学用語を用いて説明しようとする姿が見られる。しかし、実際の授業の中では正しい言葉を使って科学的事象を説明したり、器具や道具の正しい使い方ができていなかったりする場面が多く見られる。

理科に対する情意面に関する「令和3年度秋田県学習状況調査における生徒質問紙の結果」は次のようになっている。



○ 1年生

「理科の勉強は好きだ」の質問に対して「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」の割合は89.6%と、全県平均の82.6%と比べて7.0%上回った。しかし、小学校6年生時と比較すると3.8%低くなっている。これは、学習内容の難易度が上がったことや質量パーセント濃度の計算など少数の割りきれない問題への苦手意識から、不得意者の割合が増加したことが原因であると考えられる。また、設問の通過率からは、器具の正しい使い方や規則性の活用に関して課題が見られた。器具の使い方の意味を押さえてから使用させるとともに、実験結果を一覧にして提示し、生徒が課題及び仮説と対応した考察を行えるよう、探究の過程の振り返りにつながる視点を与えるようにしていきたい。ICTを用いた実験の録画は探求の課程を振り返る上でとても有効である。今後もICTのもつ特徴を学習の「ねらい」の達成に向けて効率よく活用していきたい。

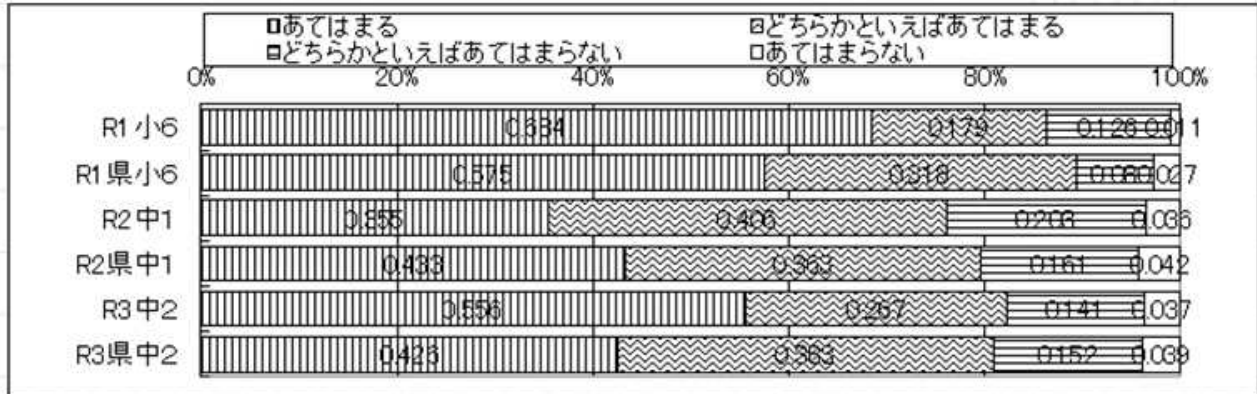
2年 理科

令和3年度資料

令和2年度入学生

◆ 情意面についてのアンケート ◆

(資料1)



理科 が大好き・好きの理由

(右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	①内容に興味 があっておもしろい	②わかり やすい	③将来、社会 に出たときに 役立つ	④生活の中で 役立つ	⑤人との かかわりの中 で役立つ	⑥考えるのが 楽しい	⑦得意	小計
R1 小6	28.4% ▲4.0	2.1% ▲7.7	3.2% ▲1.3	2.1% ▲4.9		41.1% 17.8	4.2% ▲4.8	81.1% ▲4.7
R2 中1	9.5% 2.2	8.8% ▲1.0	6.6% ▲8.4	8.8% ▲1.1		23.4% 5.2	21.9% 13.0	79% 9.9
R3 中2	27% ▲4.1	9.6% ▲0.1	5.2% ▲0.1	6.7% ▲1.6		22% 5.5	8.1% 1.6	78.5% 1.2
R4 中3								

理科 が嫌い・大嫌いの理由

(右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	①内容に興 味がな い	②わかり にくい	③将来、社会 に出たときに 役立たない	④生活の中で 役立たない	⑤人との かかわりの中 で役立たない	⑥考えるのが めんど う	⑦不得意	小計
R1 小6	2.1% 0.2	3.2% ▲1.0	0% 0.5	0% 0.4		8.4% ▲7.6	5.3% ▲1.3	19% ▲8.8
R2 中1	2.9% 0.0	2.2% 2.8	0% 0.5	1.5% ▲1.2		2.9% 0.8	4.4% 10.4	13.9% 13.3
R3 中2	1.5% 1.9	2.2% 1.7	3% ▲2.1	0% 0.4		0.7% 0.7	11% ▲2.8	18.5% ▲0.2
R4 中3								

※⑥その他3%を除く

○ 2年生

「理科の勉強は好きだ」の質問に対して「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」の割合は82.3%と、全県平均の80.9%と比べてわずかに上回った。また、昨年度と比較すると6.2%上昇している。学習内容の難易度が上がっているにも関わらず、このような結果になったのは、これまで積み重ねてきた理科の「見方・考え方」をはたらかせながら考える学習の成果であると考え。設問の通過率からは、力を矢印で表すことや実像と虚像の見極め、光の進み方の作図に関して課題が見られた。加えて、問題文を正しく読み取り、何について問われているのかを判断する力が必要であると考え。目に見えにくい事象を表現するためには、その事象に対する十分な理解が必要である。今後の学習の中で、随時1・2年生の学習内容を復習する時間を取りながら定着を図りたい。

○ 3年生

3年生では調査は行われなかったが、普段の授業から高い意欲を感じ取ることができる。マーケティングディスカッションを行うことで、他の班の発表から用語の使い方を学んだり、実験を多く行う器具の使い方が上達したりした。また、ICTに非常に堪能であるので、学習のねらいの達成に向けて活用することができた。

IV 来年度の理科の教科経営

1. テーマ・サブテーマと教科の特質

自然の事物・現象を科学的な視点や方法で探究する －観察・実験の結果を問い直し、分析・解釈を深める学びを通して－	
特質	観察・実験を通して自然の事物・現象を科学的に探究すること。具体的には、観察・実験の結果を根拠として仮説の妥当性を検討することにより、様々な知識がつながり、より科学的な概念が形成され、その概念が次の学習や日常生活などにおける課題の発見や解決の場面で働くこと。

2. 具体的な実践事項

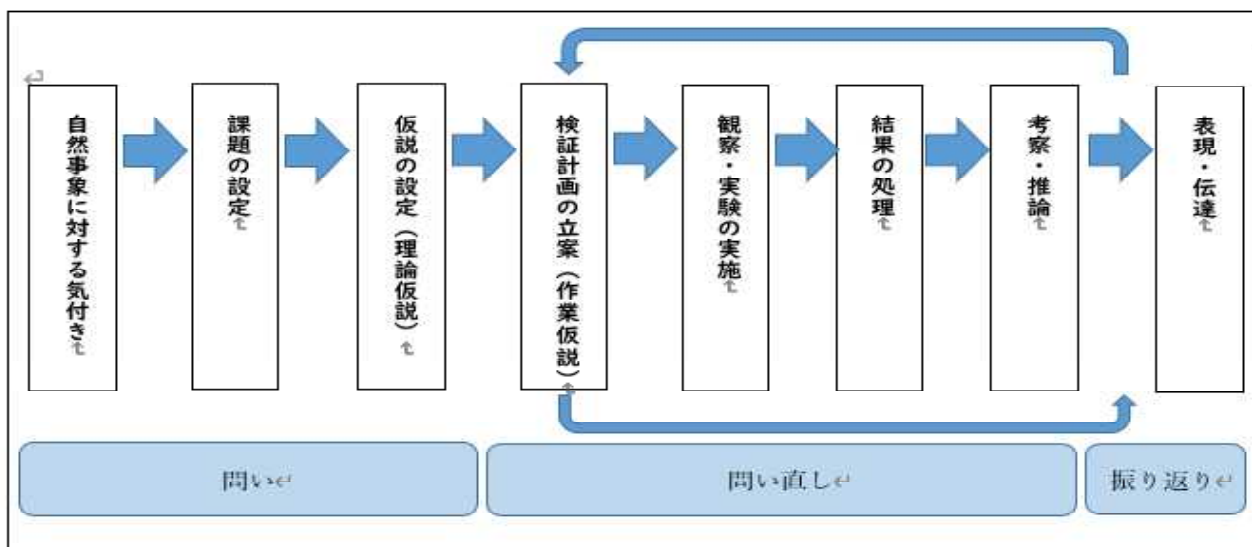
(1) 分析・解釈が深まる「問い直し」の工夫

- ・学習集団全体の課題意識を高めるために、適度な困難さを伴う課題提示を工夫したり、既習内容を科学的根拠として課題解決の見通しをもたせたりする。また、科学者の思考を迫体験させることで、理科の見方・考え方を働かせながら、根拠を元に論理的に説明する力を育成する。
- ・「問い直し」で根拠を示して科学的に分析・解釈する機会を設定し、自分の考えを整理したり、説明したりすることができるように、図やモデルなどのツールを工夫する。また、見方・考え方のカードを活用し、どの視点で「問い直し」をしたのかを可視化できるようにする。

(2) ICTの活用による科学的な視点の提示や転換

- ・ICTを活用し、実生活では見ることのできない視点を提示することで、知的好奇心を喚起したり、予想や仮説の妥当性の検討や他者の意見を批判的に思考したりすることにつながる。
- ・試行の繰り返しを行うことを目的に、観察・実験の過程や結果を画像や動画に記録し、より深い分析・解釈ができるようにする。

4. 学びのプロセス



I 今年度の音楽科の教科経営

1. 本校の生徒の実態

音楽の授業に意欲的に向かう。特に表現活動では、楽曲の特徴に合った歌い方や奏法を考えて表現しようとする。また、鑑賞活動では、知覚したことと感受したこととの関わりを考えて、楽曲の特徴を捉えようとする姿が見られる。

課題としては、新型コロナウイルス感染拡大防止対策として限定された表現活動が続く中、表現活動を積極的に継続していこうとする意欲が薄れつつある。

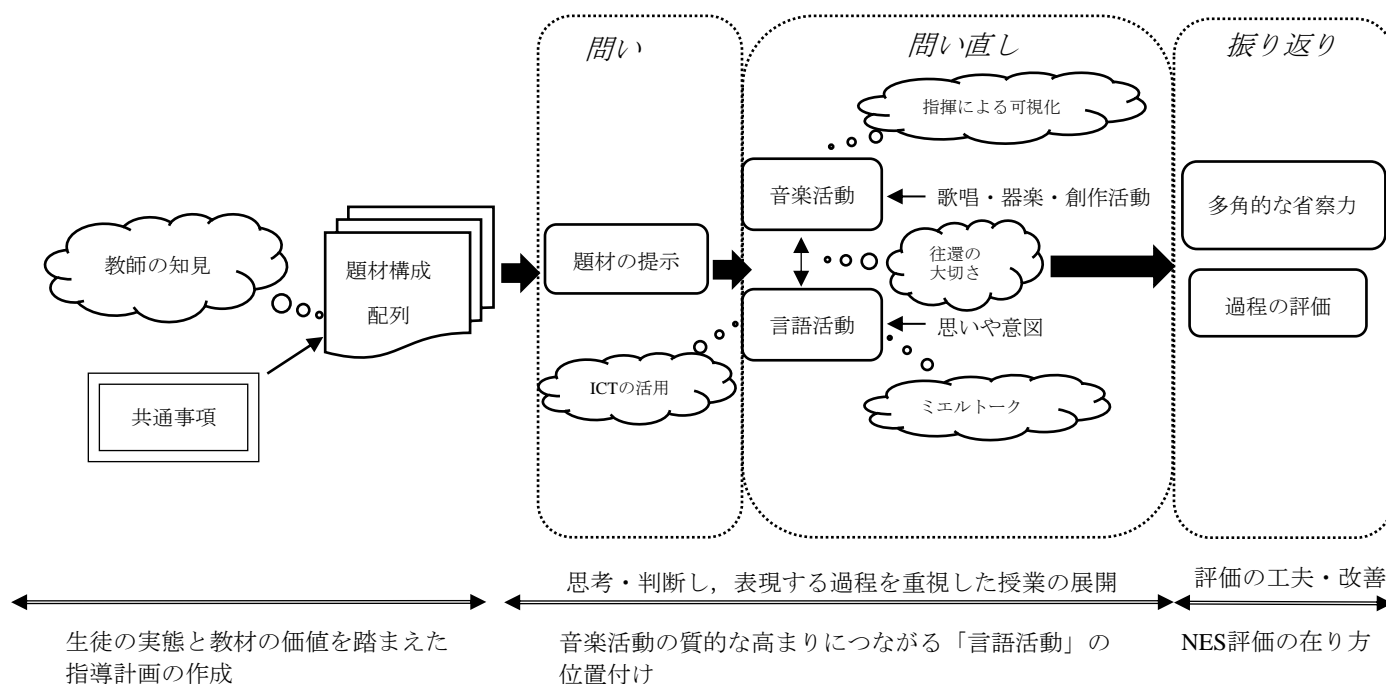
2. テーマ・サブテーマと教科の特質

	美的情操を働かせ、豊かな音楽表現を追究する ー知覚・感受を支えとして音や音楽を捉えていく学びを通してー
特質	音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、音や音楽、言葉によるコミュニケーションを通して、美しいものや、優れたものに接して感動できる、豊かな心を養うこと。

3. 具体的な実践事項

- (1)音楽表現や鑑賞の学習を深めていく過程において、音楽に対する思いや意図、感じ取ったことや創造したことを、音や言葉で伝え合う活動を大切にする。
- (2)他者の考えに共感したり、その考えを共有したりする中で、自分の考えをより深めていくミエルトークを活用していく。
- (3)タブレットPCやデジタルコンテンツを活用して、楽曲の仕組みや音の動きを視覚的に提示することで、それらの働きを実感し、自らの表現や鑑賞の活動に生かすことができるようにする。

4. 学びのプロセス



II 具体的な実践事項について

1 「音楽に対する思いや意図，感じ取ったことや創造したことを，音や言葉で伝え合う活動を大切にする」についての実践内容と検証，改善策について

①1～3年 「混声合唱の響きⅠ～Ⅲ」

・実践内容

各学年における歌唱活動「混声合唱の響きⅠ～Ⅲ」では，感染対策に留意しながら，歌唱活動を中心とした学習活動を行った。合唱活動では，パートリーダーを中心としたグループ活動が行われている。その中で，パートリーダーを中心とした学習活動が進められた。そこでは，まず自分達が目指す理想の響きを共有し，それを言葉で具現化して伝え合う活動を行った。また，練習を進めていく上で，自分達の歌声がどのように変容していったかについて，随時リフレクションする活動を行った。言語活動と歌唱活動の往還が行われた。



・検証，改善策

本校の生徒は，音楽的な能力が高い生徒が多く，自主的に表現活動に取り組むことができる生徒が多い。パートリーダーを中心に，音取りの活動では，キーボードを使いながら自分達でパートの音をしっかりと確認して，覚えることができる。また，自らの表現したい思いや意図をしっかりと持っている生徒が多く，それらを言葉で表し，それを基に音で表現するという活動，言い換えると言語活動と音楽活動の往還ができています。本研究の具体的な実践事項が実現できている。



課題としては，それらの活動の流れは，リアルタイムに行われ，記録しているわけでない。つまり，それらの活動の積み重ねは，学習者の記憶に頼るものであり，それらが時系列で記録されるようなことはない。体感として表現力が磨かれていることは感じるが，「記録」として見えたり聞こえる形では残っていない。記録を残すことを実現するには，時間やハードウェア的な面で困難が予測される。言語活動と音楽活動のバランスを取りつつ，そこに「記録」といった活動を入れることは，授業の時間のマネジメントを更に綿密にしなければならない。そして，録音するためのハードウェアを揃える必要もある。しかし，ICT機器を活用することで，これらのことは解決できるかもしれない。自分達の表現力の変容を，生徒達が具体的につかむことができるようになることで，より感性を豊かに磨き上げ，表現を高め合い，学習の深みが増すと考える。



②1年 「邦楽の味わい ～箏の演奏に挑戦～」

・実践内容

1年生の「邦楽の味わい ～箏の演奏に挑戦～」では、箏の実習を行った。1年生へのアンケート調査では、実際に箏を演奏したことがある生徒は、全体の1割に満たない人数であり、ほとんどの生徒は、演奏経験がなかった。そこで、今回は2年次の「邦楽の味わいⅡ ～箏の演奏に挑戦～」につながる学習として、箏の基本的な知識や奏法を学び、《虫づくし》という曲の演奏に挑戦する授業を行った。生徒32名に対して、箏の台数は16台。ペアで1台を使い、交代で演奏するという流れで授業を行った。爪の付け方から始まり、親指と中指の弦のはじき方を練習した。そこでは、ペアでチームを組むことで、お互いに言葉や音で教え合う姿が見受けられた。また、演奏発表の場面では、ペアで学習している利点を生かし、一方の生徒が演奏している間、もう一方の生徒は審査員になり、演奏後仲間に批評を伝えることにした。それによって、自分の今後の演奏に生かすとともに、達成感を深めることをねらいとした。生徒達は、思い思いに批評を述べ合い、活発な活動がなされていた。



・検証, 改善策

この授業では、言語活動と音楽活動の往還ができており、よりよい学びにつながっていると考えられる。また、本校の教育目標でもある「批判的思考力を磨く」ことにもつながっていると考えられる。同授業を参観した石原先生¹からは、「二人一組で楽器を使用させていた点がマイナスとはならず、学習効果を上げていたように見えました。審査する（コメントする）という指示があることにより、不出来な生徒であれば相手の演奏をよく見ることになり、成功例から学びとることができます。逆に、出来る生徒であれば、不出来な相手の失敗点を見つけ、何が原因なのかを考えてコメントに含めようとしています。これらは双方の学習にとって非常に効果的と思いました。」（2022.2.15 石原 メール回答より）

このことから、音楽に対する思いや意図、感じ取ったことや創造したことを、音や言葉で伝え合う活動が充分になされていたと考える。

今後の課題として、更にそこから学びを深めるためには、教える側の専門性が大切であると考えられる。そこで、外部の講師を活用することが、有効な手段ではないだろうか。来年度以降は、箏の授業において、外部講師を活用することで、更に生徒達の学びに深みが増すことが予想される。そして、生徒同士の言葉や音での往還に、外部講師との知識と技能が加わることで、より生徒達の感性を高め、学習に深みが増すことになるだろう。



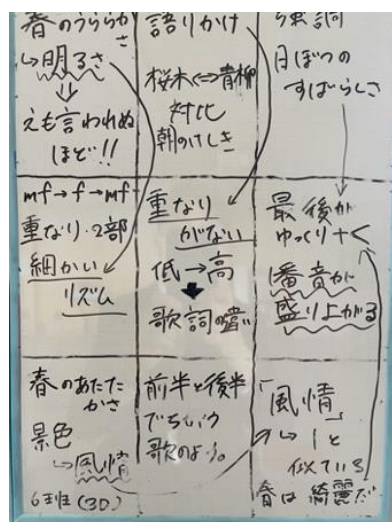
¹ 秋田大学教育文化学部 教育実践コース 講師 石原慎司
秋大教育文化学部附属中学校 音楽教育研究の協力員である。

2 「他者の考えに共感したり、その考えを共有したりする中で、自分の考えをより深めていくミエルトークを活用していく」についての実践内容と検証、改善策について

①3年 「日本の歌のよさ」より瀧廉太郎「花」、團伊玖磨の「花の街」

・実践内容

3年生の「日本の歌のよさ」では、歌唱活動が新型コロナウイルス感染拡大防止対策で制限される中で実施だったため、歌唱活動を控え歌唱表現を考える授業展開を試みた。その中ミエルトークを行うことで、知覚と感受の双方



脚注3

向の思考を視覚化する活動²を行った。ミエルボードに記入している内容³は、上段は、歌詞が表す情景や心情、曲の雰囲気など、感受の視点から記入している。中段は音楽を形づくっている要素（リズム、テクスチュア、強弱）などの知覚からの視点。下段は感じ取ったことや雰囲気などを記入した。そして、それらの関係を線で結ぶことで、知覚と感受の関わりを視覚化した。それを基に表現の工夫を考え、歌唱活動に生かす案を全体で共有した。ミエルトークで話し合った内容は、歌唱活動が可能になった時期に生かしていくことにして、題材を終えた。

脚注2



・検証、改善策

このような言語活動と表現活動の往還から、音楽表現に対する思いや意図を言葉で表す表現力と、演奏活動を通して表す表現力をリンクさせて、より深い表現力につなげたいと考えた。また、研究主題である「知覚と感受を支えとして音や音楽を捉えていく」活動を展開する場面ともなった。言葉による裏付けとつながることで、より一層説得力のある表現活動につながっていくはずである。実際、この題材では、歌唱活動を行うことが新型コロナウイルス感染拡大防止対策のためにできなかったが、その後の「混声合唱の響き」の題材では、これらの経験を活かして、表現に対して貪欲に思考を巡らせて、より奥の深い表現を追究しようとする態度が生徒達に見受けられた。同時に、知覚と感受の関連を意識して考えることが定着しつつあることも、感じ取ることができた。

今後の課題としては、このミエルトークの活動とICT機器の活用を連携させることができないか、検証することである。今年度から導入された「コラボノート⁴」をホワイトボードの代わりに活用することで、より全体での共有がスムーズに進めることが期待される。

2 ミエルボードの掲示による思考の視覚化

3 瀧廉太郎「花」の生徒の考察から

4 コラボノートとは複数の人が、同時に1つのワークシートに書き込みができる、一緒に1つの作品を作成できるデジタル模造紙。教育用Webアプリである。

3 「タブレットPCやデジタルコンテンツを活用して、楽曲の仕組みや音の動きを視覚的に提示することで、それらの働きを実感し、自らの表現や鑑賞の活動に生かすことができるようにする」についての実践内容と検証、改善策について

①1～3年生「創作活動の楽しみⅠ～Ⅲ」より「いろいろな音階をつかって旋律を作ろう」（1年）、「日本の音階をつかって旋律をつくろう」（2年）、「言葉の抑揚を生かして旋律を作ろう」（3年）

・実践内容

今年度は、全学年を通して1年生は「いろいろな音階をつかって旋律を作ろう⁵」、2年生は「日本の音階をつかって旋律をつくろう⁶」、3年生は「言葉の抑揚を生かして旋律を作ろう⁷」の題材で、創作の授業を行っている。「いろいろな音階をつかって旋律を作ろう」（1年）では、5音音階をつかった旋律の創作に必要な知識・技能を身に付け、知覚と感受の視点でイメージを創造し、それを基に旋律を考え創作するという内容で構成した。「日本の音階をつかって旋律を作ろう」（2年）では、生徒達にとっては初めての創作の授業ということだったので、まずは5音音階を使い、誰もが旋律を作って完成

させることができるという達成感と喜びを味わわせることをねらいとして授業を展開した。「言葉の抑揚を生かして旋律を作ろう」（3年）では、松尾芭蕉の俳句『古池や 蛙飛び込む、水の音』を用いて、それらの言葉のイントネーションを生かしながら、旋律を作る授業を展開した。それぞれの授業で生徒は、授業ファイルと合わせて個人のタブレットPCを持参している。各学年とも学習シートを用いて創作を行い、Webサイト「MUSICCA」の『バーチャルピアノ⁸』を使うことで、旋律を音として確認し直感的に旋律を捉えることができるように試みた。生徒達は、それをつかって実際に鍵盤で音を奏でながら創作活動を進めることができた。また、Webサイト「flat education⁹」の『楽譜作成

ヨナ抜き音階で旋律を作ろうパターン1 .mxl - student19



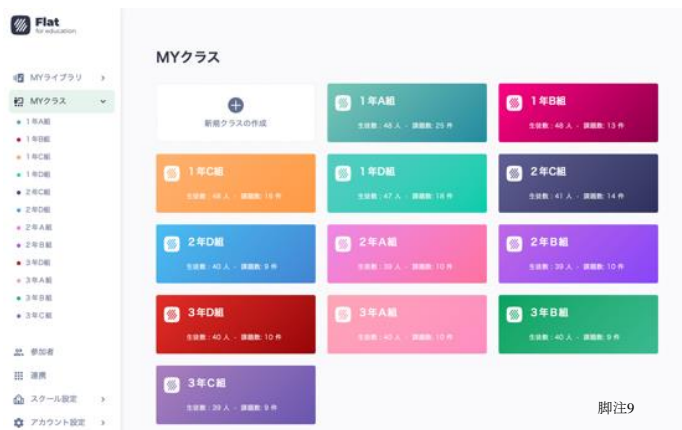
student12



言葉の抑揚を生かして旋律を作ろう2 - student11



脚注8



脚注9

5 ヨナ抜き音階をつかって創作した1年生の作品

6 5音階をつかって創作した2年生の作品

7 芭蕉の句の抑揚を生かして創作した3年生の作品

8 Webアプリの一種。図は「MUSICCA」の『バーチャルピアノ』の画面

9 Webアプリの一種。図は、「flat education」のクラスで分けた管理画面。

アプリ』を活用して、自分の作品の楽譜を作成できるようにした。自分の作品を楽譜にして、作った旋律をアプリで再生することで、自分の作品の音を実際に確認しながら創作活動を行った。また、【作品提出機能¹⁰】を活用して、生徒に提出してもらった作品を教師が添削して生徒に返す。あるいは、ある生徒の作品を全体で共有して聴き合う時間を設けた。更に、互いの作品をグループで共有して、聴き合ったり批評を書き込むために、アプリケーションソフト「Teams」の【投稿¹¹】の機能と「flat education」の【作品シェア機能】を合わせて活用することで、作品を自由に聴き合ったり、批評したりする活動も取り入れた。各授業のリフレクションの場面では、「Teams」の【ファイル機能】を使い、それぞれのリフレクションシートをWeb上で管理¹²することで、データを一元化した。

・検証、改善策

バーチャルピアノを使った実践では、生徒達は自分たちが創り上げたい旋律を、音を通してイメージすることで、より創作の楽しみを感じ取ることができた。また、Flat educationを活用した楽譜の作成では、生徒がより知覚と感受の両面から思考し、創作活動と向かい合うことができていた。また、作品提出機能の活用では、生徒が自分の作品の確認を行い、互いの作品を聴き合って感想を述べることができた。「Teams」の【投稿】の機能と「flat education」の【作品シェア機能】を合わせて活用することからは、更に多くの考えや作品を短時間で共有することができた。データの一元化からは、教師のより効率的な評価につなげることができた。今年度の創作授業は、各学年とも中学校に入学してからの初めての創作授業ということだったので、学年の状況に応じて段階的に題材設定とICT機器の活用を行ったことで、スムーズに創作活動に取り組むことができた。

課題としては、ICT機器を活用することで、全体で一人一人の考えを共有する時間は短くなったが、活動が水面下で行われるために、その様子が見えづらくなったことである。以前のようにお互いが発表する活動では、全体で共有する場面を生徒を観察することから確認できたが、今回のTeamsを使った共有の場面では、それではなかなか難しいということである。ICT機器の活用はまだ始まったばかりである。このデメリットを解決するようなソフトウェアが必ず登場することであろう。現段階では、コラボノートを活用していくことが、解決の第一歩であると感じている。また、「Flat education」は、今年度は1年トライアルの無料期間を利用して使用した。これらを継続して利用するには、年間生徒一人に対して250円の価格がかかる。今年度の教育的な効果を考えると、来年度以降は副教材としてこちらの費用を捻出し、生徒一人一人が自分の個人アドレスで登録して使いこなすことで、更に利便性が上がり、幅広い創作活動での活用が期待される。ICT機器の活用方法は、急速なペースで多種多様化している。それらの情報をいち早くキャッチ



脚注10



脚注11



脚注12

10 「flat education」の課題提示画面

11 「Teams」の投稿を使った感想の共有

12 「Teams」のファイル機能を使ったリフレクションシートの一元化

し、柔軟に取り入れて活用していくことが、更に学びの深さにつながると考える。

② 2年「旋律の重なり」 フーガト短調

・実践内容

本題材では、J.S.バッハのフーガト短調の鑑賞を通して、作曲家や楽器のこと、あるいは旋律の重なりが現代の音楽にいかにか生かされているかを学習した。そして、知覚と感受の関わりの視点から、旋律の重なりを楽しさを味わっていくことをねらいとした。本題材の展開では、バーチャルアシスタントと題したAIのアシスタント¹³を作成し、バーチャルの設定と現実の掛け合いの中から授業¹⁴を進めるなど、授業の展開を工夫をした。また、楽譜作成ソフト

「Finale¹⁵」を使用し、フーガト短調の楽譜¹⁶を、音楽を聴きながらリアルタイムで楽譜を表示す

ることで、聴覚と視覚を通してフーガト短調の主題を捉えることができるようにした。また、使用する動画を全て編集して、長さを調節して提示するなど、効果的な動画の活用を行った。パイプオルガンが現代の電子オルガンにつながっている説明では、YouTube上に公開演奏を披露している生徒と同世代のエレクトーン奏者の映像¹⁷を使うなど、生徒の興味関心の幅をより広げ、豊かな音楽的感受力を高める試みを行った。

・検証、改善策

「Finale」で作成した楽譜を使った《フーガト短調》の主題を聴き取る活動は、大変効果的であった。楽譜が苦手な生徒も、今演奏している部分がはっきりと分かるので、直感的に主題の旋律が登場したことが分かった。同時に、多声音楽の複雑な構造がより魅力的に伝わり、それらの旋律同士の関わり合いも直感的に捉えることができたことは、大きな成果であった。また、バーチャルアシスタントを活用した授業展開では、生徒達に馴染みのある「ゆっくろいど」が授業の中で登場したことに、驚きと喜びの感情が感じられた。「親しみやすい」ということは興味関心を引き出す一つの手段として、積極的に活用するべきであろう。他教科の教科書等でも、漫画やイラストを使うなど、様々な趣向を凝らしている。私達も時代の流れを見ながら、常に新しい感覚をもち、固定観念に縛られることなく、新たな視点、大胆な発想で授業に挑戦していくことが大切であることを感じた。また、エレクトーンの演奏では、自分達と同じ中学生が演奏していることに、生徒達は親近感をもって

いた。また、その演奏のパフォーマンスの素晴らしさから、新たな感性を刺激していたことは、生徒達のリフレクション¹⁸からも伝わってきた。ICT機器の活用と並行して、このようなデジタル教材の開



脚注14



脚注15



脚注16

パイプオルガンや吹奏楽、金管五重奏などでは特に旋律の重なりを感じることができ、いろいろなメロディーの交わる感じがとてもきれいだった。フーガのたくさんの旋律が重なっているところは、迫力があって音に深みが生まれるような感じがした。見た目はピアノと似ているのに、音の届き方が全然違って、パイプオルガンの魅力がわかった。最後に聞いたあすかさんの電子オルガンの演奏は、音色の変化を感じられた。まさかひとりで弾いているとは思えないほど様々な音が聞こえてきて、それによって場面や雰囲気がガラッと変わるように感じた。電子オルガンは旋律の重なりも音色の変化も表せて、すごい楽器だなと思った。いつか私もやってみよう。

脚注17

13 文章読み上げソフト「ゆっくろいど」の合成音声を使用したバーチャル上のアシスタントのことである。

14 バーチャル上のアシスタントとの掛け合いの一場面

15 1989年の登場から常に制作現場のスタンダードとしてたゆまぬ進化を遂げてきた最高峰の楽譜作成ソフトウェアである。

16 Finaleで作成したJ.S.バッハのフーガト短調の楽譜

17 826Asukaさんの公開映像

18 フーガト短調を終えた生徒のリフレクション

発、それに準じた題材の設定や資料の設定など、今度も十分に吟味していきたい。





② ー授業のリフレクション、NES評価におけるICT化


・実践内容


今年度の後半から、リフレクションとNES評価のICT化を行っている。具体的には、一人一人デジタルファイルの形式でリフレクションシートを作成し、Teams上に保管して、そこからリフレクションを積み重ねていくというやり方である。また、NES評価とは、N（Needs improvement）（もっと良くしたいところがある）、E（Excellent）（すごく良くできたので自分を誉めたい）、S（Satisfactory）（ここまでできれば十分満足、充実した時間を過ごせた）を評点とした評価である。


この「NES」を『もじま』¹⁹

「も」（もっとこれを頑張りたい）「じ」（じまできる。これがよくできた）「ま」（満足、ここまでできたので、充実していた）に置き換え、絵文字を使って自分の心情を表すことも実施した。より一層、このNES評価を生徒達に身近に感じてほしいという願いから、このような形で実施した。これらの自己評価を通して、生徒自身の自尊心や肯定的な考えを育み、授業に対する前向きな姿勢がより一層育まれることをねらいとした。

月 日	振り返り	(もじま)
10月26日	日本らしい音だとおもいました。小学校の頃近所の神社に行って（名前忘れたんですが）レミソラシだけをつかう音楽もあるよというのを習ったのを思い出しました。雅楽？	
11月9日	私の電子辞書にイントネーション辞典が載っているのでなにか機会があれば使ってみたいです。また、好きな曲の歌詞のイントネーションとメロディーの工夫も見つけてみたいです	
11月17日	抑揚としてイントネーションを崩さない程度に工夫して作ることができた。なだらかに、でも社大に自分の最大出力で書けた。コケの良いはなかったです	
12月21日	作曲者のフィンランド愛がよく伝わってきました。情景や人々を想像しながら聞くことができました。ただ、色々な情景が浮かんでくるのははっきり具体的にそれを想像するのは逆に難しかったです	

もっと良くしたい所がある 

自分を褒めたい 

満足している 

・検証、改善策

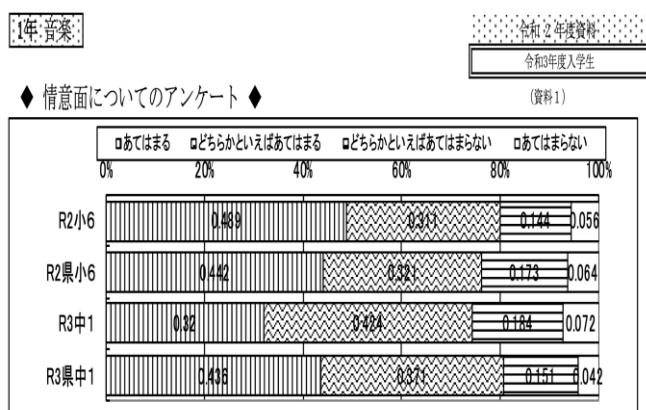
デジタル化したメリットは、データを一元化できることで、生徒の様子や変容を教師が把握しやすいということであった。また、生徒がリフレクションシートを紙媒体の時のように紛失するなどといったこともなくなり、自分の軌跡をしっかりと把握できるようになった。改善としては、デジタルにすることで、端末を起動するまでの時間やキーボードを打つ速さの個人差などで、紙媒体の時よりも時間がかかることである。1時間の授業の枠の中で行うには、時間的に厳しい場面が多々見受けられた。これらの解決は、例えば端末は起動した状態にしておくように習慣化するなど、ある程度対策は可能であるが、個人の文字を打つ速さに関しては、今後のICT機器の活用を通して、実践を重ねていくことが重要であると考えられる。いずれにしても、ICT機器の活用は、今後の生徒達が将来の道を歩むに際して重要である。課題を克服できる案を考えながら、来年度以降もICT化を進めていくことが大切である。

¹⁹ NES評価『もじま』を使ったリフレクション

III 生徒の変容について

今年度も、コロナ禍により、歌うことができない、音を奏でることができない状態が断続的にあり、芸術祭等の表現活動を生かす場面も、学年分散した開催になるなどの中、どうやって表現の工夫や鑑賞の質を高めるか、悩みながら指導してきた。その中において、コロナ禍における表現活動の一環として、創作活動を積極的に取り入れ表現活動の活性化を図った。また、ICT機器の活用にも力を入れ、それらを活用した創作活動を全学年で行うことで、新たな表現活動の可能性を追究しながら、学んだことの意味や価値を生徒が自覚する指導を試みてきた。それによって、創作活動で大きな壁となる記譜するというところに、抵抗をあまり感じないで授業に取り組む姿が見受けられた。また、自分の創意や思いを基に、旋律作りに取り組む様子が伺えた。しかし、記譜や創作することにやはり抵抗を感じている生徒も見受けられた。「音楽に対する情意面に関する「令和3年度秋田県学習状況調査における生徒質問用紙の結果」は、次のようである。

○1年生「音楽の勉強は好きだ」



音楽が大好き・好きの理由 (右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

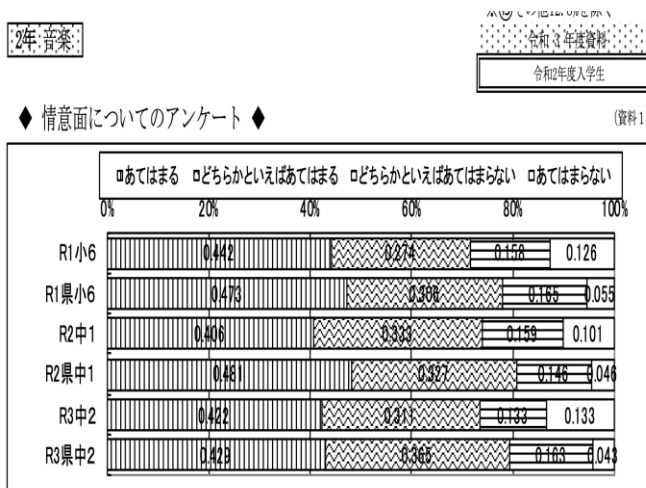
学年	①内容に興味があってももしろい	②わかりやすい	③将来、社会に出たときに役立つ	④生活の中で役立つ	⑤人とかかわりの中で役立つ	⑥考えるのが楽しい	⑦得意	小計						
R2小6	26.7%	1.7%	6.7%	▲3.5%	2.2%	0.1%	1.1%	▲1.1%	3.3%	▲3.6%	24.4%	5.2%	64.4%	▲1.3%
R3中1	29.6%	▲4.0%	4%	▲5.9%	0.8%	▲0.6%	3.2%	1.3%	14.4%	4.3%	11.2%	▲1.4%	63.2%	▲6.3%
R4中2														
R5中3														

音楽が嫌い・大嫌いの理由 (右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	⑧内容に興味がなく	⑨わかりにくい	⑩将来、社会に出たときに役立つ	⑪生活の中で役立つ	⑫人とかかわりの中で役立つ	⑬考えるのがめんどろ	⑭不得意	小計						
R2小6	2.2%	2.3%	1.1%	0.9%	3.3%	▲1.0%	0%	1.3%	0%	0.4%	12.2%	0.1%	18.8%	4.0%
R3中1	9.6%	▲4.3%	0.8%	0.0%	0.8%	1.5%	2.4%	▲1.4%	2.4%	▲1.8%	8%	0.4%	24%	▲5.6%
R4中2														
R5中3														

※⑮その他12.8%を除く

○2年生「音楽の勉強は好きだ」



音楽が大好き・好きの理由 (右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	①内容に興味があってももしろい	②わかりやすい	③将来、社会に出たときに役立つ	④生活の中で役立つ	⑤人とかかわりの中で役立つ	⑥考えるのが楽しい	⑦得意	小計						
R1小6	11.6%	▲13.7%	4.2%	▲5.8%	1.1%	▲1.0%	6.3%	4.0%	10.5%	3.2%	27.4%	7.4%	61.1%	▲5.5%
R2中1	25.5%	▲3.8%	4.4%	▲4.5%	0.7%	▲2.0%	1.5%	▲0.5%	5.1%	▲4.5%	23.4%	6.9%	60.6%	▲8.4%
R3中2	25.9%	▲9.0%	8.1%	0.5%	0.7%	▲0.9%	0.7%	▲1.1%	12.6%	2.4%	18.5%	3.0%	66.5%	▲1.1%
R4中3														

音楽が嫌い・大嫌いの理由 (右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	⑧内容に興味がなく	⑨わかりにくい	⑩将来、社会に出たときに役立つ	⑪生活の中で役立つ	⑫人とかかわりの中で役立つ	⑬考えるのがめんどろ	⑭不得意	小計						
R1小6	8.4%	▲3.9%	0%	2.0%	2.4%	2.1%	▲1.0%	0%	0.3%	15.8%	▲5.0%	26.3%	▲5.2%	
R2中1	7.3%	▲2.7%	0.7%	▲0.2%	2.9%	0.0%	4.4%	2.8%	0%	0.3%	10.2%	▲1.0%	25.5%	▲6.4%
R3中2	6.7%	▲0.7%	3.7%	▲2.5%	4.4%	▲1.7%	1.5%	▲0.1%	1.5%	▲0.8%	8.1%	▲0.9%	25.9%	▲6.3%
R4中3														

※⑮その他7.4%を除く

「1年」

好きな理由を「考えるのが楽しい」と挙げた生徒が多く、県平均を約4.3%上回っている。反面、嫌いな理由に「内容に興味がなく」を挙げている生徒もいる。表現活動が創作中心になってしまったこともあり、感じ取ることや表現することに楽しさを見いだせない生徒がいることが考えられる。

「2年」

「わかりやすい」「考えるのが楽しい」「得意」が県平均を上回っている。創作活動中心の表現活動であったが、その中で生徒一人一人の個性や考えを尊重し、生徒主体の活動を行ってきたことが、結果につながっていると考える。

反面、嫌いな理由に「内容に興味がない」「不得意」を挙げている生徒もいる。知識として理解していても、感じ取ることや表現することに楽しさを見いだせない生徒がいることが考えられる。

【結果からみえる来年度への課題】

「1年」

今年度は合唱や器楽などの演奏体験が少なかったため、来年度はコロナの状況が落ち着いていることが前提であるが、なるべく表現活動の幅を広げ、リコーダーを使った器楽活動などの演奏活動を多く取り入れて、より生徒の興味関心を引き出したい。そして、みんなで演奏を共有する体験から、感性を高め価値を見いだしていく題材構成を工夫していきたい。

「2年」

鑑賞活動、あるいは創作活動において、音について心から向き合うことを面倒、不得意と感じている生徒がいることも否めない。鑑賞では、日本の伝統音楽をはじめ、世界の様々な音楽に心から向き合う題材設定をする。また、表現活動では、コロナの状況が落ち着いていることが前提であるが、演奏体験をなるべく多くし、音を奏でる活動を通して感性を高めていく題材構成を工夫していきたい。

IV 来年度の音楽科の教科経営

1. 本校の生徒の実態

音楽の授業に意欲的に向かう生徒が多い。特に歌唱活動では、楽曲の特徴に合った表現を考え、歌唱能力も高い生徒が多い。また、鑑賞活動では、知覚したことと感受したこととの関わりを考えて、楽曲の特徴を捉えようとする姿が見られる。

課題としては、新型コロナウイルス感染拡大防止対策として限定された表現活動が続く中、表現活動の時間が少なくなり、それが常識になりつつあるという危機感である。

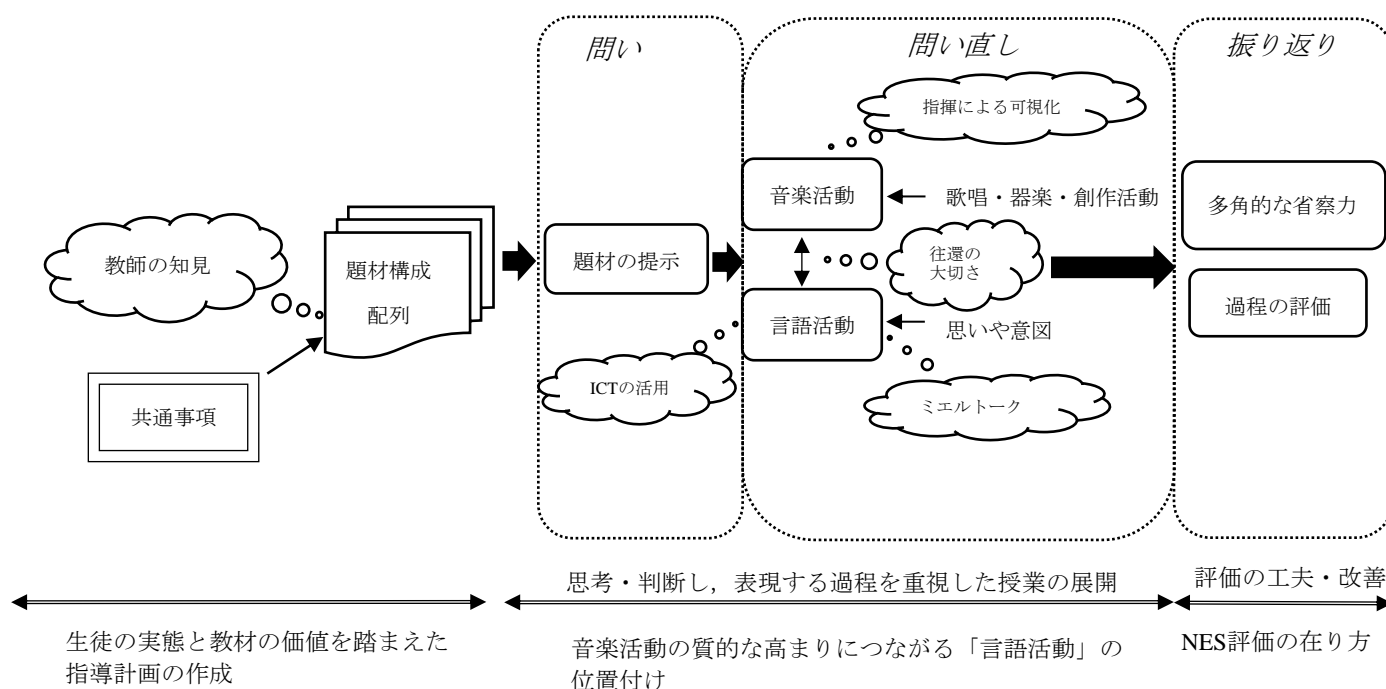
2. テーマ・サブテーマと教科の特質

	美的情操を働かせ、豊かな音楽表現を追究する ー知覚・感受を支えとして音や音楽を捉えていく学びを通してー
特質	音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、音や音楽、言葉によるコミュニケーションを通して、美しいものや、優れたものに接して感動できる、豊かな心を養うこと。

3. 具体的な実践事項

- (1)音楽表現や鑑賞の学習を深めていく過程において、音楽に対する思いや意図、感じ取ったことや創造したことを、音や言葉で伝え合う活動を大切にする。
- (2)他者の考えに共感したり、その考えを共有したりする中で、自分の考えをより深めていくミエルトークをコラボノートと併用して活用していく。
- (3)タブレットPCやデジタルコンテンツを活用して、楽曲の仕組みや音の動きを視覚的に提示することで、それらの働きを実感し、自らの表現や鑑賞の活動に生かすことができるようにする。

4. 学びのプロセス



I 今年度の美術科の教科経営

1. 本校の生徒の実態

本校の生徒たちは、学ぶ意欲や探求心が高く、知識を貪欲に求めていく姿勢がある。授業において他教科と関連付けながら学ぶことができるようにしたり、ICT を活用して様々な表現に取り組むことができるようにしたりすることで、視野を広げ表現力を高めることができる。一方、思いの強さや失敗を怖がるプライドの高さ故に、自己肯定感の低さや、困難や挫折に対応できず打たれ弱い一面も見られる。その自己肯定感の低さや失敗への不安感が、美術の制作においてもブレーキとなり、自己の思いを表現することに対して臆病になってしまっている生徒も見られる。

2. テーマ・サブテーマと教科の特質

思いを形や色彩で表現し，発信する — 発見・ひらめき・共感が生まれる学びを通して —	
特 質	一人一人の個性を造形の力で社会とつなぎ合わせていくことである。具体的には、様々な形や色彩などの造形と、想像や心、精神、感情などの心の働きとを、造形の要素を介して行き来しながら深めることを通して、漠然と見ているだけでは気付かなかった身の回りの形や色彩などの働きに気付いたり、よさや美しさなどを感じ取ったりすることができるようにすることである。

3. 具体的な実践事項

(1) 発見・ひらめき・共感が生まれる学びを生むために

- ・【題材との出会い】魅力的な題材を開発し選択することで、多様な表現や材料体験をし、社会の中の美術や美術文化の世界を発見することができるようにする。
- ・【豊かな発想・構想】映像メディアや ICT 機器を活用して資料を提示したり、主体的・対話的な話し合い活動から自分の思いや願い、他者への気持ち、あこがれなどの心情を明確にしたりしながら、独創的なひらめきが生じるようにする。
- ・【表現と相互鑑賞】**発想・構想** ⇔ **表現** ⇔ **相互鑑賞** の学びのプロセスを行き来しながら学ぶことにより、螺旋状に思考力・判断力・表現力が向上し、自他の想像や心、精神、感情などの心の働きを感じ取り、共感することができるようにする。
- ・【作品プレゼンと双方向の鑑賞活動】作品のよさを言葉と映像で他者に説明したり、友人の作品を見て感じたことを伝えたりする活動を通して、観察力や傾聴力、表現力を高めることができる。
- ・【美的感性を育む環境整備】校内に生徒作品を掲示したり、美術室内に様々な資料を掲示したりすることで、生活や社会の中における美術の役割や存在意義、必要性を感じさせ、意識を高めることができる。

(2) 「ミエルトーク」や映像メディア，ICT 機器の効果的な活用

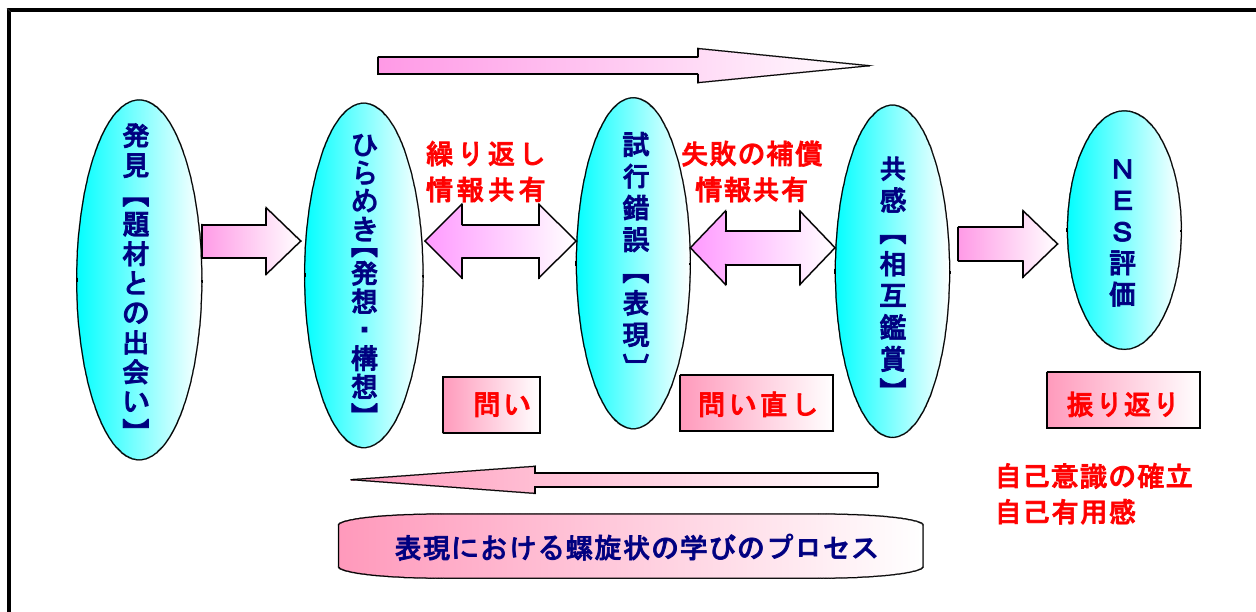
- ・【思考を可視化する「ミエルトーク」】生活の中の美術や自他の表現を造形的な視点で考え、発想や表現の可能性を広げ、思考を可視化するツールとして活用する。
- ・【映像メディアや ICT 機器の活用】課題や作品を効果的に提示したり、表現の可能性を広げたりするためのツールとして活用する。例えば、アイデアを練ったり編集したりする発想や構想の場面や、作品を大型モニターやプロジェクターで映し出したり、個々のタブレットで自分の見たい部分をズームして見たりする活動などで活用する。



〔タブレットのカメラ機能の活用〕

- ・【タブレットを活用したポートフォリオ】自分の制作途中の作品や制作の工程を、毎時間、タブレットのカメラ機能を活用して写真記録に残す活動を通して、表現活動の楽しさと可能性を感じることができるようにし、構成力や発想力を高めることができる。

4. 学びのプロセス



II 具体的な実践事項について

(1) 発見・ひらめき・共感が生まれる学びを生む実践

1年生 「絵文字がしゃべりだす ～文字のデザイン～」

■ 具体的実践

1 タイトル文字からの発見

- (1) ドラマや映画のタイトル文字の鑑賞と考察
 - ・タイトル文字の形や色の役割や効果をミエルトークで考える。
 - ・社会の中における「文字のデザイン」の役割について考え、発表する。

(2) 身の周りの文字のデザイン

- ・いろいろな文字のデザインを発見する。
- ・自分の名前を、ソフトの機能を活用してデザインする。色や形、フォント（字体）を工夫して作成し、紹介する。

2 明朝体とゴシック体で名前を書く

- (1) 明朝体とゴシック体の特徴を発見
 - ・代表的な書体である明朝体とゴシック体の特徴を知り、自分の手で、明朝体とゴシック体で自分の名前を書いてみる。

3 テーマを設定し絵文字を作成する。

(1) 絵文字の発想・構想

- ・漢字の意味と関連付けて、様々な絵文字を発想する。（アイデアスケッチ）
- ・表現方法を選択する。（貼る、切る、描く）

(2) 絵文字を作成する。

- ・色画用紙、布、ひも、モールなどを貼ったり、クーピーやクレヨン、ポスカなど様々な画材を活用するなど表現方法を工夫する。



〔タブレットを活用してアイデアスケッチ〕



〔制作の見通しをミエル化する学習プロセス〕

<生徒作品「絵文字」>



■検証と改善策

○成果

- ・タブレットを活用することにより、表現の幅が広ると同時に時間短縮にもつながった。特にデザイン分野のように柔軟な発想を必要とする題材の際、タブレットは発想の助けとなる有効なツールとなった。
- ・作品をタブレットのカメラ機能で撮影し、ポートフォリオとして保存することで、自分の作品を客観的な視点で見直すことができ、その思考が作品のレベルアップにつながった。
- ・アナログ作業である手作業でのレタリングとタブレットを活用したデジタル作業の同時進行により、手作業の味わいや大切さを改めて実感することになった。

○改善策

- ・発想や構想、表現と鑑賞、カメラ撮影とポートフォリオ編集などの時間の確保が最大の課題である。限られた時数での効果的な実践方法の検討が必要である。

<振り返り・NES評価（リフレクションシートより）>

- ・自分の想像力と技術力が上がったと思う。想像したものを描いたり作ったりすることは、とても難しかったが、自分の力を発揮して、楽しく制作することができた。
- ・中学入学前と比較して、道具の正しい使い方を意識するようになった。
- ・美術の授業では、作る力だけでなく、相手の作品のよさを見つけて伝える力がついたと思う。いろいろな作品に気持ちを込めて丁寧に作り上げることができた。
- ・美術が苦手で、最初は不安だった。でも、美術の授業でいろいろなものを使って学習していくうちに、自分の思いを自由に形に表していくのがとても楽しくなった。そして、途中で諦めず、最後までやり遂げることの大切さを学んだ。
- ・僕は絵のセンスは無いけれど、想像する力はあると思うから、思うがままに作品を作ろうとした。そうしたら、気軽に美術に触れることができるようになった。これからは、授業外でも触れることができるようになりたい。そして、もっと自信をもって作品を作れるようになりたい。
- ・小学生の頃までは、自由に描いていたけれど、今年の間は「どうしたらリアルになるのか」「どう工夫したら見ている人を惹きつけられるのか」などと、たくさんのことを考えながら制作することができた。2年生では、想像力と発想力を高め、より魅力的な作品を作りたい。
- ・自分が「こうしたい」と思ったことを、そのまま作品にすることができて楽しかった。一年間の作品制作と人の作品を見ることを通して、自分が求めている「自分」を見つけることができた。

2年生 「心の模様を刻む ～抽象表現によるレリーフ～」

■具体的実践

1 抽象表現と具象表現を知る

- (1) 喜怒哀楽などの感情や目に見えない事象を、イメージして線、色、形で表現する。

2 表現テーマの設定とアイデアスケッチ

(1) 半立体の表現方法の実践

厚さ3センチのスタイロフォームをカッターを用いて、様々な形で彫ってみる。

〔薬研彫り、片切り彫り、菱合い彫りなど〕

- (2) 表現テーマを設定し、彫り方を考えながら、線と形でデザインし、レリーフの設計図を作成する。



〔作品制作とポートフォリオ作成〕

<抽象表現レリーフ（生徒作品）>



〔作品テーマ「鏡映し」〕



〔作品テーマ「黎明」〕

3 レリーフ制作をする。

- (1)カッターの進入角度や深さに留意し、デザインに従ってカットする。
- (2)ジェッソ（地塗用アクリル樹脂絵の具）をレリーフ本体（スタイロフォーム）に塗り、表面を滑らかにすると同時に発色をよくする。

4 レリーフ作品のプレゼンテーションをする。

- (1)作品テーマ（題名）とその設定理由を説明する。
- (2)活用した表現技法や工夫、見どころを教科言語を用いて説明する。
- (3)作品制作の振り返りをする。

5 質疑応答をする。

- (1)グループ内で話し合い、質問や意見を出し、考えをまとめ、発表者に質問する。

■検証と改善策

○成果

- ・プレゼンテーション後に質疑応答の場を設定することにより、双方向の対話的な学びが生まれた。また、授業後のNES評価のシェアリングにより、個々の視野が広がったり、他者の考えを共有したりすることができた。

○改善策

- ・制作時間の確保が課題である。カットに時間を要するので、作業手順や授業展開の工夫が必要である。

<振り返り・NES評価（リフレクションシートより）>

- ・たくさんの作品を作ってみて、一つ一つに心を込めて作ると、普通の作品でも特別なもののように見えることを知った。技術を磨きつつ丁寧に作り、段々と完成に近づいていく作品を見ると、何とも言えない「わくわく感」が膨らんだ。これからたくさんの作品を作る中で、さらに成長することができるよう作業を慎重に行いたい。
- ・今年は、カッターや糸鋸、クラフト鋸、金工やすりなど、危険な道具を使って制作する機会が多かった。安全性を守り、正しい用具の扱いを覚えることが、授業を楽しく受ける前提であると思った。様々な道具や画材の正しい使い方を学び習得していくと、自分の表現が一つ一つ増えていくようで嬉しかった。来年度は、今年学んだことを生かして、自分の作品と向き合っていきたい。
- ・もともと手順が決められた作業、指示通りにというのは苦手で、そのせいで、小学生の頃の図工は自分の思うような作品に仕上がらないことがいつも不満だった。でも、今年、創造力を惹きたてられる作品の制作が続き、疲れることはあっても、飽きることのない一年となり、とても楽しかった。
- ・今年の美術では、失敗したことを上手くよい方向に直していくような技術力が高くなった。また、今年の目標として、集中力と観察力を挙げていたが、様々な人と話して意見を出し合って観察力を深め、集中すべき時は集中することができたので、目標を達成できた。
- ・抽象表現レリーフと作品プレゼン、堆朱などの制作を通して、創造力や発想力から体力まで、いろいろな力を身に付けることができた。それらの力を生かして、自分のこれからの生活をよくしていきたい。
- ・美術の制作を通して、考えたことを表現する力がついた。以前は、考えているだけで上手く表現できなかったが、絵を描いたり、作品を作ったり、作品のプレゼンをしたりすることによって、思っていることを言葉にしたり、行動に移すことができるようになった。たくさん考えて工夫して、それを形として作っていける楽しさを、美術の授業で学ぶことができた。
- ・2年生の美術は、じっくりと時間を掛けて制作することができた。中1のときは不器用で、ものを作ることがあまり好きではなかったけれど、だんだん上手くなってきていると自分で感じている。そうなるのが楽しいと思った。今年の私の美術目標である「頭を使ってやりがいのある制作をする」を達成できた。

3年生 「今を生きる私 ～〇〇歳の自画像～」

■ 具体的実践

- 1 人物が大きく描かれた名画を鑑賞する。
 - (1) 自画像や肖像画を鑑賞し、描かれている人物の内面について考える。
 - (2) 外面ににじみ出る人物の内面性や一緒に描かれている物や背景に着目して絵を鑑賞する。
- 2 自分らしさを表現する自画像の構想を練る。
 - (1) 自分の外見的特徴を鏡で観察し、イメージマップを作成する。
 - (2) 自分の内面性を考えて、イメージマップに自分らしさを表す言葉を付け加える。
 - (3) 自分らしさを表現するための背景や服装、ポーズ表情、一緒に描く小物等を考える。



〔タブレットを活用したアイディアスケッチ〕

- 3 人体の比率を知る。
 - (1) 頭部と人体の比率とバランス、顔の目鼻、耳、口等の比率とバランスを知る。
 - (2) 比率に気を付けながら、自分の顔を実際に描いてみる。
- 4 アイディアスケッチする。
 - (1) 自画像作成のもととなる自分の写真を撮影する。
 - ・自分で撮影してもいいし、友人から撮影してもらってよい。また、カメラは使用せず、鏡をじっくりと観察しながら描いてもよいこととする。
 - (2) スケッチブックに描いてもいいし、タブレットを活用して、写真映像を用いてのアイディアスケッチでもよいこととする。
- 5 自画像を制作する。
 - (1) 様々な画材や表現技法を活用し、自画像制作をする。
小学校6年間と中学校での2年間で習得した、全ての表現技法を選択しながら活用する。

< 生徒作品「自画像」 >



〔作品テーマ「私を描く『私』』〕

レイアウト〔構成〕要素		
・シンメトリー	・リピテーション	・リズム
・アクセント	・重なり	・比率
彩色表現技法		
・混色	・重色	・グラデーション
・点描	・線描	・ドライブラシ
・にじみ	・ぼかし	・スパッタリング
描画画材		
：水彩絵の具	・色鉛筆	・水彩色鉛筆
・クレヨン	・クーピー	・カラーペン

- 6 自画像作品のプレゼンテーションをする。
 - (1) 作品テーマ（題名）とその設定理由、どんな自分の姿を描こうとしたのか等を説明する。
 - (2) 活用した表現技法や工夫、見どころを教科言語を用いて説明する。
- 7 質疑応答をする。
 - (1) グループ内で話し合い、質問や意見を出し、考えをまとめ、発表者に質問する。



〔作品テーマ「罾」〕

■ 検証と改善策

○ 成果

- ・タブレットのカメラ機能を活用することにより、鏡では見ることのできない自分の表情やポーズを撮影し、画像として見ながら描くことができた。
(後ろ姿や横顔、下向きの角度の顔やスポーツをしている動きのある空中姿勢など)
- ・スケッチブック上でのアイディアスケッチをできる限り省略し、タブレット画面上でのアイディアスケッチにすることにより、発想・構想時間の短縮にもつながった。また、多様な視点から自分を描くことができ、前年度と比較してより多様な表現が見られた。

○ 改善策

- ・今年度はタブレットの活用により、発想やアイディアスケッチの時間を短縮することができたが、さらに授業展開の工夫や効果的な資料提示により、制作時間の確保ができるのではと考える。

< 振り返り・NES評価（リフレクションシートより） >

- ・1年生のときに初めて取り組んだ手形アートから今回の自画像までの作品、全てが印象に残っている。作品プレゼンの鑑賞授業を通して、「皆それぞれ、考えることが違って、美術ってこういう楽しさもあるんだな」と感じた。観察力や表現力、傾聴力、語彙力がアップした。
- ・美術室には、水彩絵の具やアクリルガッシュ、クレヨン、ポスカ、クーピー、水彩色鉛筆、カラーペンなど、あらゆる描画画材が揃っていて、わくわくする。いろんな画材を使ってみたいくて、いろんな表現にチャレンジした。
- ・作品プレゼンテーションの授業を通して、一人一人の作品に込められた深い思いや願いを知ることができて、毎時間感動した。また、全てプラスの言葉でスピーチする難しさと大切さを学んだ。

(2) ICTの活用によるポートフォリオと鑑賞

○ 成果

発想や構想時間の短縮

今年度、生徒一人一人がタブレットを使用できるようになったことで、発想や構想場面における授業展開が大きく変化した。表現したい画像を検索したり、カメラ機能で自分で撮影した写真から、発想したりと、想像以上のプラス効果があり、各学年に表現力の向上が見られた。

自己肯定感の向上

絵画、工芸、デザイン等、どの制作においても、作品の制作過程を記録として残すことは大切なことである。自分の作品を客観的な視点で見ることができ、作品の構想を練り直すこともできる。また、作品を様々な背景で撮影することにより、自分の作品に愛着がわき、自己肯定感を高めることにもつながった。

○ 改善策

制作時間の確保が最大の課題である。作品作りと作品写真撮影、プレゼンテーション作成の3つを限られた時間内にこなすには、「慣れ」も必要となる。今年度は初の試みで時間を要したが、繰り返し実践することで、スピードアップにつながるものと考えている。

< 作品プレゼンテーション（部分） >

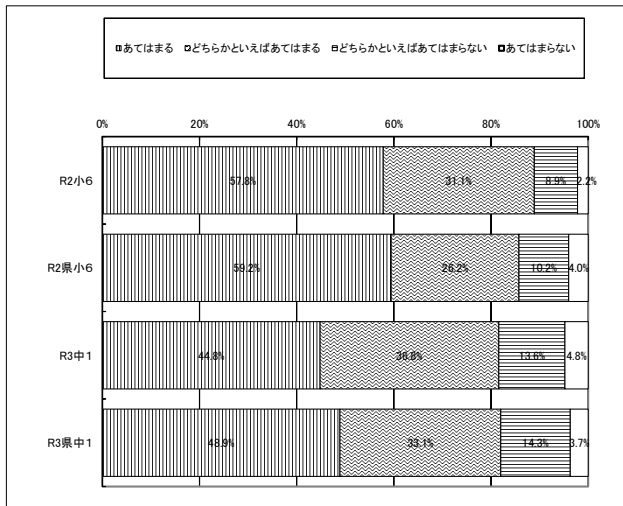


Ⅲ 生徒の変容について

各学年のリフレクションシートを見ると、美術の制作を通して、表現力や発想力だけでなく、観察力や思考力を高めようとする記述が見られる。授業においても、作品プレゼンテーションで、美術用語を意図的に用いて説明しようとする姿が見られる。しかし、学力が高く知識を求めるあまり、正解が無く答えの出ない教科である美術を不得意とする生徒が、本校の生徒には多く見られる。

美術科に対する情意面に関する「令和3年度秋田県学習状況調査における生徒質問紙の結果」は次のようになっている。

○1年生 「美術の勉強は好きだ」



美術が大好き・好きの理由

(右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	①内容に興味があつておもしろい	②わかりやすい	③将来、社会に出たときに役立つ	④生活の中で役立つ	⑤人とかかわりの中で役立つ	⑥考えるのが楽しい	⑦得意	小計
R2小6	25.6% ▲1.3	2.2% ▲2.3	0% ▲2.3	1.1% ▲2.2		35.6% 9.2	16.7% 0.1	81.2% 1.3
R3中1	32.8% 2.3	2.4% ▲3.3	0% ▲1.6	0.8% ▲1.7		32% 10.7	8% ▲4.5	76% 1.9
R4中2								
R5中3								

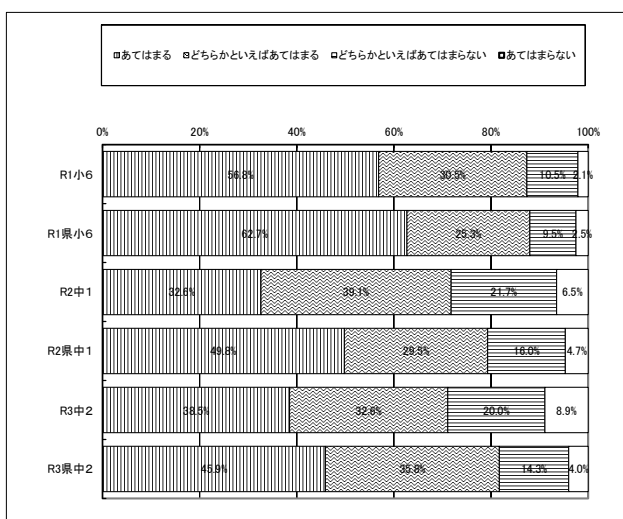
美術が嫌い・大嫌いの理由

(右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	⑧内容に興味がなく	⑨わかりにくい	⑩将来、社会に出たときに役に立たない	⑪生活の中で役に立たない	⑫人とかかわりの中で役に立たない	⑬考えるのがめんどろ	⑭不得意	小計
R2小6	1.1% 1.0	1.1% ▲0.7	2.2% ▲1.2	0% 0.6		0% 0.9	6.7% 1.6	11.1% 2.2
R3中1	1.6% 1.9	0% 0.5	3.2% ▲1.6	0.8% 0.1		2.4% ▲1.5	10.4% ▲1.0	18.4% ▲1.6
R4中2								
R5中3								

※⑩その他5.6%を除く

○2年生 「美術の勉強は好きだ」



美術が大好き・好きの理由

(右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	①内容に興味があつておもしろい	②わかりやすい	③将来、社会に出たときに役立つ	④生活の中で役立つ	⑤人とかかわりの中で役立つ	⑥考えるのが楽しい	⑦得意	小計
R1小6	16.8% ▲8.0	9.5% 5.2	1.1% ▲1.1	1.1% ▲2.0		40% 13.3	14.7% ▲4.0	83.2% 1.8
R2中1	19.7% ▲4.0	4.4% ▲1.2	1.5% ▲1.4	0% ▲2.7		18.2% ▲2.0	14.6% 0.1	58.4% ▲14.0
R3中2	28.9% ▲3.4	3.7% ▲0.7	0.7% ▲1.2	1.5% ▲0.3		18.5% ▲1.0	8.1% ▲3.0	61.4% ▲11.5
R4中3								

美術が嫌い・大嫌いの理由

(右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	⑧内容に興味がなく	⑨わかりにくい	⑩将来、社会に出たときに役に立たない	⑪生活の中で役に立たない	⑫人とかかわりの中で役に立たない	⑬考えるのがめんどろ	⑭不得意	小計
R1小6	0% 1.6	3.2% ▲2.9	1.1% 0.1	0% 0.5		1.1% ▲0.4	6.3% 0.8	11.7% ▲0.3
R2中1	3.6% 0.8	2.2% ▲1.5	2.9% ▲0.8	1.5% ▲0.3		1.5% ▲0.5	15.3% ▲5.6	27% ▲7.9
R3中2	3.7% 0.3	0% 0.5	4.4% ▲2.6	1.5% ▲0.3		1.5% ▲0.7	17% ▲7.9	28.1% ▲11.1
R4中3								

※⑩その他10.4%を除く

上記の結果から、生徒のやる気を引き出す「題材の魅力」の大切さ、「社会の中における美術の役割」を考える必要性、そして美術を不得意とする生徒の心情面のケアがキーポイントとして読み取れる。美術が不得意という認識の生徒に、「正解も無いが失敗も無い」という感覚を、少しずつでも認識することができるような制作時のサポートや声掛け、授業展開の工夫が課題である。

○「内容に興味があつておもしろい」	1年 32.8%	2年 28.9%
○「考えるのが楽しい」	1年 32%	2年 18.5%

「内容に興味があつておもしろい」という項目の数値が、2年生においては昨年度の19.7%から28.9%と大きく上昇している。これは「題材の魅力」と「授業展開の工夫」の力が大きいのではないかとと思われる。また、「考えるのが楽しい」という項目を選択した生徒が、1、2年ともに多く見られるが、これは素晴らしいことである。思考力を働かせて制作するという意識を大切にしたい。

IV 来年度の美術科の教科経営

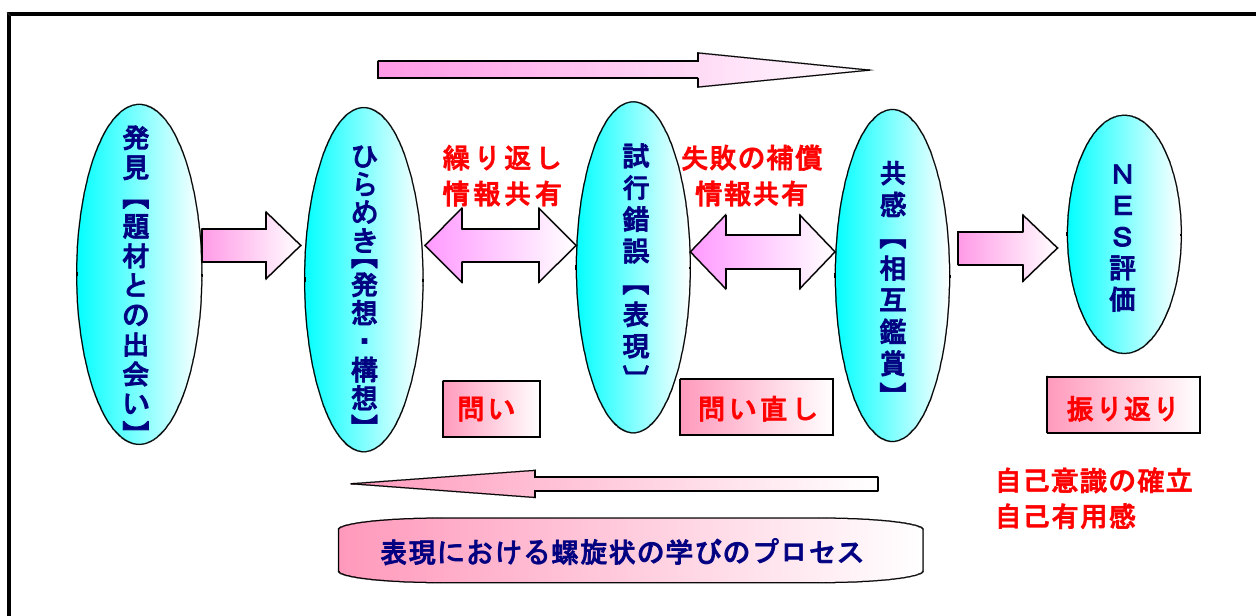
1. テーマ・サブテーマと教科の特質

思いを形や色彩で表現し、発信する ー発見・ひらめき・共感が生まれる学びを通してー	
特 質	一人一人の個性を造形の力で社会とつなぎ合わせていくことである。具体的には、様々な形や色彩などの造形と、想像や心、精神、感情などの心の働きとを、造形の要素を介して行き来しながら深めることを通して、漠然と見ているだけでは気付かなかった身の回りの形や色彩などの働きに気付いたり、よさや美しさなどを感じ取ったりすることができるようにすることである。

2. 具体的な実践事項

- (1) 発見・ひらめき・共感が生まれる学びを生むために
- ・【題材との出会い】魅力的な題材を開発し選択することで、多様な表現や材料体験をし、社会の中の美術や美術文化の世界を発見することができるようにする。
 - ・【豊かな発想・構想】映像メディアや ICT 機器を活用して資料を提示したり、主体的・対話的な話し合い活動から自分の思いや願い、他者への気持ち、あこがれなどの心情を明確にしたりしながら、独創的なひらめきが生じるようにする。
 - ・【表現と相互鑑賞】**発想・構想** ⇄ **表現** ⇄ **相互鑑賞** の学びのプロセスを行き来しながら学ぶことにより、螺旋状に思考力・判断力・表現力が向上し、自他の想像や心、精神、感情などの心の働きを感じ取り、共感することができるようにする。
- (2) 「ミエルトーク」や映像メディア、ICT 機器の効果的な活用
- ・【思考を可視化する「ミエルトーク」】生活の中の美術や自他の表現を造形的な視点で考え、発想や表現の可能性を広げ、思考を可視化するツールとして活用する。
 - ・【映像メディアや ICT 機器の活用】課題や作品を効果的に提示したり、表現の可能性を広げたりするためのツールとして活用する。例えば、アイデアを練ったり編集したりする発想や構想の場面や、作品を大型モニターやプロジェクターで映し出したり、個々のタブレットで自分の見たい部分をズームして見たりする活動などで活用する。
 - ・【ポートフォリオの作成と作品プレゼンテーション】
作品の制作過程を毎時間撮影することで、客観的な視点で作品を見つめなおす機会となる。また、作品のプレゼンテーションを作成することで、制作の進度の違いにも対応ができる。

3. 学びのプロセス



I 今年度の保健体育科の教科経営

1. 本校の生徒の実態

県の学習状況調査による比較において、運動すること自体が好きな生徒は県平均とほぼ同率である。その調査からも「考える楽しさ」や「役に立つ」ということに楽しさを感じている生徒が多いのが、本校生徒の特徴であり、よさでもある。一方で、保体が嫌いな理由としては、「不得意」が最も多い。「する・みる・支える・知る」といった多様な活動を通して、本校生徒のよさを発揮させることは、知識や技能の習得状況が主な意欲となることを防ぐことにもつながると考える。

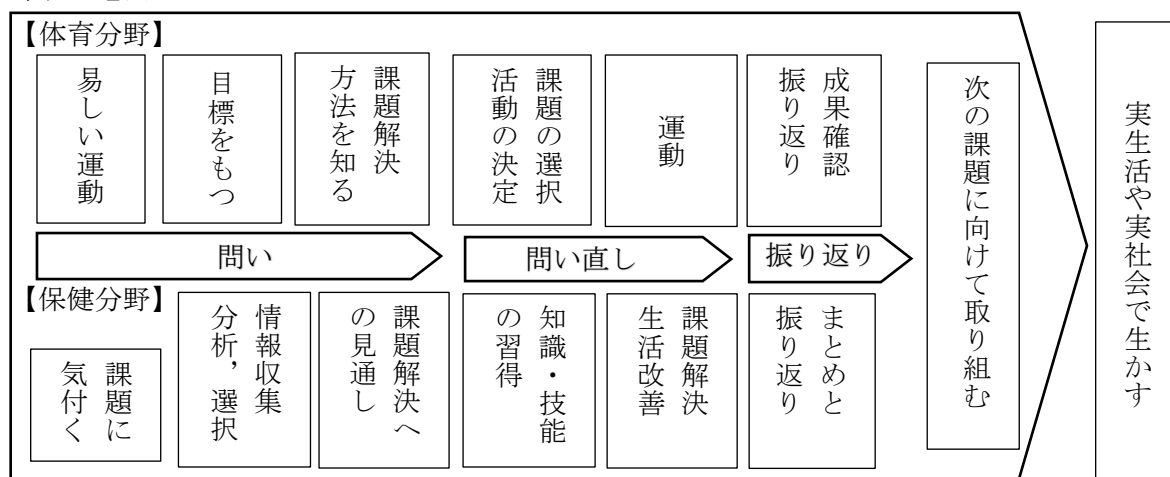
2. テーマ・サブテーマと教科の特質

運動を「する・みる・支える・知る」楽しさや喜びを味わう - 仲間と共に、心と体の心地よさを体感できる学びを通して -	
特質	生涯にわたり楽しく明るい生活を営むことができるよう、運動を通して体力を養うとともに健康的な生活習慣を形成すること。具体的には、運動の楽しさや健康の意義などを実感できるように、基本的な運動の技能や知識を確実に身に付けるとともに、それらを活用して、自他の運動や健康の課題を解決するなどの学習をバランスよく行うこと。

3. 具体的な実践事項

- (1) 主体的な行動力を発揮しやすい環境づくり
 - ・単元や毎時の目標を明確に明示する。
 - ・ルールやゲームの進め方などを、生徒の興味・関心や技能等に応じて工夫する。
 - ・教材・教具や活動の場などを、各運動の特性に応じて工夫する。
 - ・活動単位やグループ編成を、活動の目的や内容に応じて工夫する。
- (2) 批判的な思考力の向上につながる動きや思考の可視化
 - ・ミエルトークによる「思考」と運動による「試行」の往還を重視する。
 - ・動きのコツやポイントをつかめるよう、動画のスロー再生や静止画等を活用する。
 - ・集団の動きをICT機器で視聴し、作戦や改善策を立てる話し合い活動を重視する。
 - ・学習の足跡として活用できるように、メモや動きなどを写真や動画で記録する。
- (3) 多角的な省察力を鍛えるNES評価
 - ・ねらいに応じて評価項目を細分化し、生徒の心情を把握する。
 - ・知識・技能の習得状況を把握し、次時の学習活動の目標設定に活用する。
 - ・生徒が身に付けた力を確認できるように、NES評価を生徒同士で共有したり、ポートフォリオとして積み重ねたりする。

4. 学びのプロセス



II 具体的な実践事項について

(1) 主体的な行動力を発揮しやすい環境づくり

【単元・毎時における明確な目標明示】

各単元や毎時におけるゴールや身に付けたい力を踏まえながら前時のつながりのある目標を設定することにより、生徒自身が動きや考えを具体的にイメージし、目標や課題を自分や集団のこととして活動ができるようにした。それにより、振り返りでは知識と技能を関連付けながら振り返ったり、本時及び次時への活動意欲を喚起したりすることができた。NES評価や振り返りでの生徒の言葉を取り入れたり、キーワード化したりして、さらに生徒が自身のこととして考えられるようにしたい。



【活動の進め方やゲーム時のルール工夫】

生徒の興味・関心や技能等に応じ、各個人が具体目標を設定できる機会を設けた。また、互いの活動を見合い、関わり合うことにより、生徒が運動の仕方を改善し、自分たちでゲームを運営できるようにした。それにより、発展的練習方法を考え出したり、自分たちの状況に合った自由な発想で決めたルールによるゲームを展開したりすることができた。



【教材・教具や活動の場の工夫】

個々の運動経験や知識、昨年の学習等をもとにした学習活動を行った。バレーボールを例にすると、通常のバレーボールではボールも固く、少なからず恐怖心も発生する。そこで、数種類のサイズで柔らかいボールを使用し、自分たちで選択できるようにした。また、ネットの高さを工夫したり、ゲームの人数も少人数化したりすることで、ラリーを楽しみながら運動量の確保に結び付けることができた。今後は、一連の運動を分解して行う部分練習的な活動をさらに取り入れ、「できるようになった」という喜びを味わうことができるようにしたい。



【活動単位やグループ編成の工夫】

ペア活動においてはペアを固定せず、互いのよさを見付けたり、運動種目によっては男女関係なくグルーピングをしたりすることで、関わり合う機会を多くして人間関係づくりの場となるようにした。その後、一定の活動をした後にはグループを固定し、話合いや運動をする相手の実態等をつかみやすいようにした。今後も状況に応じて、グルーピングや活動単位に柔軟性をもたせ、多様な見方・考え方に触れられるようにしたい。

(2) 批判的な思考力の向上につながる動きや思考の可視化

【「思考」と運動による「試行」の往還】

ペアやグループ毎に、言葉や運動による「思考」と「試行」を重ねることで「問い」に迫るようにした。ある一定の運動や活動を経てから他者や他グループ間で互いの動きや考えに触れることにより、自分や自分たちの考えについて問い直す機会ができるようにした。それにより、自分たちの考えを深めたり、伝わりきれない部分について考え直したりすることにもなっていた。

【動きのコツやポイントをつかむ】

自分やグループの運動の様子について、主にビデオ機能で撮影をし、運動後にそれについて確認し合う使い方を行った。特に、一瞬の動きとなってしまう、客観的に自分の動きを捉えることができにくい器械運動（跳び箱運動やマット運動）においては効果的であった。撮影した動画を静止画として見ることで、自分や相手の動きのよさや改善点などを明らかにして学習することができた。また、ソフトボールのバットスイングやバドミントンのラケットワークなどの道具を用いた運動などにおいては、客観的な視点から自分がそれらをどう動かしているかを知ることにもなり、「問い直し」を意識した運動することにもつながった。



【ICT機器による集団の動きの撮影や視聴】

特に、ダンスでの活用場面が効果的で、模範となる振り付けの動画や自分たちの踊りを撮影したものを視聴することにより、自分たちの作品の完成度が次第に高まっていた。大画面TVへの無線接続はとても見やすく、活動しやすいものとなった。また、再生速度の調整によって、難しい部分の観察や練習などにも使用することができた。自分たちの初期の頃の動画を見ることで自分たちの変容や成長を共有し、学習の足跡とすることができた。

(3) 多角的な省察力を鍛えるNES評価

【評価項目の細分化による生徒の心情把握】

一つ一つの授業においては「N・E・S」の3つの項目から最も自分の心情に近い自己評価を選択したり、単元の終わりにおいては自分の心情を「100%」とした場合の「N・E・S」それぞれについての割合を数値で示すような自己評価をしたりした。集団におけるNES評価の全体像の把握により、次時以降の課題設定に反映した。例として、S評価が多い場合は応用発展的な課題を提示し、N評価が多いときはスモールステップ的な運動を取り入れるなどして、生徒の運動意欲喚起にもつながるようにした。

N	15%
E	15%
S	70%

今日は昨日習った大外刈りを少し難位度を高くして行った。中腰の状態から受けると高さもあって傾きも強かったが、腰を出してできた！

【知識・技能の実態把握による次時の活動の充実】

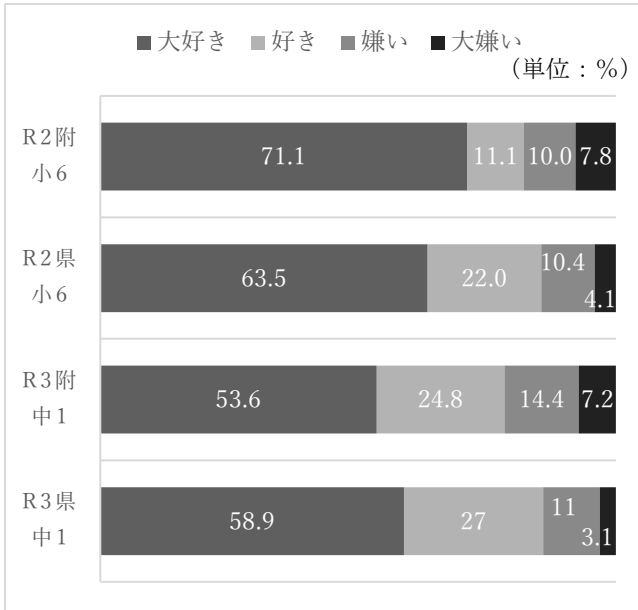
運動の見取りと振り返りの際は、うまくできていること（成功体験）以上にうまくできていないこと（つまづき）に着目した上で、NES評価の状況も踏まえながら次時の課題や学習活動に結び付けるようにした。特に、前時の主活動であった内容を中心にした次時の前半部分でのウォーミングアップタイムでは、つまづきや成功体験について教え合ったり、見合ったりすることで、知識や技能の高まりを実感できるようにした。「できるようになった」という達成感は活動意欲に直結する重要な要素である。グループメンバーの関わり合いの力を大切に、「できる」や「わかる」という習得に結び付けたい。



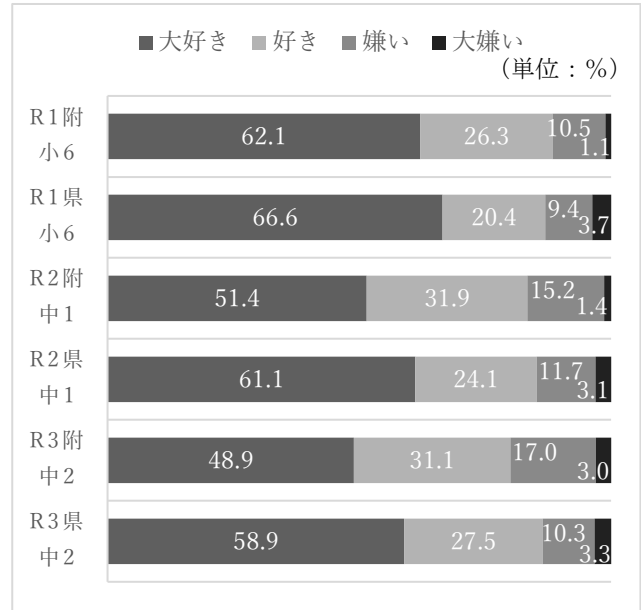
Ⅲ 生徒の変容について

「令和3年度秋田県学習状況調査における生徒質問紙」における保体の情意面（1・2年生）

【1年生】



【2年生】



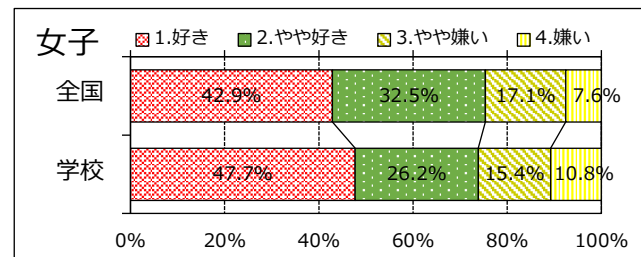
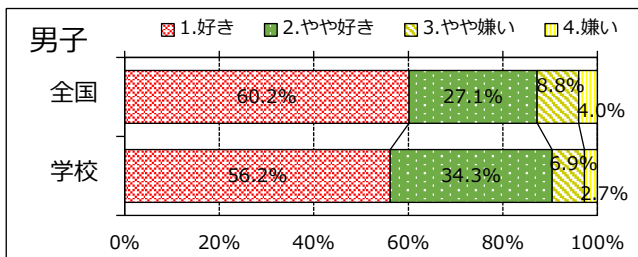
好き	興味があつて面白い	わかりやすい	将来役立つ	生活の中で役立つ	考えるのが楽しい	得意						
R2小6	18.9	-5.9	0	-4.5	4.4	-0.3	3.3	-2	10	7.1	31.1	-2.4
R3中1	26.4	-0.2	2.4	-3.1	2.4	-2.5	7.2	-0.1	4	-0.7	27.2	-0.1
嫌い	興味がない	わかりにくい	将来役立たない	生活の中で役立たない	考えるのがめんどう	不得意						
R2小6	0	1.3	0	0.2	3.3	-2.6	1.1	-0.8	0	0.1	11.1	0.1
R3中1	6.4	-4.4	0	0.4	0	0.4	0.8	-0.6	0.8	-0.5	12.8	-2.8

好き	興味があつて面白い	わかりやすい	将来役立つ	生活の中で役立つ	考えるのが楽しい	得意						
R1小6	15.8	-8.1	4.2	0.3	4.2	0.3	5.3	0.4	8.4	5.2	34.7	-0.8
R2中1	23.4	-1.9	2.2	-2.3	2.2	-1.9	9.5	2.4	8.8	3.6	27	-3.6
R3中2	21.5	-7.4	3	-0.9	4.4	-0.1	9.6	3.4	3.7	-1.2	24.4	-2.7
嫌い	興味がない	わかりにくい	将来役立たない	生活の中で役立たない	考えるのがめんどう	不得意						
R1小6	1.1	0	0	0.2	0	0.8	0	0.4	0	0.1	10.5	-0.4
R2中1	0	2.4	0	0.3	1.5	-0.6	0	0.1	0	0.3	15.3	-5.9
R3中2	2.2	-0.5	0	0.2	0.7	-0.1	0	0.2	0	0.2	16.3	-6.4

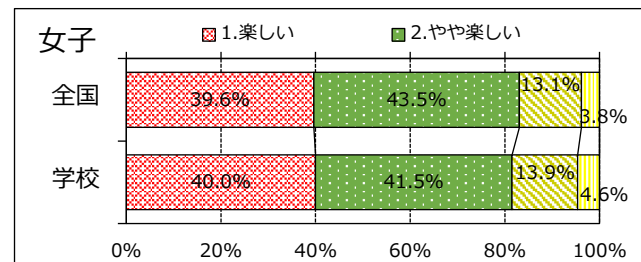
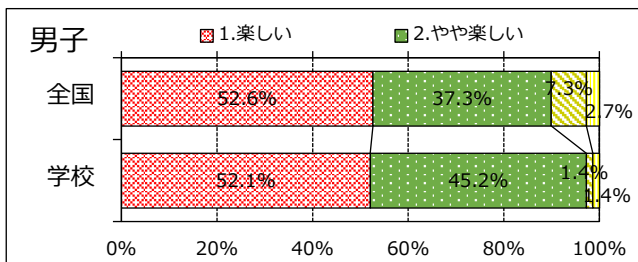
()内数字は県平均との比較

「令和3年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」（2年生対象）

【運動やスポーツをすることは好きですか】



【保健体育の授業は楽しいですか】



2つのデータから「好き」と「嫌い」の情意を左右するものとして、2学年ともに「得意」か「不得意」かという点が依然として最上位となり続けている。「生活の中で役に立つ」等の技能の状況に左右されない要素を踏まえた「する」という学習活動の展開を行うことで、技能が情意面に与える影

響を軽減するようにした。「不得意」であることによる情意面の低下が見られるものの、「保健体育の授業は楽しい」という割合は「好き」を上回る実態がある。それは、多様な「運動の楽しさ」を味わう機会をもつことの重要性の裏付けと考えられる。自他の観察にICT機器の活用を加えた多面的・多角的な「みる」、友だちやグループでの関わり合いによる「支える」、動きのヒントや知識の習得による「知る」、などのような場づくりの継続を進め、個に合った保体の楽しみ方を見付けられる授業展開をする必要がある。それにより、運動によって爽快感や充実感などが得られたり、実生活を健康的によりよく暮らすための知識や具体的方法を身に付けたりすることにより、将来における心の豊かさと健康に結び付けられるようにしたい。

IV 来年度の保健体育科の教科経営

1. テーマ・サブテーマと教科の特質

運動を「する・みる・支える・知る」楽しさや喜びを味わう - 仲間と共に、心と体の心地よさを体感できる学びを通して -	
特 質	生涯にわたり楽しく明るい生活を営むことができるよう、運動を通して体力を養うとともに健康的な生活習慣を形成すること。具体的には、運動の楽しさや健康の意義などを実感できるように、基本的な運動の技能や知識を確実に身に付けるとともに、それらを活用して、自他の運動や健康の課題を解決するなどの学習をバランスよく行うこと。

2. 具体的な実践事項

(1) 主体的な行動力を促す環境づくり

- ・NES評価や振り返りを活かし、前時と本時のつながりのある実態に即した目標を明示する。
- ・活動の進め方やルールづくりなどにおいて、生徒自身の思考や判断、表現を取り入れる。
- ・健康と安全に気を配り、十分な運動量によってのびのびと活動ができる場をつくる。
- ・運動を楽しみ、技能の高まりや体力の向上を実感できる学習活動を展開する。

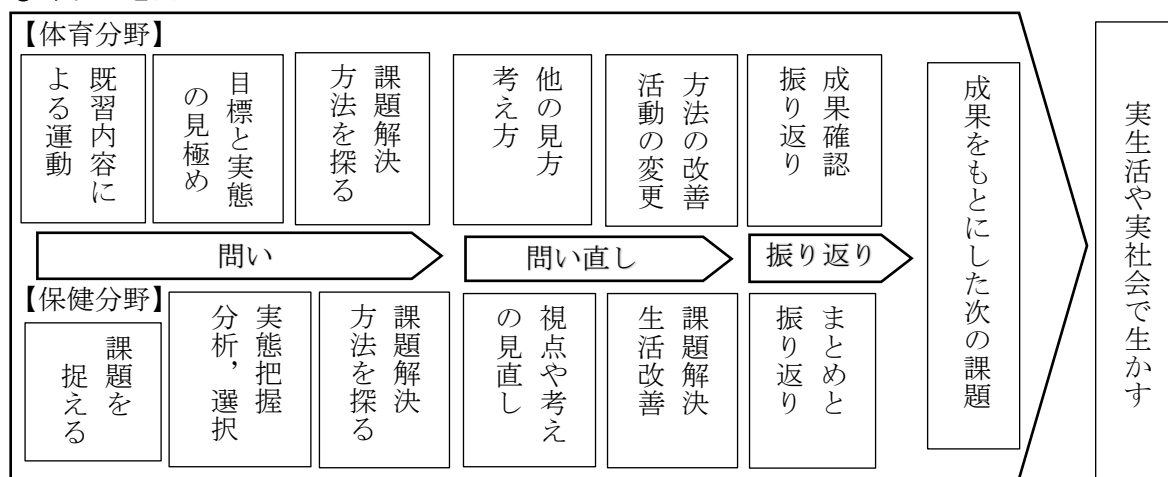
(2) 批判的な思考力の向上につながる動きや思考の共有

- ・動きを見合い、考えを伝え合い、全員の課題という認識で活動できるようにする。
- ・ICT機器を活用し、視覚的にも自他の動きの実態やコツ、ポイントをつかめるようにする。
- ・他者の様々な見方・考え方に触れ、自分たち考えに対する問い直しを図る。

(3) NES評価による振り返りと次時をつなぐ授業展開

- ・振り返りコメントやNES評価による実態を反映した課題設定を行う。
- ・達成型ゲームやスモールステップ等により、前向きな振り返りができるようにする。
- ・グループ内や全体での振り返りの共有により、関わり合う力と多角的な省察力を鍛える。

3. 学びのプロセス



I 今年度の技術・家庭科の教科経営

1. 本校の生徒の実態

生活経験が少ないため、生活の中から問題を見いだして課題を設定する力が不足している生徒が多い。そのため、問題解決に向けて生活経験と関連付けて解決方法を考えたり、新しい方法や技術を創造したりする学習場面では、生活実感の伴わない意見が交わされることもある。ものづくりや製作に苦手意識をもっている生徒もいるが、周りの生徒と教え合ったり、既習の知識や技術を活用したりしながら作業を進め、意欲的に取り組んでいる。

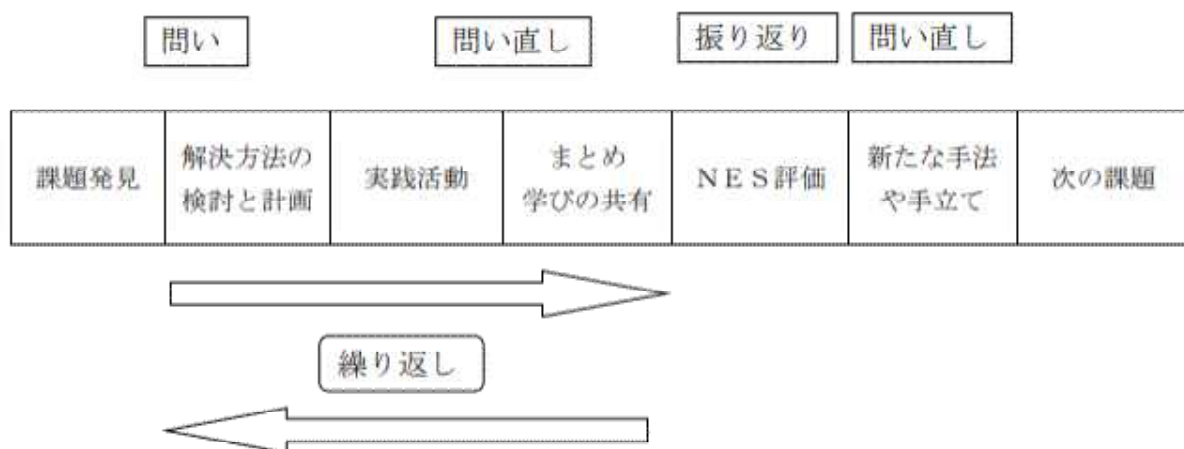
2. テーマ・サブテーマと教科の特質

よりよい生活を工夫し，創造する －実生活を検証・評価し，計画・実践する学びを通して－	
特 質	生活や社会の問題を，実践的・体験的な活動から解決する力を養うこと。具体的には，実践的・体験的活動を通して，生活に必要な特質な知識及び技能を身に付けさせ，生活や社会の中から問題を見いだして解決する力を養うことによって，現在及び将来にわたる実際の生活の場で学習したことを生きて働く力とすること。

3. 具体的な実践事項

- ・ペアやグループ，全体などで実践的・体験的な活動の成果と課題を共有し，新たな気付きや理解の深化を促す検証・評価と修正・改善のサイクルを重視した授業を展開する。また，授業や題材全体を通しての問い，問い直しも重視する。
- ・製作活動や実践活動の中で，ミエルトークを行ったり資料や手順の提示をしたりする際にICT機器を効果的に活用する。
- ・学びのプロセスの終末部分においてNES評価を活用し，新たな手法や手立てを試み，さらによいものをつくりあげようとしている姿を見取り，生徒が実生活の場に生かそうとする行動につなげる。

4. 学びのプロセス



II 具体的な実践事項について (技術分野)

(1) 授業を見合う会での授業について (2月24日 1年A組)

- ・ 題材 情報モラルと知的財産 ～著作権について考えよう～
- ・ ねらい 著作権を保護することの重要性や意義について理解し、説明することができる。
- ・ 展開例

過程	学習活動・主な発問等	指導の目的と手立て
問い	1 本時の課題を確認する。 著作権は本当に大切なのか？	・ 著作権について知っていることやイメージについて、数名の生徒に発表させることで、学習への関心を高める。
問い直し	2 日常であり得るケースを例題として考え、解説を聞く。その後、さらに3つのケースについて個人で考える。 3 学習シートに自分の考えを記入した後、その答えをFormsで送信する。	・ ケース毎に補助的な説明をし、生徒の理解を促す。 ・ 個人で考えるよう声をかける。 ・ 集まった回答を、円グラフでモニターに表示する。
学びの共有	4 学級全体の回答の結果について、4人グループで協議するとともに、3つのケースの正解を確認する。 5 著作権について簡単な確認する。	・ 3つのケースについて、法的根拠を基にして説明する。 ・ 著作権の詳細について、プレゼンソフトで説明する (モニター)。
	6 著作権が保護されなければ、どのようなことが起こるのかを考え、コラボノートを使用して、協議する。	・ 考えるヒントとして、著作権に関するトラブルや、著作権に関する事例を簡単に紹介する。 ・ 付せんは黄色を基本とし、核になりそうな意見の付せんはピンクにするよう指示する。 ・ コラボノートの「寄せ書きフォーマット」に、付せん機能を使用して意見を書き込む。
	7 それぞれの班でまとまった意見を発表する (数グループを抽出)。	・ 各グループの話し合いの結果をモニターに表示する。
	8 著作権が保護されている理由を確認する。	・ 著作権の更なる詳細について、プレゼンソフトで説明する (モニター)。
振り返り	9 本時の活動を振り返る。	・ 本時の活動を、NES評価の視点で振り返り、自己評価するよう促す。 N=他の権利についても知ってみたい。 E=どんな自分を発見できたのか。 S=どんな点に満足出来たのか。

【授業の様子】



- ・ 情報モラル教育の一環として、著作権を取り上げた。身近に感じつつも、詳細についてはあまりよく分からない権利について、生徒は興味深く取り組んでいた。
- ・ 序盤の生徒一人一人の回答はFormsの機能を活用し、全員が投票した後、集計結果をモニターで提示した。
- ・ 話し合いの意見交流は、対話に加えて、コラボノートを使用して自分の意見を共有シートに入力する形とした。
- ・ グループでの協議は、コラボノートを使い、グループ毎の発表も生徒それぞれがタブレット端末を見ながら行った。モニターでは字が小さく学級全体で共有しにくいという点があり、画面を共有すると、それぞれがお互いの意見をよく見ることができたためである。
- ・ コラボノートのシートはグループ別に印刷、配付できるという利点もあり、話し合いの経過や結果を残すことができる。
- ・ タブレットの操作については、おぼつかない生徒がおらず、日々の他教科の授業や行事でのタブレット端末の活用の成果の上に進めることができた。

【堀江さおり先生からの指導助言】

- ・授業の流れが良く、生徒のタブレット端末の操作もスムーズであった。
- ・著作権のリアリティをより感じさせるために、「自分のイラストが勝手に使用されてはどうか？」というように、自分の場合に置き換えて考える方法もあったと思われる。
- ・話し合い活動の雰囲気が和やかで、真剣に学びを深めようとしている姿が見られた。

(2) ICTを活用した取り組みについて

① 木工品の製作

○ Microsoft PowerPoint機能を活用した資料提示

- ・作業についての資料（材料の取り方や道具の使用方法についての動画）を活用することにより、生徒が適切な使用による安全な作業を進めることができた。
- ・教師が制作したプレゼン資料をOne Driveに保存しており、資料によっては生徒にteamsからダウンロードして活用できるようにした。これにより生徒は、一過性の資料でも繰り返し目にするができるようになり、理解が深まっているように感じている。

② 実生活での消費電力及び電気代の調査

○ Microsoft Teamsの機能を活用した、
テンプレートの配布(Excel)

【メリットと効果】

- ・ある程度のテンプレートを作成して生徒に配布することにより、生徒個人のテンプレート作成の手間が減り、授業時間を課題追求のために最大限に活用することができた。
- ・オンライン授業や学校を欠席した場合にも、生徒は自宅で作業をすることができる。
- ・ファイルを一括管理することにより、教師が点検しやすく、次時の授業のペースを把握しやすくなった。
- ・リフレクションシートをデジタル化することにより、データとして一括管理することができた。また、生徒の授業の振り返りや、疑問等に対する教師からのコメントも容易に記録することができた。

【課題】

- ・何らかの原因でネットワークの通信状況が断裂したり不安定になったりした際の、ファイルの操作や管理については、ハード面の整備、点検を含めて対処していく必要がある。
- ・タブレット端末を活用することにより、読み書きの機会がなくなったり、発表者に対して傾聴できないという場面もあった。双方の良さのバランスを考えたい。



- ・TeamsやForms, コラボノート等のアプリケーションの活用については、今年度、授業のみならず学校行事でも頻繁に活用されていることから、生徒が本教科で特別に使用方法を解説せずとも、機能をスムーズに使える状況にある。次年度も効果的な活用を模索していきたいと考える。

(家庭分野)

- (1) 生活や社会の中から問題を見だし課題を設定するという力を育成するために、生徒にとって身近な題材を取り上げ、実践場면을想定しやすくした。



弁当の献立作成は生徒にとって身近な題材であり、実践場面が想像しやすいものである。身近な題材ではあるが、調理経験の多くない生徒にとっては、短時間の中で、条件を踏まえながら献立を考えることは容易ではない。そんな中、生活経験の差や好みの違いがあることを前提に、既習事項を生かしながらグループで話し合いを深めることができた。弁当の野菜の副菜を話し合う前に、昼食の弁当にふさわしい条件や、主食と主菜に不足している栄養素を学級全体で確認できたことが、より話し

合いを活性化させた。また、弁当のイメージを掴ませるために、具体物を一皿ずつ用意し、想起しやすいようにした。

- (2) 授業の振り返りの場面ではN E S 評価を活用し、新たな価値に気付いた生徒を見取り称賛するとともに他者との共有化を図り、実践化に向けた意欲を喚起した。

学習課題 昼食に食べる弁当にふさわしい野菜を使った副菜を考えよう(4人組)

発表メモ	全ての栄養素(炭水化物)を摂る。糖質、タンパク質、脂質、ビタミン、ミネラル、食物繊維、鉄分、亜鉛、銅、マンガン、カルシウム、マグネシウム、カリウム、ナトリウム、リン、硫黄、セレン、コバルト、ヨウ素、モリブデン、銅、マンガン、カルシウム、マグネシウム、カリウム、ナトリウム、リン、硫黄、セレン、コバルト、ヨウ素、モリブデン	全ての栄養素(タンパク質)を摂る。糖質、タンパク質、脂質、ビタミン、ミネラル、食物繊維、鉄分、亜鉛、銅、マンガン、カルシウム、マグネシウム、カリウム、ナトリウム、リン、硫黄、セレン、コバルト、ヨウ素、モリブデン	全ての栄養素(脂質)を摂る。糖質、タンパク質、脂質、ビタミン、ミネラル、食物繊維、鉄分、亜鉛、銅、マンガン、カルシウム、マグネシウム、カリウム、ナトリウム、リン、硫黄、セレン、コバルト、ヨウ素、モリブデン
	野菜(人参、大根、ピーマン、ピーチトマト)	野菜(人参、大根、ピーマン、ピーチトマト)	野菜(人参、大根、ピーマン、ピーチトマト)

N E S

N もっと向上したい
E 新しい自分を見つけた
S 自分の力を発揮できた

N: 他に何の栄養素が不足しているの考える、残りの野菜に何の栄養素が必要か考える(野菜の種類は1種類)
E: 野菜の種類を気にして、野菜の種類を1種類に絞ったので、自分自身で考える時に、見つけたい野菜の種類

生徒の振り返りには、「つくる」という実現に向けての意欲が表れており、健康的な食生活や実践につながる時間となった。自分が考えていなかった視点に気付いた生徒は、「再度考えてみたい」と前向きであり、生徒の振り返りを通して様々な視点や新たな価値を共有化する必要性を感じた。本時では、2名の生徒の発表のみの取り上げだったが、授業の振り返り段階において、どのような気づきがあったか、全体で共有化する手法を活用したい。

- (3) 製作過程や振り返り場面におけるICT活用

家庭科 自己評価シート

1			N: さらに向上したい点	
2			E: どんな自分を発見できたか	
3			S: どんな点に満足できたか	
4	曜日	学習課題	N E S	評価記述
5	木	調理の準備に手遅れで作業し直し	S	考えてみて、自分の家のことが発端なのも考えることができたので良かったと思います。
6				自分の事を想像できたところがいいですね!

振り返りのシートのICT化を試行中である。Teamsを活用し各クラスのチームをつくり、ファイルの共有を行った。他の生徒の考えを知ることができる、瞬時にモニターに投影し確認できる利点がある。また、製作した作品をタブレットで撮影し、ファイルに投稿することで、製作記録にもなり、互いの作品を見合うこともできた。入力に時間がかかる生徒もいることに配慮し、時間を確保したい。

Ⅲ 生徒の変容について

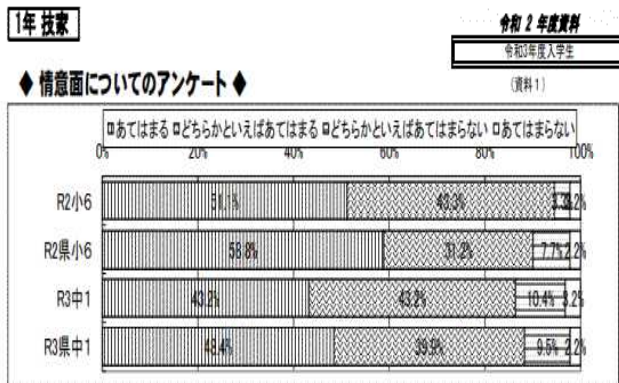
技術・家庭科の情意面に関する「令和3年度秋田県学習状況調査における生徒質問紙の結果」は次のようになっている。1年生では「将来社会に出たときに役立つ」についてのポイントが全県に比較するとマイナスが目立つ。2年生では、昨年度に比べ「内容に興味があつておもしろい」のポイントがアップしている。一方で、「生活の中で役立つ」のポイントが大幅にダウンしている。アンケートをとった段階では、製作等の作業を主として進めており、実生活での実践力や将来の展望についてあまり触れていない学習内容であった。この点がこの要因ではないかと推測している。

家庭科では、題材として現在の生活の身近なものに焦点を当てており、将来を展望するまでに至らなかったことも要因として考えられる。しかしその後は、題材や授業の単位で問い直しをさせることにより、単に知識や技能を習得するのではなく、その活用の仕方や実生活について考えを深めることができた生徒も多い。

技術科では、「エネルギー変換に関する技術」の単元で、SDGsに向けての取り組みと、自分自身の未来の生活の双方をイメージしながら、課題に取り組めた生徒が多く見られた。また、学びのプロセスを大切にしてきたことから、学習した内容と実生活の現状をリンクさせることができる生徒が増えたと感じている。風力発電や水耕栽培など、実生活にある既存の技術に注目できるようになった生徒が増えたと感じる。

次年度にあたり、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築につながる題材を工夫するとともに、多くの場で生活や将来につながる実感をもたせていきたい。

○ 1年生 「技・家の勉強は好きだ」



技家 が大好き・好きの理由 (右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

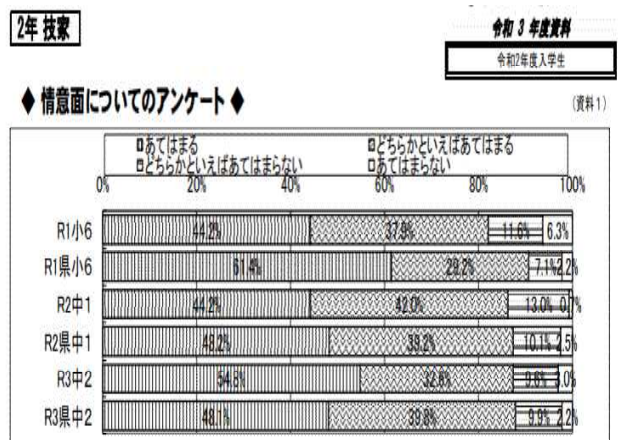
学年	①内容に興味があつておもしろい	②わかりやすい	③将来、社会に出たときに役立つ	④生活の中で役立つ	⑤人とかかわりの中で役立つ	⑥考えるのが楽しい	⑦得意	小計		
R2小6	11.1%▲5.1	4.4%	0.0	23.3%▲4.6	43.3%▲9.1	4.4%	1.4	6.7%▲4.9	93.2%▲5.7	
R3中1	21.6%▲1.0	7.2%	1.7	12%	▲5.0	21.6%▲0.8	11.2%	2.0	5.6%▲2.0	79.2%▲5.1
R4中2										
R5中3										

技家 が嫌い・大嫌いの理由 (右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	⑧内容に興味がなく	⑨わかりにくい	⑩将来、社会に出たときに役立つ	⑪生活の中で役立つ	⑫人とかかわりの中で役立つ	⑬考えるのがめんどう	⑭不得意	小計					
R2小6	1.1%	1.3%	0%	0.9%	0%	0.2%	0%	0.1%	0%	0.5%	4.4%	1.1%	5.5%▲4.1
R3中1	3.2%	0.4%	0%	0.9%	0%	0.3%	0%	0.2%	0.8%	▲0.1	9.6%	▲4.3	13.6%▲2.6
R4中2													
R5中3													

※⑧その他7.2%を除く

○ 2年生 「技・家の勉強は好きだ」



技家 が大好き・好きの理由 (右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	①内容に興味があつておもしろい	②わかりやすい	③将来、社会に出たときに役立つ	④生活の中で役立つ	⑤人とかかわりの中で役立つ	⑥考えるのが楽しい	⑦得意	小計		
R1小6	11.6%▲3.6	7.4%	3.5	22.1%▲2.2	25.3%▲6.7	5.3%	1.7	7.4%▲5.9	79.1%▲4.4	
R2中1	21.9%▲2.4	3.6%	▲2.0	11.7%▲6.8	23.4%▲0.7	13.1%	4.5	8.8%	0.0	82.5%▲1.2
R3中2	29.6%▲2.2	0.7%	▲3.3	12.6%▲6.9	14.8%▲5.9	16.3%	3.3	8.1%	0.3	82.1%▲1.9
R4中3										

技家 が嫌い・大嫌いの理由 (右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	⑧内容に興味がなく	⑨わかりにくい	⑩将来、社会に出たときに役立つ	⑪生活の中で役立つ	⑫人とかかわりの中で役立つ	⑬考えるのがめんどう	⑭不得意	小計					
R1小6	2.1%	0.0%	1.1%	▲0.2%	0%	0.1%	0%	0.1%	1.1%	▲0.7	12.6%	▲7.5	16.9%▲8.2
R2中1	2.9%	1.6%	1.5%	▲0.6%	0.7%	▲0.4%	0%	0.3%	0.7%	0.0	5.8%	▲0.8	11.6%▲0.1
R3中2	5.9%	▲1.7	0.7%	0.5%	0.7%	▲0.4%	0%	0.1%	0.7%	0.3	5.2%	▲0.7	13.2%▲1.9
R4中3													

※⑧その他4.4%を除く

IV 来年度の技術・家庭科の教科経営

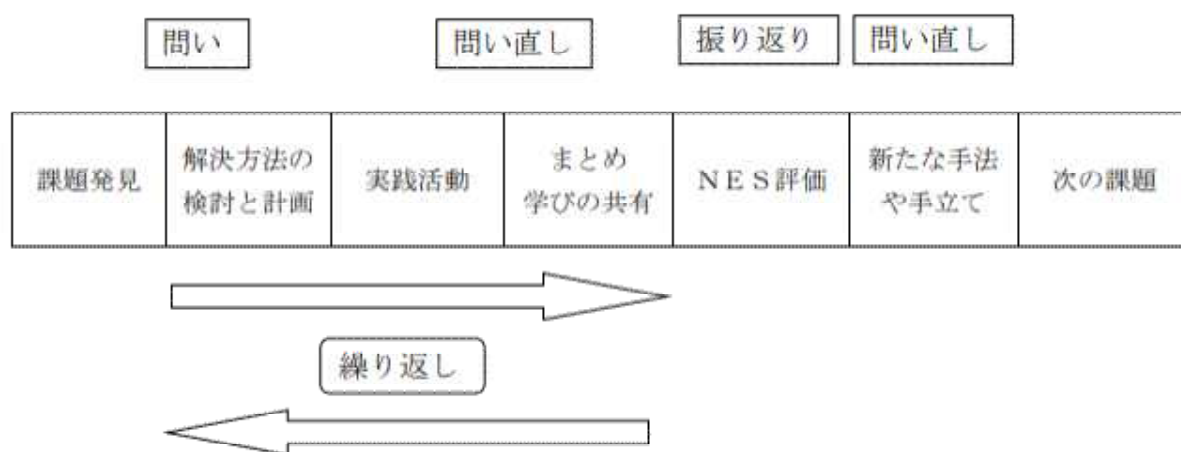
1. テーマ・サブテーマと教科の特質

よりよい生活を工夫し、創造する －実生活を検証・評価し、計画・実践する学びを通して－	
特 質	生活や社会の問題を、実践的・体験的な活動から解決する力を養うこと。具体的には、実践的・体験的活動を通して、生活に必要な知識及び技能を身に付けさせ、生活や社会の中から問題を見いだして解決する力を養うことによって、現在及び将来にわたる実際の生活の場で学習したことを生きて働く力とすること。

2. 具体的な実践事項

- ・ペアやグループ、全体などで実践的・体験的な活動の成果と課題を共有し、新たな気づきや理解の深化を促す検証・評価と修正・改善のサイクルを重視した授業を展開する。また、授業や題材全体を通しての問い、問い直しも重視する。
- ・製作活動や実践活動の中で、ミエルトークを行ったり資料や手順の提示をしたりする際にICT機器を効果的に活用する。
- ・製作や栽培の過程を動画や静止画で記録したりするなど、生徒が学習の過程を記録出来るようなICT機器の活用を図る。
- ・題材によって、生徒それぞれの興味や関心に応じて、自由研究の場を設定する。その成果を学級全体で共有し、更なる学びの深まりを生み出す。
- ・学びのプロセスの終末部分においてNES評価を活用し、新たな手法や手立てを試み、さらによいものをつくりあげようとしている姿を見取り、生徒が実生活の場に生かそうとする行動につなげる。

3. 学びのプロセス



I 今年度の英語科の教科経営

1. 本校の生徒の実態

英語や海外の文化に興味・関心をもって、英語によるコミュニケーション活動に積極的に取り組む。また、英語検定取得や海外経験などにより、言語知識や表現力に差異が見られるものの概ね自己の表現力向上に意欲的であり、会話練習や文章作成などの活動では既習の知識を用いて自分の思いや考えなどを表そうとする。しかし、聞いたことに対して何らかの形で応じたり、限られた言語知識を駆使して即興的にやり取りしたりすることに課題が見られる。

2. テーマとサブテーマと教科の特質

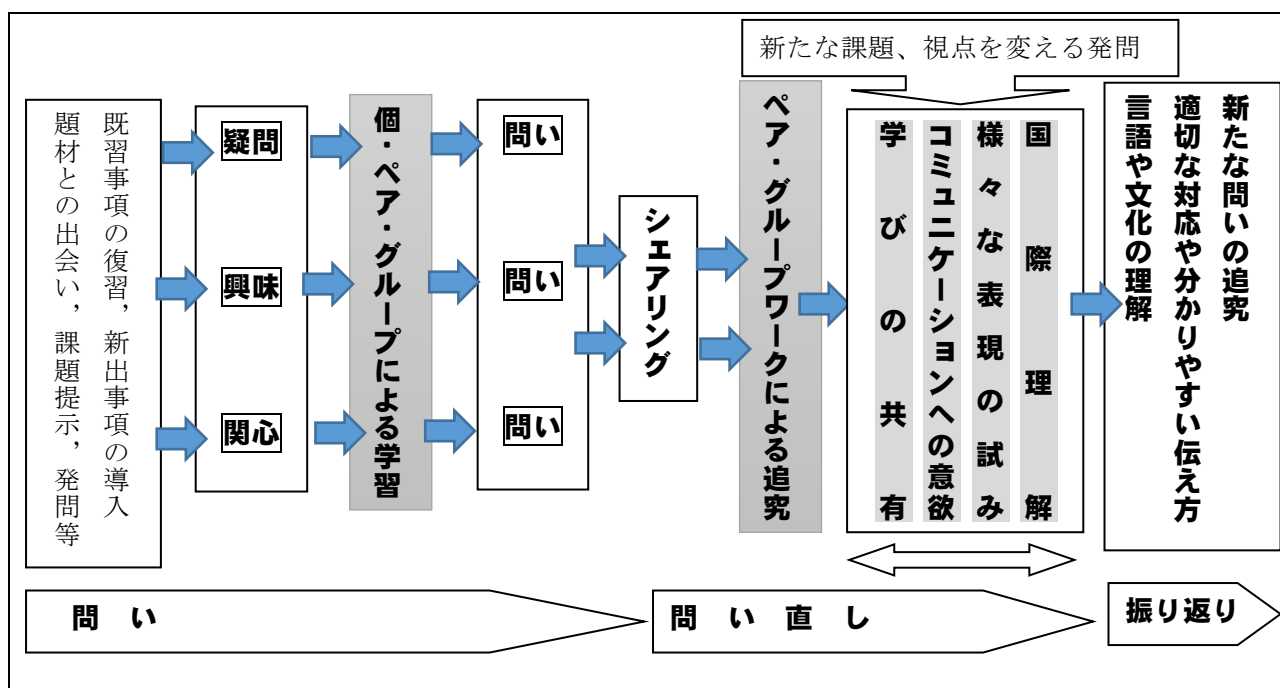
英語をツールとして、思いを即興で伝え合う ー英語による対話を続けたいくなる学びを通してー	
特質	英語をコミュニケーションのツールとして捉え、世界の人々とコミュニケーションを図ること。具体的には、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと [やりとり]」、「話すこと [発表]」及び「書くこと」という五つの領域にわたる活動を、有機的に関連させながら、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮し、英語を用いて考えや思いなどを伝え合うこと。

3. 具体的な実践事項

「英語による対話を続けたいくなる学び」を創るために

- (1) 即興的なやり取りの機会を十分に確保し、「活動」と「フィードバック」を往還させることにより、即興で伝え合う力を鍛える。
- (2) ICT を効果的に活用し、言語表現を運用する目的や場面状況などのイメージを明確に示す。
 - ・生徒の発達の段階、興味・関心に配慮しつつ、学習のねらいに照らして教材・教具の選定、題材の選択を行い、効果的な Input・Output の活動につなげる。

4. 学びのプロセス



II 具体的な実践事項について

(1) 即興的なやり取りの中で、「活動」と「フィードバック」を往還させる手立てと工夫

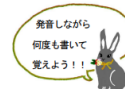
各単元の Goal の達成に向けて新出語句や文法を定着させ、活用させていくために、2年生では弾丸 input として“Surasura English”と題したシートを毎時間の帯活動で行った。2年生で学習する形容詞・副詞の比較級最上級活用変化表や不規則変化動詞の活用表を暗記する際に、ペアで互いが正しく覚えて言えるかを判定し、その数を記録するものである。同じ表を3回練習した後に、単語テストを行うことにした。単語テストの結果はみなほぼ満点で、普段英語を苦手とする生徒も明確な目標に向けて単語練習を頑張り、成果を出していた。単語をマスターすることで、会話や英作文活動の際に、文章をスムーズに作ることが出来ていた。

Sura sura English No.1 (比較級・最上級)				Class	Number	Name
Kanji	原形	比較級	最上級			
1	きれい	clean	cleaner	cleanest	1	
2	寒い	cold	colder	coldest	2	
3	かわらない	cool	cooler	coolest	3	
4	速く	fast	faster	fastest	4	
5	少しの	few	fewer	fewest	5	
6	多い	great	greater	greatest	6	
7	硬い	hard	harder	hardest	7	
8	高く	high	higher	highest	8	
9	高い	high	higher	highest	9	
10	長い	long	longer	longest	10	
11	低い	low	lower	lowest	11	
12	近い	near	nearer	nearest	12	
13	近い	near	nearer	nearest	13	
14	古い	old	older	oldest	14	
15	短い	short	shorter	shortest	15	
16	小さい	small	smaller	smallest	16	
17	すぐ	soon	sooner	soonest	17	
18	高い	strong	stronger	strongest	18	
19	背が高い	tall	taller	tallest	19	
20	暖かい	warm	warmer	warmest	20	
21	若い	young	younger	youngest	21	
22	大きい	big	bigger	biggest	22	
23	悪い	bad	badder	baddest	23	
24	悪い	more	more	more	24	
25	自然の	few	fewer	fewest	25	
26	すぐ	rise	riser	risest	26	
27	古い	old	older	oldest	27	
28	長い	large	larger	largest	28	
29	遅れた	late	later	latest	29	
30	安っぽい	soft	softer	softest	30	
31	忙しい	busy	busier	busiest	31	
32	早く	early	earlier	earliest	32	
33	遅い	late	later	latest	33	
34	幸せな	happy	happier	happiest	34	
35	おかしな	funny	funnier	funniest	35	
36	悪い	more	more	more	36	
					計	



Sura sura English の練習方法

- 1 ペアで互いにジャッジをして行う (用語を交換)
- 2 分からない単語は「パス」と言う (あとでよく復習しよう!)
- 3 ジャッジする人は、正しく答えていたら ○ 間違えていたら × と記入
- 4 最終に今日出た数を記入する (目標より多くできるように頑張ろう!)



また、この活動を応用し、互いの考えや意見を聞いた後にコメントを伝える例文をリストにし、ペアが日本語で文を言った後、もう一方が英訳をするといったやりとりをランダムに2分間行う活動をして表現の定着につなげた。これにより、生徒は自分の伝えたい表現を以前よりスムーズに伝えられるようになった。

そうして会話の素地ができたら、別の帯活動では、毎回トピックを決め、それについて2分間会話をつなげる練習を行った。例えば、”If you can go anywhere, where do you want to visit?” に対し、**2 A+1 Q**(2文で答え、ペアがさらに会話を引き出す質問を1つする)と課題を与えた。最初は2分間の会話が続かないペアも、練習を重ね、2分以上の会話が出来ようになってきた。更に課題を**2~3 A+1 Q**とすると長文でしっかりと説明しようとする生徒が増え、会話力の高まりが感じられ、学習シートに「2分間英語後で話すことが出来た。」「以前よりも会話が長く続けられるようになって成長を感じた。」といった振り返りが見られた。

ベネチアの水没問題を観光者、地元の人、観光業者の3つの立場になりきって考えを述べる活動をした際、ペアを変えて3回インタビューを行ったが、回数を経るごとに物事の説明や質問がスムーズにでき、自信をもって表現する様子が見られた。

活動に対するフィードバックとしては、

- ①ペアでのQ&Aを1組が全体の前で披露し、それに対して別の生徒からコメントをもらって、一斉にシェアをする方法
- ②小グループ内で、スピーチ後にそれぞれからコメントをもらう、その場で伝えきれなかったことを付箋に書いて伝えるといったもの
- ③学習シートの振り返りの欄に、こんなことを伝えたかったが、合っているか、もしくはどう言えばいいのかといった質問を書かせ、添削指導をして返す場合があった。



Grade Class	Number	Name
Research & Presentation Useful Expressions		
1	資料の準備 (準備) が終わりました。開始させていただきます。	Your work (preparation) was ready (ready to start).
2	資料の話し方がよかったです。(発表が素晴らしいです。)	You have a good oral delivery . (Your speaking speech was good.)
3	もう少し大きな声でゆっくりと/速く話してください。	You should speak more loudly (slowly/ faster).
4	話しているときに目をアイコンタクトがちゃんとできていたよ。(ちゃんと話を聞いていたね)	When you speak, you should make good eye contact. (When you speak, you should make good eye contact.)
5	とても面白かったです。	I think it was very good because you spoke very clearly .
6	私たちの発表もかきとると思いますよ。(文 (スピーチ) を聴いて) を聴いて)	I think you can speak clearly . You should notice the sentence/your speech!
7	なぜその式について調べようと思ったのですか。	Why did you want to research about that?
8	内容が面白くて、素晴らしい(面白い)です。特に、映画の情報は素晴らしいです。	The content was good (wonderful). I'm especially interested in the movie's information.
9	私も夏が大好きで、夏にはよくキャンプに行きます。いい情報をもらえますか? (聞いて) お願いします。	I also like summer the best, and I often go camping in summer. I could get nice information, thank you.
10	数字をはっきりと読みと読みやすいようにしてください。	It's easier to understand if you speak the number clearly .
11	絵や写真、言葉と単語からシンプにしてください。	You have too many patterns, so please make it simple.
12	グラフ(文章)が読めなくて苦労しました。(分かりにくかったです)。	The presentation was very hard, so it was difficult to understand.
13	コメントありがとうございます。話しかけたい部分があれば教えてください。	Thank you for your comment. I'm glad to hear that you asked me to help you understand.
14	アドバイスをありがとうございます。ぜひ参考にさせていただきます。	Thank you for your advice. We'll practice more (use it).
Let's practice them many times and please use them.		

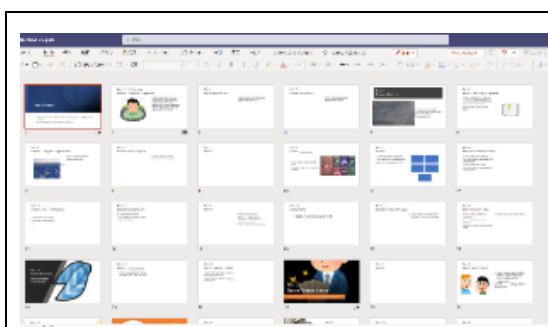
(2) ICTを活用した効果的な授業作り

○思考の可視化について

3年生では、効果的なICT活用にはどのようなものがあるかを考え、実践した。まず、本校では学習班単位でホワイトボードを使用して思考の可視化を行っているが、PowerPointでファイルを共有し、同等の思考の可視化を実現した。PowerPointは発表に使用するもの、という概念を少し変えて、思考の可視化や深化にも使用できるもの、という付加価値を加えることができた。

○授業で役立つWEBサービスについて

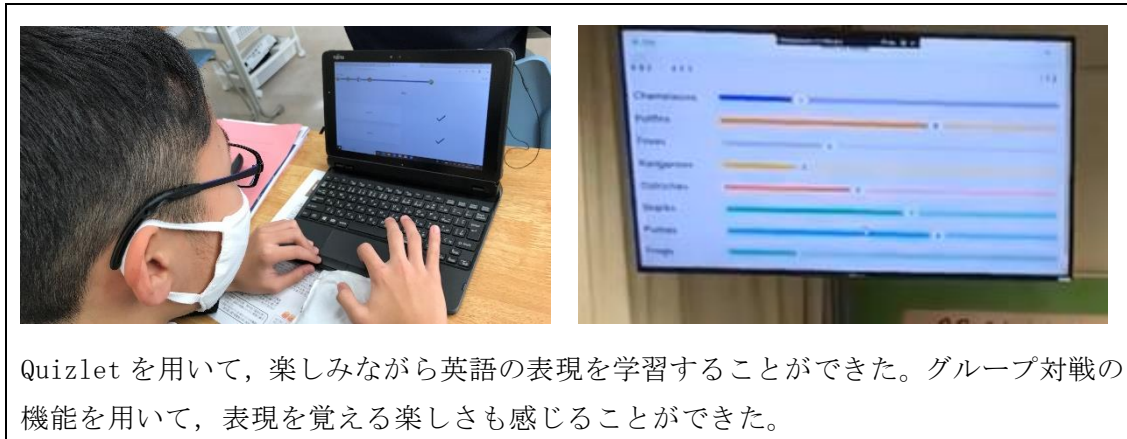
また、簡単に導入して継続できるWEBサービスとして、Quizizz, Kahoot!, Padlet, Quizletに焦点を当てた。QuizizzとKahoot!はスライド機能を用いて授業を気軽に行うことができる上に、選択問題や記述問題、投票などを設定すれば、生徒と双方向のやり取りをすることができる。生徒の解答(回答)状況の記録はWEB上に保存されており、エクセル形式のファイルをダウンロードして生徒の理解度を分析することができた。Padletは表現の共有をWEB上で簡単に行うことができる。英作文や音声、動画をアップロードすると生徒間で気軽に情報を共有し、フィードバックをすることができた。Quizletはフラッシュカードをオンラインで行うことができるWEBサービスだが、単語の理解の仕上げとしてグループ間で対戦する機能があり、生徒は楽しみながら学習に向かうことができた。



Powerpointのファイルを共有することで、考えがうまく進んでいない生徒も友人のアイデアを参考にすることができた。



Kahoot!を用いて一方的なプレゼンテーション型の授業から双方向の授業を実現することができた。

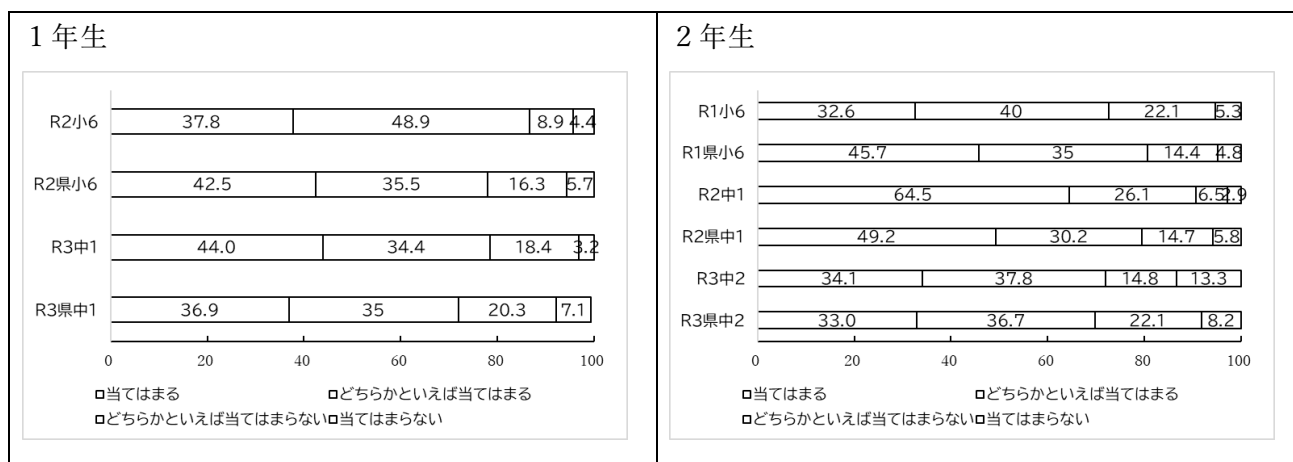


Quizlet を用いて、楽しみながら英語の表現を学習することができた。グループ対戦の機能を用いて、表現を覚える楽しさも感じる事ができた。

III 生徒の変容について

1年生と2年生の違いとしては、一般的に「外国語の勉強は好きだ」という質問に対して、「どちらかといえば当てはまらない・当てはまらない」と回答する1年生は小学6年生の10%前後から30%前後に増加しつつあるのに対して、2年生は20%～30%程度で安定していることにある。現1年生はこのまま30%前後で安定するものと思われる。

○「外国語の勉強は好きだ」について



1年生・2年生ともに、小学6年生から中学1年生にかけて勉強が好きだと回答する生徒が多い。そして、2年生をみると、2年生になると、小学6年生の頃の回答状況に戻るようだ。小学校と中学校での学習内容が異なることから、中学校の学習に対する関心が高いことに対する現れではないかと考える。

○英語が「大好き・好きの理由」「嫌い・大嫌い」の理由

・1年生

英語が大好き・好きの理由 (右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	①内容に興味があつておもしろい	②わかりやすい	③将来、社会に出たときに役立つ	④生活の中で役立つ	⑤人とのかわりの中で役立つ	⑥考えるのが楽しい	⑦得意	小計
R2 小6	13.3 % 1.3	6.7 % ▲ 1.3	40 % 6.7	6.7 % 1.1		2.2 % ▲ 5.3	13.3 % 4.9	82.2 % 7.4
R3 中1	16 % 5.2	4.8 % ▲ 3.6	37.6 % 7.5	3.2 % ▲ 1.2		3.2 % ▲ 3.7	9.6 % 1.0	74.4 % 5.2
R4 中2								
R5 中3								

英語が嫌い・大嫌いの理由 (右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	⑧内容に興味が無い	⑨わかりにくい	⑩将来、社会に出たときに役立つ	⑪生活の中で役立つ	⑫人とのかわりの中で役立つ	⑬考えるのがめんどう	⑭不得意	小計
R2 小6	1.1 % 2.5	0 % 5.6	1.1 % ▲ 0.6	0 % 0.3		2.2 % ▲ 1.3	7.8 % 2.3	12.2 % 8.8
R3 中1	4 % ▲ 1.5	2.4 % 2.9	0 % 0.5	0.8 % ▲ 0.3		0.8 % 0.4	13.6 % 2.7	21.6 % 4.7
R4 中2								
R5 中3								

・ 2 年生

英語 が大好き・好きの理由

(右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	①内容に興味 があっておもしろい	②わかり やすい	③将来、社会 に出たときに 役立つ	④生活の中で 役立つ	⑤人との かかわり の中で役立つ	⑥考えるのが 楽しい	⑦得意	小計
R1 小6	6.3 % ▲6.2	5.3 % ▲1.5	37.9 % ▲1.6	5.3 % ▲0.1		5.3 % ▲3.5	7.4 % ▲0.2	67.5 % ▲9.5
R2 中1	10.2 % ▲2.9	13.1 % ▲2.8	29.2 % ▲0.5	3.6 % ▲1.6		6.6 % ▲1.4	23.4 % ▲11.1	86.1 % ▲7.5
R3 中2	11.1 % ▲0.1	6.7 % ▲0.6	30.4 % ▲2.3	4.4 % ▲0.4		5.2 % ▲0.2	11.1 % ▲4.6	68.9 % ▲2.4
R4 中3								

英語 が嫌い・大嫌いの理由

(右の数字は全県との比較 ▲=マイナス)

学年	⑧内容に興 味が ない	⑨わかり にくい	⑩将来、社会 に出たときに 役立たない	⑪生活の中で 役立たない	⑫人との かかわり の中で 役立たない	⑬考えるのが めんどう	⑭不得意	小計
R1 小6	4.2 % ▲1.0	4.2 % ▲1.7	0 % ▲0.2	1.1 % ▲0.8		1.1 % ▲0.2	11.6 % ▲3.9	22.2 % ▲4.0
R2 中1	0.7 % ▲1.7	1.5 % ▲3.0	0 % ▲0.3	0 % ▲0.4		0 % ▲1.3	5.8 % ▲3.7	8 % ▲10.4
R3 中2	3 % ▲0.2	8.1 % ▲1.9	0 % ▲0.4	0.7 % ▲0.3		3 % ▲1.4	11.1 % ▲6.5	25.9 % ▲3.5
R4 中3								

※⑮その他5.2%を除く

①⑧内容に対する興味としては、面白いと感じる生徒が学年を経て増加する傾向にある。相手とコミュニケーションをするときには、どんな題材についてやり取りをするのかは大事なことである。教科書の題材に加え、生徒が日常生活で触れたり考えたりする内容を帯活動や表現活動に取り入れることで、生徒が英語に対して興味を持ち続けているのではないかと考える。③④⑩⑪現在や将来の生活で役に立つと考える生徒は、全県の平均と比較して低い数値がある箇所はあるものの、少なくとも役に立たないと感じる生徒はほぼいない。英語学習は必要であるから学んでいる姿勢の生徒が多いことの現れである。

注目しなければいけないのは⑥⑬であり、考えることを楽しいと感じる生徒は全県の平均と比較して少ない。本校ではミエルトークを全教科で行っているが、英語の授業でも思考の可視化を目指すとなると、他教科よりもかなり負荷がかかる。自分の思いを意見として構築することに加えて、適切な英語表現を選定する技術（知識・経験）が必要となる。即興的なやりとりを楽しみながら行うことができるようにすることが今後の課題となるだろう。



Forms で作成した
生徒のアンケート

IV 来年度の英語科の教科経営

1. テーマ・サブテーマと教科の特質

英語をツールとして、思いを即興で伝え合う —効果的なリアクションで対話をつなげよう！—	
特 質	英語をコミュニケーションのツールとして捉え、世界の人々とコミュニケーションを図ること。具体的には、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと [やりとり]」、「話すこと [発表]」及び「書くこと」という五つの領域にわたる活動を、有機的に関連させながら、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮し、英語を用いて考えや思いなどを伝え合うこと。

2. 具体的な実践事項

「効果的なリアクションで対話をつなげる」ために

(1) 対話の中での相槌・リアクションを反復練習する

- 効果的なリアクションの研究とドリル・・・英語による会話が自然と生まれる明るい雰囲気の中で、反応、うなづき、短文での反応、リテリング、などの実践の工夫

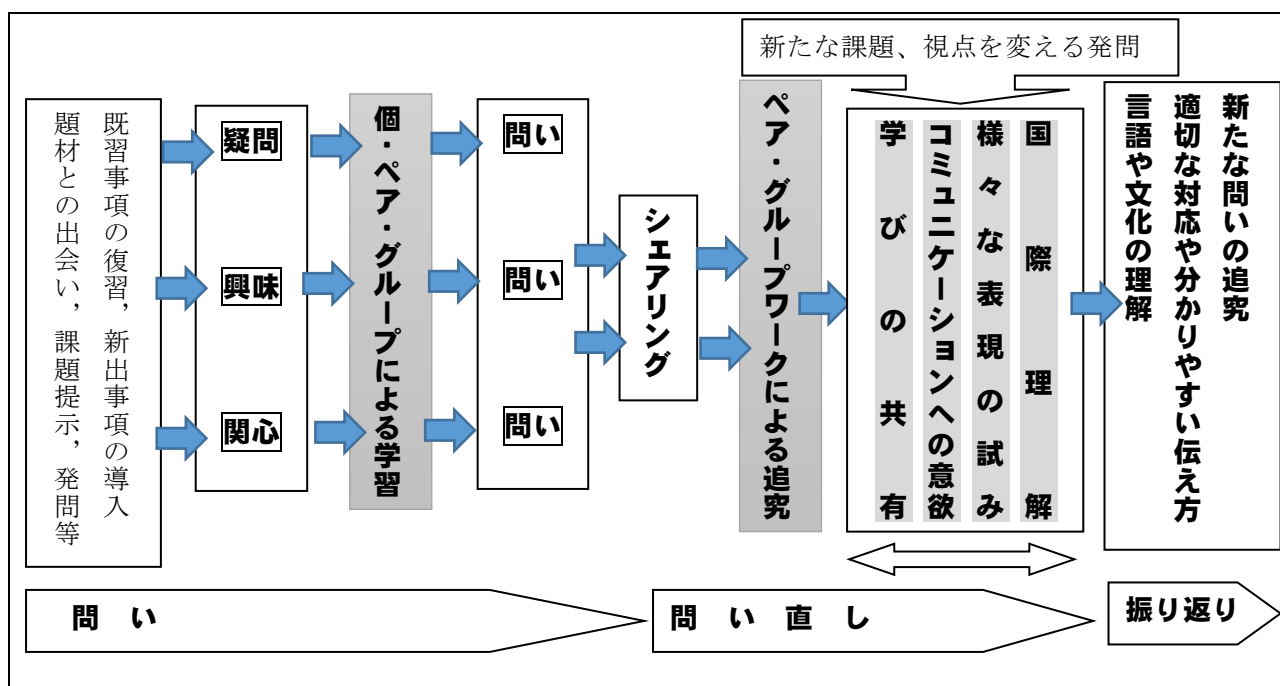
相手の立場への理解の表明→自分の意見の表明→即興で代替案を出す

(2) 効果的な ICT の活用

- 短時間で資料作成するスキルを高める

ICT を活用するメリットとして、語彙検索、画像検索や表示による言語の使用場面の可視化、シェアリングが短時間で行えるため、その分空いた時間を語彙や文章の反復練習や表現活動に使うことが出来る。

3. 学びのプロセス



I 今年度の道徳科の教科経営

1. 本校の生徒の実態

学んだことを学校生活の向上に結びつけている。一方で、主観的なものの見方にとらわれ、客観的に考えることや、他者の助言を受け入れることができず、見方や考え方が一面的になったり、硬直化したりする傾向も見られる。

2. テーマ・サブテーマと教科の特質

人間としての生き方についての考え方を深める ～みんなで考え、みんなで議論する学びを通して～	
特 質	道徳的諸価値についての理解を基に、他者との対話を重ねながら様々な状況下において人間としてどのように対処することが望まれるかを考えること。広い視野から多面的に判断する力を高めること。

3. 具体的な実践事項

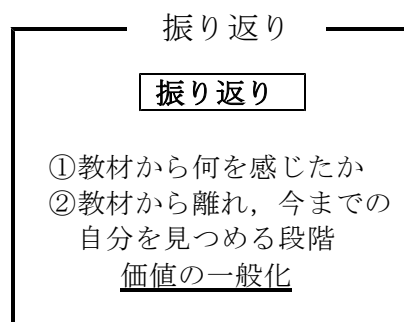
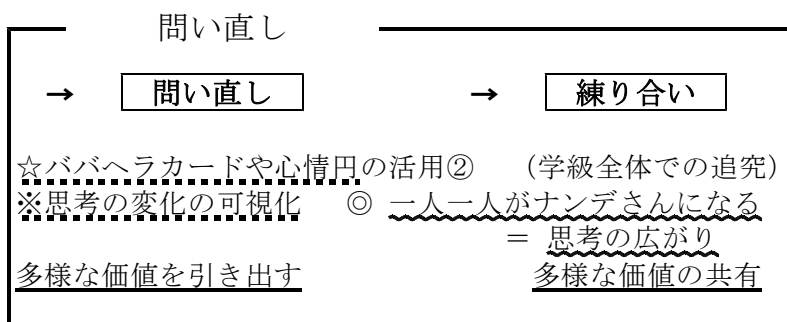
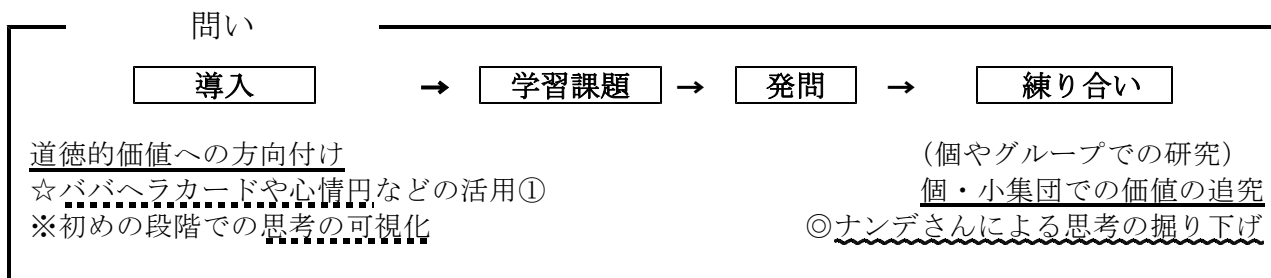
(1) 多面的・多角的な思考を促す指導方法と発問の工夫

ねらいとする道徳的価値を明確にし、その道徳的価値について生徒の多様な考えを引き出せるような発問を工夫する。具体的には、①学習課題を示すこと、②場面発問に偏った発問構成から、テーマ発問を中心に据えた発問構成を研究することの2点を重点的に実践する。さらに、教材研究の質の向上を目指し、学年部職員が、順繰りに他クラスの道徳指導も行う「学年ローテーション道徳」を実践する。

(2) 多様な価値観に触れる話合いの指導の工夫

生徒一人一人が多様な意見に触れ、考えを構築できるように、問いを練り合う過程を充実させる。具体的には「ミエルトーク」やネームプレート、ICT機器を効果的に活用することで、考えの変容を可視化し、分析的に話し合うことができるようにする。

1. 学びのプロセス



II 具体的な実践事項について

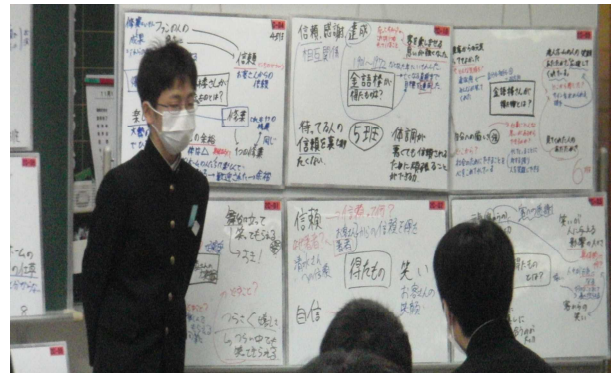
(1) 多面的・多角的な思考を促す指導方法と発問の工夫

学習課題の提示とテーマ発問や問い直しの発問などを、生徒の主体的・自発的な学びにつなげることを意識して、研究を進めた。秋季の公開研修会では、生徒が主体的・自発的に考え、思考を広げたり深めたりすることができるように、生徒の疑問に基づいた学習課題を設定し、問い直しの場面を用いてミエルトークを行った。また、思考を整理しやすいように、左右対比型の形式の板書を用いた。ミエルトークを通して、思いやりについて多様な考えを学べるように努めた。



『左右対比型の形式の板書』

左右対比型の板書を用い、問い直しでミエルトークを行ったことにより、相手の立場に立った時にどうなのか、それを自分自身に戻した時にどうなのかなどといった思考の整理ができ、その過程がミエルトークにはっきりと現れていた。



『ミエルトークを通じて得た価値の共有』

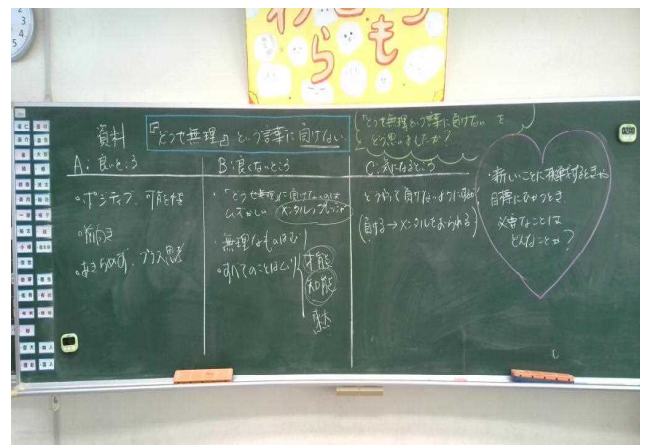
ミエルトークや発表、金語楼さんへの手紙の記述に、「信頼、感謝、思いやり、自信、温かさ、嬉しさ、喜び」などのワードが出されていた。ワードにまつわる説明や各自の思いを伝え合うことで、達成したい価値に迫ることができた。

(2) 多様な価値観に触れる話合いの指導の工夫

1年生では、中心発問に対する自分の意見を、「コラボノート」に入力することで、ICTのよさの一つである、瞬時に共有化できることを生かした実践を行った。教室前方のモニターと生徒の端末には、コラボノートを表示し、全生徒の意見が見られるような工夫をした。互いに自分の意見を見合う中で、「特に気になる意見は?」「誰の意見を聞いてみたい?」「どの意見に賛成/反対?」などの発問を積み重ね、授業をコーディネートした。また、黒板には生徒の思考が可視化できるような工夫をしながら、より深めたいことや論点について整理をすることを心掛けた。

「どうせ無理」という意見に賛成しない	「どうせ無理」という意見に賛成する	「どうせ無理」という意見に賛成しない理由	「どうせ無理」という意見に賛成する理由
「どうせ無理」という意見に賛成しない理由	「どうせ無理」という意見に賛成する理由	「どうせ無理」という意見に賛成しない理由	「どうせ無理」という意見に賛成する理由
「どうせ無理」という意見に賛成しない理由	「どうせ無理」という意見に賛成する理由	「どうせ無理」という意見に賛成しない理由	「どうせ無理」という意見に賛成する理由
「どうせ無理」という意見に賛成しない理由	「どうせ無理」という意見に賛成する理由	「どうせ無理」という意見に賛成しない理由	「どうせ無理」という意見に賛成する理由

『各自の意見を入力したコラボノート』



『論点を整理してまとめた板書』

Ⅲ 生徒の変容について

今年度から実践した「学年ローテーション道徳」について、アンケート調査を行った。以下がその結果である。

学年ローテーション道徳 【生徒によるアンケート結果】

1年生

- ・様々な教え方や進め方を体感できた。
- ・先生方の多様な考え方に触れることができた。
- ・自分の知識や考え方の幅が広がった。
- ・考え方価値観に触れることができるのがよい。
- ・これからも続けてほしい

2年生

- ・とても良い。普段の担当教科と違った進め方や異なる一面があり、自分たちも柔軟に対応することが求められる良い機会になった。来期も続けてほしい。
- ・様々な先生と一緒に考えることができたので、昨年以上に自由に考えることができたので楽しかった。他クラスでも同じ授業をしているので、他クラスの意見の紹介などでクラスを超えてより深められたのもよかった。
- ・先生によって手法や視点も違うので、毎回楽しみ。ワクワクした。
- ・毎回飽きない。心情円、ミエルトーク、役割演技、全体での意見交換など先生によって様々。
- ・道徳の多様性が見えた。

3年生

- ・様々な先生に授業をしていただくと、いろいろな考え方や生き方に触れることができ勉強になりました。
- ・色々な先生の授業をもっと知りたいと思いました。
- ・興味深く、おもしろい授業を楽しみにしています。
- ・その分野に詳しい人が授業をするといいものだなと思いました

アンケート結果から、ローテーション道徳を通じた一年の取組が、学びへの感心や意欲の高まりにつながっていることが分かる。「来年度も実践してほしい」という意見が全校の99パーセントという結果となった。）今年度が初の試みであるため、昨年度との比較はできないものの、道徳を学ぶことを肯定的に受けとめていることが明らかとなった。また、「いろいろな先生方の考え方や価値観に触れることができるのがよい。」という内容と同様の意見が大半を占めたことから、他の人の考え方に耳を傾け、広い視点で考えることの大切さを実感する機会になったものと考えた。

○2年生の授業実践を通じての変化

これまでの道徳ミエルトーク以外にも、波紋型による全員討議で生徒同士が意見を繋ぎ、友達の言葉から価値にせまる気付きを得たり、左右対比型の板書で考えを可視化し、ミエルトークをおこなった後、終盤で経験想起の方法の多様化を図るために自分のことを主人公に手紙を書こうという手法を用いた授業を行った。手紙という形式にしたことで、素直に他の意見を取り入れ、新たな気付きや考えを書くことができるようになった。

また、主人公の葛藤場面の心情を言葉にしていく役割演技では、4人グループを二つに分け、交互にその心情を言葉で表すことにより、一層主人公の心情を掘り下げることができ、これまで以上に深くねらいに迫ることが出来た。

生徒の振り返りからは、「人や社会との関わり方をどうするべきかを考えさせられた。周囲への気配りが必要といったことを心に留めておくのではなく、発信することも大切だということ学んだ。」「自分だったら、相手だったらとさまざまな視点で考えることで、日常生活の中でも自分中心の考え方ではなく周りの人や相手をよく見て行動できるようになった。」「今の自分たちと同じ環境、悩み事と重なっている教材が多く、親近感を持って考えることができた。これまで何のために道徳の授業を受けるのかと思う時期があったけど、自分では考え付かなかった考えに触れ、必要な教科だということを一念で学ぶことができた。」といった感想が述べられていた。

IV 来年度の道徳科の教科経営

1. テーマ・サブテーマと教科の特質

人間としての生き方についての考え方を深める ～みんなで考え、みんなで伝え合う学びを通して～	
特質	道徳的諸価値についての理解を基に、他者との対話を重ねながら様々な状況下において人間としてどのように対処することが望まれるかを考えること。広い視野から多面的に判断する力を高めること。

2. 具体的な実践事項

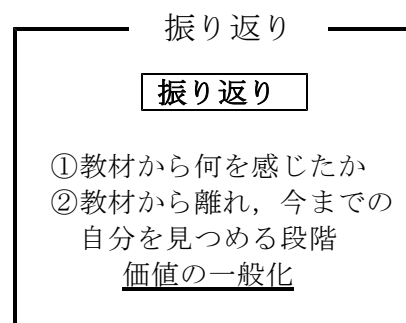
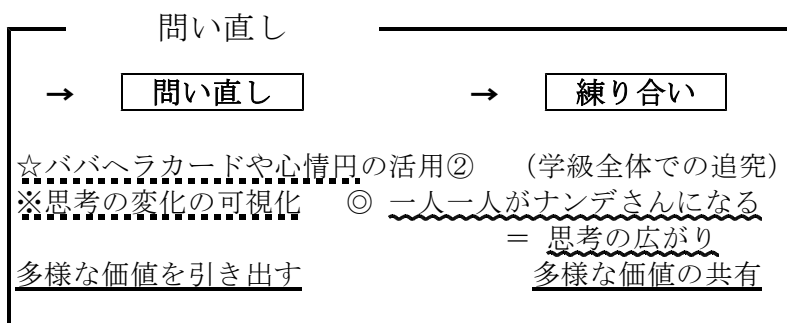
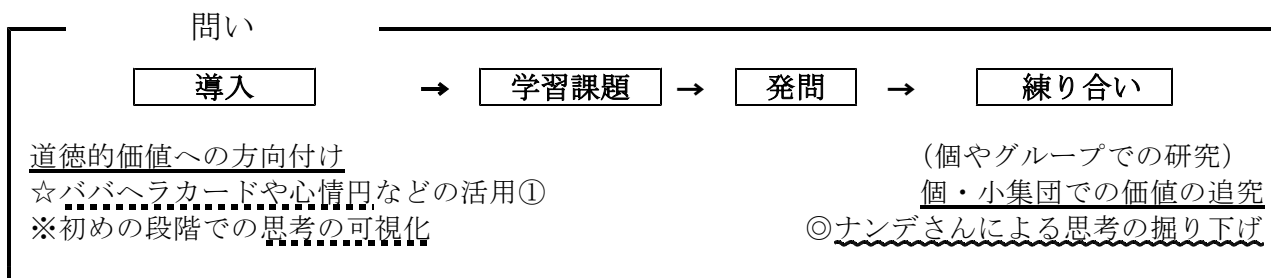
(1) 多面的・多角的な思考を促す指導方法と発問の工夫

ねらいとする道徳的価値を明確にし、その道徳的価値について生徒の多様な考えを引き出せるような発問を工夫する。具体的には、①学習課題を示すこと、②場面発問に偏った発問構成から、テーマ発問を中心に据えた発問構成を研究することの2点を重点的に実践する。さらに、教材研究の質の向上を目指し、学年部職員が、順繰りに他クラスの道徳指導も行う「学年ローテーション道徳」を実践する。

(2) 多様な価値観に触れる話合いの指導の工夫

生徒一人一人が多様な意見に触れ、考えを構築できるように、問いを練り合う過程を充実させる。具体的には「ミエルトーク」やネームプレート、ICT機器を効果的に活用することで、考えの変容を可視化し、分析的に話し合うことができるようにする。
 次年度は新しく、コラボノートを活用した振り返りの共有化にも取り組みたい。従来使用していたハートの付箋に比べ、瞬時にクラス全員や他クラスの生徒の考えを知ることができるという利点を生かし、多様な価値に触れる機会を設けていきたい。
 また、「自己肯定感」を高めるために、成功を収めている人たちが乗り越えてきた困難や挫折について知る機会を積極的に設けたい。講話会や意見発表会などを通じて、多様な生き方や考え方に触れることで、自身の個性を認め、前向きに取り組もうとする気持ちが高まっていくような場面の設定を充実させたい。

2. 学びのプロセス



I 今年度の特別活動の教科経営

1. 本校の生徒の実態

前研究では、「社会や集団の中で自分の可能性を広げるために、主体的に行動しようとする態度を育む」ことを目指して3年間の研究に取り組んできた。他者との関わりの中で、根拠に基づき、論理的に偏りのない思考をする力である「批判的思考力」を育むことで、生徒が異なる思いや考えをもつ仲間と尊重し合い、集団の向上が成し遂げられることを実感できるようになった。一方で、集団の形成者として、自分の立場を自覚し、自ら適切に判断して行動する力に課題が残る。

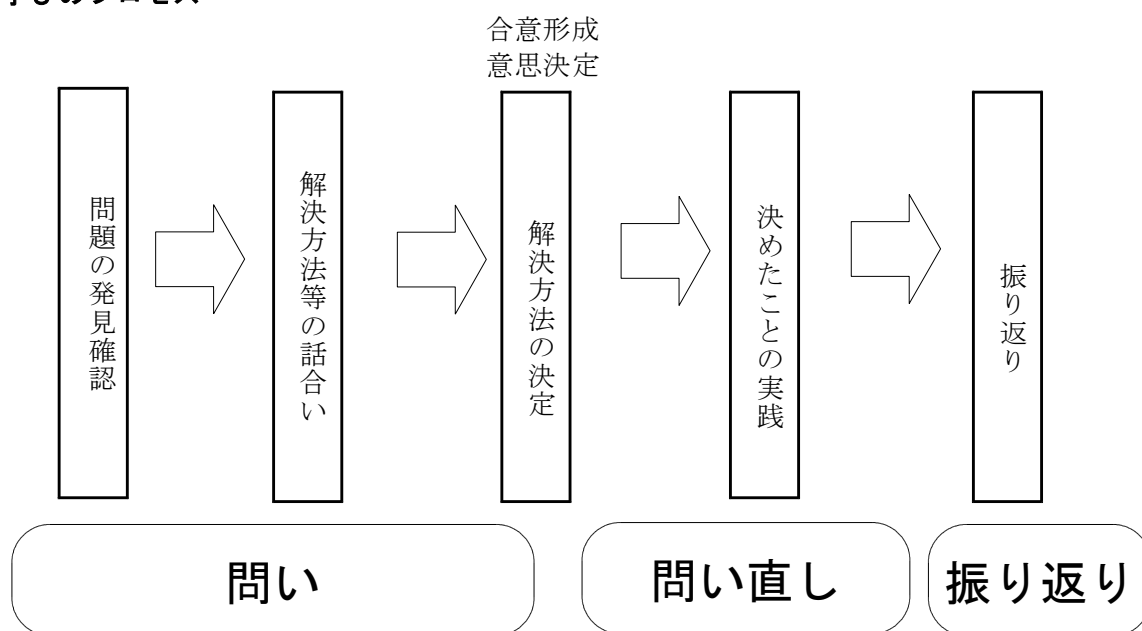
2. テーマ・サブテーマと教科の特質

	「妥協」ではなく「調和」のある合意形成を目指す — 支持的な風土を基に、自己肯定感が高まる学びを通して —
特 質	直面する課題を解決するために話し合い、合意形成及び意思決定したものを実践や行動に結び付けること。

3. 具体的な実践事項

- (1) 自己肯定感を高め、「目指したい将来の生き方」に迫るための「人生の樹」の活用と傾聴を基盤とした、「ミエルトーク」の活性化
- ・「人生の樹」のポートフォリオに工夫を図り、自己理解、他者理解を促進させ、職業を超えた「目指したい将来の生き方」に迫ること。
 - ・傾聴の4つのステージを意識し、それを実践することで、安定した支持的な風土を築き、「ミエルトーク」における意見交換を活性化させること。
 - ・ICT機器を活用した新たな「ミエルトーク」の形を追究し、より充実した話し合い活動を通して合意形成や意思決定につなげること。
- (2) 「調和」（より大きな納得感のある状態）を目指した、話し合い活動の実践
- ・話し合い活動が結論に至る過程において、「妥協」と「調和」というキーワードを用いることで、当該生徒や集団の意識を高めること。
 - ・ICTを活用する3つのメリット（①思考の可視化②瞬時の共有化③試行の繰り返し）を十分理解したうえで、場面に合わせて適切に選択・活用する。

4. 学びのプロセス



II 具体的な実践事項について

- (1) 自己肯定感を高め、「目指したい将来の生き方」に迫るための「人生の樹」の活用と傾聴を基盤とした、「ミエルトーク」の活性化
- (2) 「調和」（より大きな納得感のある状態）を目指した、話し合い活動の実践

3年実践 「心をひとつに夢の実現を目指す」

～一人一人の「人生の樹」を生かして、所属感や連帯感を高める～ から

① 「人生の樹」から「人生の森」へ

- ・ 自己理解と他者理解
（コンプリメントレター）⇒自己肯定感
- ・ 話し合いの土台となる人間関係づくり、居場所づくりや絆づくりへの戸惑い
- ・ 「人生の森」づくり
⇒体育祭や中総体、合唱コンクールなど様々な行事や進路に向けて、クラスとしてまとまり成長するためのステップとしての活動。



② 「妥協」ではなく「調和」

- ・ 集団による多数決で「妥協」するのではなく、互いに納得するまで話し合い、よりよい考えである「調和」を導き出すことを目指す。

③ ミエルトークの実践

- ・ アンケートから学級の課題の認識と分析
⇒休み時間と授業時間の切り替え
⇒理想的なクラスとは？
- ・ 一人一人の考えを引き出すためのツールとしてのミエルトークの活用
- ・ 生徒の中での役割分担（アシスタント、ミセルさん、ナンデさん）
⇒学級ミエルトーク



④ ICTの活用による科学的な視点の提示や転換

○成果

- ・ 話し合いの途中でリアルタイムに意見や言葉をホワイトボード（ICT機器）に書き入れていくことは魅力的な活動であり、提示方法である。
- ・ クラスの皆が協力して「3年C組」という森を作ることの意義について、十分に共通理解を図っていたことで、議題を自分事として捉えることにつながった。
- ・ ICTを活用したミエルトークのデータが一括管理されているので、話し合いの内容をリアルタイムで共有し、自分たちの考えと比較することができていた。

●課題〔改善点〕

- ・ 議論の論点がずれたり、問いの軸が傾いたりしたときの教師の役割と助言の必要性。
- ・ 生徒のつぶやきを取り上げることが、「調和」に向かうための手立てとなる。
- ・ ICTを活用したミエルトークは、子どもの思考を広げ深めるための手立てとして、魅力的取組であったが、その手段自体が目的化していないか。本時のねらいに立ち返って学習活動全体を俯瞰してみるとということが大切である。
- ・ 議論が抽象的、概念的であり、具体的な行動指標を導くところまで話し合いが深まらなかった。
- ・ 意見は出たが話がまとまらずに「妥協」し合っている状況も見られた。「調和」となるよう

議論のポイントを見つけ、アシスタントに提示させることも必要であったかもしれない。

- ・本時のねらいである「36人全員が納得する合意形成を図る」ところまでたどり着くことが出来ず、授業の終盤では「妥協」し合う場面も見られた。そこで後日、もう1時間設定し、話合いの論点を明確にした上で、納得のいく「調和」を目指したいと考えている。

【特活部の省察】

- 「傾聴の4つのステージ」(①目と体を向けて話を聴く。②話の中身を繰り返す。③相手の言葉を自分の言葉に置き換える。④相手の感情を反映する。)を生徒に意識させるための手立てとして、教室内用の掲示を検討する。
- 学級での話合いの際に「妥協と調和」を意識させるための手法について研究し、提案する。
- ICTをあくまで手段と捉え、3つのメリット〈思考の可視化、瞬時の共有化、試行の繰り返し〉が生かせる場面に絞って取り入れることを意識する。
(実践してみてもうまくいったことの要因や、上手くいかなかったことの要因を記入する。)

全校実践 「生徒会活動におけるICT活用の取組」

①生徒大会のペーパーレス化

生徒一人1台のタブレットパソコンを活用し、議案書をPDF化してデータ配付することで、ペーパーレス化を実現した。前学期は2・3年生、後学期は全校生徒へと段階を踏んで運用を広げることで、入学直後の1年生の不安を払拭するとともに、課題の洗い出しと対策を練る時間を確保した。

②各種アンケート等のデジタル化

生徒会が実施する生徒アンケートにFormsを活用することで、ペーパーレス化とともに、記入・集計にかかる時間を短縮することができた。

また、建設的な提言を募集する「生徒会目安箱」について、従来の紙による投書と併用して、Web版も設置して運用を開始した。本校生徒であれば、いつでも、自宅からでも投稿できるようにすることで利便性を高め、生徒による自治活動の活性化を図った。

○成果

- ・可能な範囲でのペーパーレス化を実現できた。
- ・生徒自身が変化を実感することで、合理性・利便性の意識が高まった。例えば「紙の使用はもったいない」という言葉が聞かれるようになった。
- ・集計作業にかかる時間が短縮され、結果のレスポンスが早くなった。
- ・目安箱への投書・投稿数が増加した。

●課題〔改善点〕

- ・投稿数が増えた一方で、生徒会の範疇を越える内容の意見も見られるようになった。

Ⅲ 生徒の変容

「人生の樹」の取組は今年度で9年目に入った。さらに今年度は「人生の森」の取組にも挑戦した。これらの活動によって、自己理解だけでなく他者理解をも深めるとともに、学級への所属感・連帯感を高めることができたと感じている。また、ICTの活用を進める中で生徒の間にペーパーレスの意識も浸透し、紙を使うのはもったいない、という言葉が生徒から聞かれるようになった。

「傾聴」をキーワードに支持的な風土を育むことで、ミエルトークをはじめとした話合い活動が活性化された。実施例として、①学級目標づくり②学級パネル制作③体育祭の作戦会議④合唱曲選定、が挙げられる。

一方で「学級生活の中で出てきた諸問題を解決する」機会が限られていたことは課題である。

IV 来年度の特別活動の教科経営

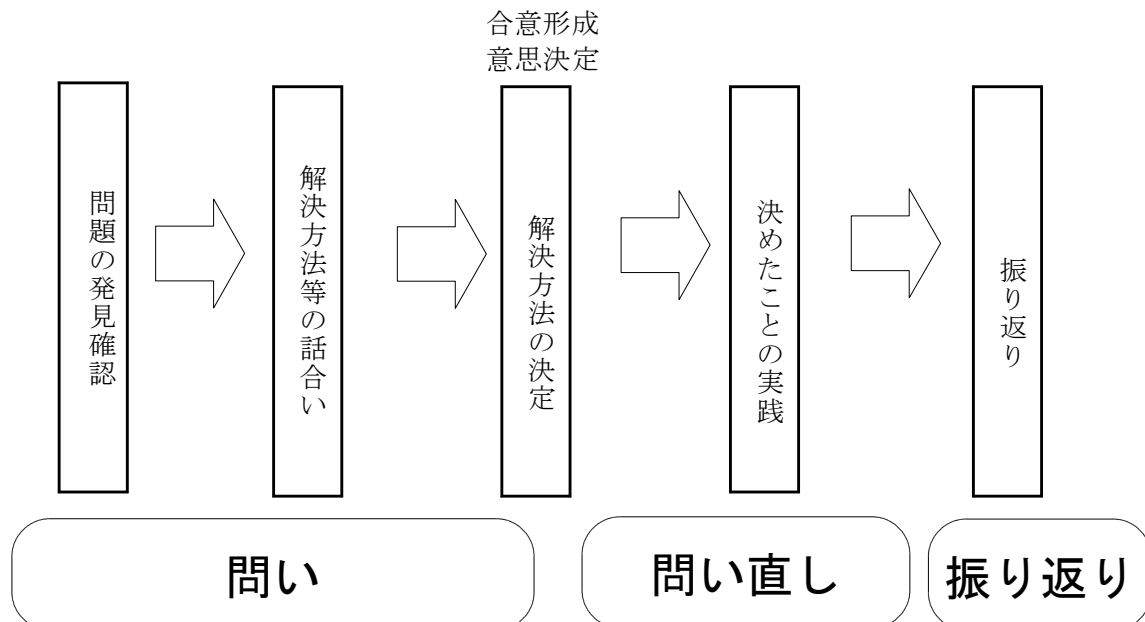
1. テーマ・サブテーマと教科の特質

「妥協」ではなく「調和」のある合意形成を目指す ー自己肯定感が高まる話し合いの実践を通してー	
特 質	直面する課題を解決するために話し合い、合意形成及び意思決定したものを実践や行動に結び付けること。

2. 具体的な実践事項

- (1) 自己肯定感を高め、「目指したい将来の生き方」に迫るための「人生の樹」「人生の森」の活用と、傾聴を基盤とした、「ミエルトーク」の活性化
- ・「人生の樹」「人生の森」の活動を通して自己理解、他者理解を促進し、職業を超えた「目指したい将来の生き方」に迫ること。
 - ・傾聴の4つのステージをより意識して実践することで、安定した支持的な風土を築き、「ミエルトーク」における意見交換を活性化させること。
- (2) 年間指導計画を活用した学級活動における話し合い時間の確保
- 学級活動の時間の多くは、各種行事の事前・事後指導に割られることが多かったが、一年間を見通した時間運用ができていたとも言い難い。そこで、学級活動の年間指導計画を作成し、学級担任（とくに転入職員）が先を見通しながら学級での話し合いの時間を確保できるようにしていく。また、話し合いの機会を増やすことで、生徒のスキルアップも図っていく。
- (3) 情報モラルを踏まえたICT活用の取組
- 一人一台のタブレットパソコンの活用をさらに浸透させるとともに、正しい使い方（時間・内容）を考えて実践する取組を、生徒の自治活動の一環に取り入れる。

3. 学びのプロセス



1 本校の総合的な学習の時間＝「総合DOVE」の概要

a 総合DOVEの歩み

本校では、平成10年度より総合DOVEの実践を重ねてきた。「DOVE」とは、本校の校章の意匠である「鳩」を意味する英単語であり、平和を希求する戦後の人々の願いが込められている。また、「DOVE」という名称には**D**evelopmental（発展的な学習）、**O**riginal（独創的な学習）、**V**oluntary（自発的な学習）、**E**njoyable（満喫できる学習）」という、本校が目指している総合的な学習のイメージも込めてきた。実践を始める際に留意したことは、平成5年以来、秋田県が学校教育共通実践課題としている「ふるさと教育」のねらいを踏まえることである。それは、ふるさととの事物との出会い・発見・感動を通じて、①豊かな心を醸成し、②調べ追究する自己教育力を養い、③ふるさとのおよさに気づき、自信と誇りを新たにすることにより社会を主体的に生きる力を育むことである。

本校では、そのねらいを実現するために、1年生では職場体験活動等を通して、職業観や進路意識を醸成し、2年生では社会人講話や職場訪問等を通して、自分の適性や持ち味を自覚できるようにし、3年生では、地域の課題解決や活性化に向けた提言等を通して、社会参画意識を育成するという、「地域に根ざしたキャリア教育」を展開している。

全校生徒と全教職員が、ベクトルを一つにして主体的に学習を進めるためには、学習の目的を確認し、ゴールを見通す必要がある。本校では、毎年4月にDOVE集会を行い、前年度の成果と課題を確認した上で、学習の目的や進め方を、全校生徒で共有している。また学習のゴールとして、各学年の学習の成果を発表し高め合う場の工夫改善を重ねてきた。平成16年には、独創性や実践力等を育むために、総合DOVEの研究成果の発表会と文化祭を融合させた学校行事「DOVE FESTA」を創設した。さらに平成28年には、「祭り」の要素が強い「DOVE FESTA」を改善し、質の高い学習の成果を発信する場とするために、研究学会をイメージできる「DOVE ACADEMY」と名称を変え、学習の目的とゴールの明確化に努めてきた。

コロナ禍の令和2年度も、全校生徒を研究内容や興味・関心を基に秋田の食材、伝統、特産品、自然、県民性という五つのジャンルに分け、各ジャンルを更に学年ごとに三つの会場に分散し「DOVE ACADEMY」を開催した。本番当日は15会場をICT機器で結び、オンライン上で全校ディスカッションを行った。令和3年度からは、より世界に視野を広げ、いわゆる「SDGs」の17の目標との関連から、持続可能な社会を実現する一員としての自分の生き方を考える研究を進めることとした。「持続可能な社会づくりの担い手として、自己の生き方を問い続ける」を新たなテーマとし、SDGsと関連付けた研究を行い、発表方法を発達段階と実態に合わせ、1年生は弁論大会、2年生プレゼン大会、3年生はディベート大会として、「DOVE ACADEMY」を開催した。

b 総合DOVEの特色

本校の総合DOVEの活動は、1年次の職業意識・進路意識の形成から始まり、2年次にはSDGsの視点から秋田活性化策を計画・立案し、その研究を通して自分の生き方を考え、3年次には2年次までの研究や様々な生活経験などを踏まえて、SDGsの17のゴールから研究テーマを設定し、自分の生き方を探りながら高校での学習や将来への展望をもって卒業を迎えるという、3年間を一貫した進路探求型のキャリア学習である。

本校の研究主題は、「未来を自立的に生きる」であり、総合DOVEでは、自分自身の個性や適性を見つめ直し、社会情勢と向き合いながら、自ら課題を見付け、協働的な学びを通して、自分の理想の生き方を見いだそうとする態度を育成している。

c 総合DOVEの重点

本校の生徒の状況を、「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」の4項目から検証してみると、次のような傾向が見られる。

- (1) 知識は豊富だが、簡潔に相手に分かるように表現することが苦手である。
- (2) 知的好奇心や向上心、自制心は高いが、自己肯定感や自己有用感が低い。
- (3) 課題解決することには積極的だが、自己表現することには消極的である。
- (4) 就きたい職業はあるが、どんな生き方を目指しているかは曖昧である。

そこで、3年間の総合DOVEの学習では、「持続可能な社会づくりの担い手として、自己の生き方を問い続ける」をテーマとし、各学年の発達段階を踏まえ、自分が目指したい「理想の生き方」を具体化・実践化できるようにしていきたいと考えている。また、総合DOVEで取得した資質・能力が、未来を自立的に生きる力になっていくことを期待している。

2 総合DOVEの計画

a 各学年の総合DOVEのねらいと活動計画

1) 1年生のねらい

身近な人へのインタビューや職場体験などを通して、働くことへの思いや意義などについて考えを広げ深めるとともに、調査内容や整理した考えなどを弁論大会で発表したり、職場体験新聞にまとめたりすることで、「なりたい自分」を支えていく専門性についてもっと広く探求したいという意欲が高まる。

2) 2年生のねらい

企業や団体への訪問調査やオンラインを活用した取材などを通して、SDGsの実現や秋田の

活性化策などについて考えを広げ深めるとともに、調査内容や整理した考えなどをプレゼン大会で発表する活動を通して、「自分の理想の生き方」を具体的に考えることができる。

3) 3年生のねらい

SDGsの実現に向けて研究テーマを設定し、自分たちの提案を動画にまとめ、企業等の担当者に助言を求めるなどしながら研究を進め、その成果を学年のディベート大会で発表する活動を通して、「持続可能な社会を実現する一員としての自分の生き方」を問い直し、自分は就きたい職業を通して、どんな生き方を実現していくのかという志を立てることができる。

b 各学年の総合DOVEの活動計画

1) 1年生の学習対象と学習のねらい

学習対象	学習のねらい
① 自分らしさや自分の成長 ・自己評価、級友や保護者の他者評価	1) 自分のよさや特徴について理解できる。 2) 自分らしさに対する自信を深まる。
② 保護者や家族、親類などの仕事 ・インタビュー活動 ・職場訪問による見学	1) 身近な人々の職業人としての一面うい知ることを通して、尊敬の念を新たに抱くことができる。 2) 保護者や家族の努力や苦労のうえに生きている自分の存在を理解できる。
③ 自分が調査活動を通して抱いた思いなど ・DOVE ACADEMYに向けた発表原稿の作成	1) 弁論大会を通して、自分の考え論理的にまとめ相手に伝える方法を身に付けることができる。
④ 様々な仕事に携わる人々 ・三日間の職場体験活動 ・職場体験新聞作成	1) 仕事の喜びを共感的に理解できる。 2) 仕事の苦労、悩みを共感的に理解できる。 3) お世話になった方々の仕事に就くまでの過程や努力、苦労など理解できる。
⑤ 自分の進みたい道とその道を歩んでいる人々 ・「鳩翔の行事＝夢を発表する場」に向けた準備	1) 憧れの人々の生き方や業績を調べることを通して、自分の課題を把握できる。 2) 自分の進みたい道について、SDGsと関連付け新たに探求してみたい問いを立てることができる。

2) 2年生の学習対象と学習のねらい

学習対象	学習のねらい
① 自分が設定した研究課題に関わる企業や団体，個人	1) SDGsに関わる企業の方々のお話を聞き，自分が目指したい理想の生き方を考えることができる。 2) SDGsの17の目標と，SDGsに携わる人々が身に付けている資質・能力の関連を知り，自分の目指したい理想の生き方と関わらせて研究課題を絞り込み研究計画を修正できる。
② 探究に必要な資料や提案する企業や団体 ・インターネットを活用した調査 ・企業や団体への訪問調査やオンラインを活用した取材	1) 探求に必要な資料を収集したり，整理・分析することを通して，研究課題についての基本的な知識を習得できる。 2) 訪問調査や取材を通して，秋田活性化策につながる専門的な知識を習得できる。
③ 自分が提案する企業や団体 ・秋田活性化策の提案に向けた発表原稿やプレゼンテーション資料作成 ・DOVE ACADEMYに向けた発表資料の修正	1) 企業や団体から評価や助言をいただきながら，秋田活性化策を問い直し，深めていくことができたり，多面的・多角的な考え方を習得できる。 2) プレゼン大会を通して，パソコンの活用と相手を意識して発表する力を身に付けることができる。
④ 提案活動を通して抱いた思いなど ・「鳩翔の行事＝志を発表する場」に向けた準備	1) 探求した結果を自分なりに考察することを通して「自分の理想の生き方」を具体的に考えることができたり，新たな課題を明確にしたりすることができる。

3) 3年生の学習対象と学習のねらい

学習対象	学習のねらい
① 探究に必要な資料 ・文献資料の収集, 整理 ・インターネットを活用した調査	1) SDGsの課題の解決のためにこれまでの取り組みや成果を知ることで, 自分が解決すべき課題を絞り込むことができる。
② 自分が提案する企業や団体 ・SDGsを実現するための提案	1) 調査・研究した内容について企業や団体から評価や助言をいただきながら, 研究内容をを問い直し, 深めていくことができる。
③ 自分が身に付けた専門的な知識や収集した資料を通して抱いた思いなど ・DOVE ACADEMYに向けた準備	1) ディベート大会を通して, 批判的思考力や即興で考え対応する力を身に付けることができる。
④ 3年間の総合DOVEの学習で習得した知識や経験および実感できた思い ・卒業レポートの作成	1) 3年間で得た知識・技能, 思考・判断, 思いなどを言語化することを通して, 研究の成果を適切にまとめることができる。 2) 成長を実感することで, 自分の可能性への期待を膨らませることができる。

- 1 1年部 働く意義を知り、自分の生き方を幅広く考え、社会の一員として自分たちができることに主体的に取り組もうとする生徒を育てる

プロ意識の高さにふれて〈焼肉大昌園を訪問して〉

焼肉大昌園を訪問し、主に接客業を体験させてもらいました。接客業ならではの、お客様を最大限に思いやった行動がとても多くて、「こんな所まで気遣っているんだ」という驚きがたくさんありました。

特に印象に残った点は、働いている職員の方々が常に周りを見ているということです。無駄な動きがなく、すぐに他の職員のサポートに回っていて、プロ意識の高さを感じました。



私が実感した「働くこと」とは

1年間の学習を通して「働くこと」とは、目の前の仕事と自分に、本気で向き合うことだと思いました。そして本気で向き合ったからこそ、そこに「プライド」が生まれるのだと思いました。また、人を相手にする職業では、相手に寄り添う大切さを感じられました。将来、自分自身が働くことについて、「自分は何がしたいと思っているのか」と自分と向き合いながら、真剣に考えていきたいと思いました。

接客業における思いやりや気遣いの大切さ

本生徒は、この職場体験活動を通して「働くこと」とは、お客様へのおもてなしの行動がとても大切だということに気付くことができた。また、できる限り心遣いをするのを心掛け、お客様と真摯に向き合う姿勢こそが、店の信頼や人気を保つ秘訣だということにも気付くことができた。更には、SDGs 11番「住み続けられるまちづくりを」とSDGs 12番「つくる責任、つかう責任」に関係づけて、体験内容をまとめることもできた。

子どもと触れ合う職場 〈きらら学童クラブを訪問して〉

きらら学童クラブでは、子どもたちと一緒に遊んだり、補食の準備をしたりしました。特に印象的だったのは職員の方々の子どもへの接し方です。子どもの相手は想像以上に疲れるものですが、職員の方々は子ども一人一人に真剣に向き合っていました。また、子どもたちがいない時間は、コロナ対策で施設や用具の消毒を徹底するなど子どもたちの安全のために尽力していました。大変な仕事が多い中、子どもたちのことを大切に思う気持ちが働く力になっているのだと感じました。



将来の夢 〈人を笑顔にし、自分も笑顔になる仕事〉

母は看護師として朝から晩まで忙しく働いている。「助産師になれば？」という母の一言から、助産師について調べることにした。調べ終わった私は、「人を笑顔にし、自分も笑顔になる助産師になりたい」という夢をもった。助産師に就き、安全に出産させる手伝いをすることでSDGs 3番の「全ての人に健康と福祉を」とSDGs 11番の「住み続けられるまちづくりを」を達成できるのではないかと考える。この夢を実現できるように、自分にできることをこれからも実践していきたい。

働く意義に触れて

本生徒は職場体験を通して、働くとは誰かのために一生懸命になることであり、相手への思いやりが大切だと気付くことができた。実際に体験したり、働く人の思いに触れたりすることで、働く力の源についても考えることができた。弁論大会では、助産師の仕事について調べたことをもとに、将来助産師になる夢について発表した。将来の夢とSDGsとの関わりについて考え、夢を実現させたいという意欲を高めていた。

ふるさとのために働く姿から学んだこと〈北都銀行を訪問して〉

銀行を訪問し、札勘や名刺交換などを体験した。銀行で働いている方々は、銀行としての仕事も当然であるが、ふるさと秋田のために取り組んでいるという誇りをもってることが分かった。この訪問を通して働くこととは、人々の日常を支えることであると考えた。それは、どの職業にもつながることである。今後は、ふるさとのために働くとは、具体的にどんなことをしていけばよいのか探っていきたい。



日常のありがたさ〈コロナ禍での生活から学んだこと〉

コロナ禍で世の中は暗くなってしまった。しかし、絶望から学んだこともあったのではないだろうか。自分の叔父が大けがを負って病院に運ばれたが、コロナ禍の影響ですぐには看てもらえなかった。幸い受け入れてくれる病院があり、今は無事である。この経験から、いつでも治療を受けられる環境のありがたさを強く実感した。そして、「日常」の素晴らしさを感じた。当たり前な生活が送れない今、日常生活を当たり前を送ることができたことが、とても幸せなことだった。日常にこそ、たくさんの幸せが隠れていたことに気が付いた。

ふるさとのために働くこと

本生徒は、この職場体験を通して、仕事の表面的な内容だけでなく、そこにある思いや願いが様々な活動につながっていることを知った。そして、それはふるさとのために働くことであり、日常を支えることであることに気が付いた。弁論大会では、その日常のありがたさを、コロナ禍の生活を通して改めて感じたことを述べている。それらを通して、これからの学校生活をより前向きに生活していこうという意欲につながっている。

思いの強さ〈(有)コマバを訪問して〉

コマバでの仕事は幅が広く、掃除や接客、庭での活動など多岐にわたりました。「何事にもこだわりをもつように」と教えていただき活動をする中で、そのこだわりはお客様を最優先にするためなのだと感じました。立ち位置や目線など、何気ないことでも常に気を配らなければなりません。それだけ美容院の方々の、『お客様のために』という思いは強いのだと感じました。



思いやりの気持ちをもって働くこと

1年間の学習を通して、働くことは思いやりの気持ちをもつことが大切だと感じました。いつも相手に最高のおもてなしをしようとしている美容院の方々の姿も、思いやりの気持ちにあふれていました。そしてこのことは、どんな職業に就くにしても大切なことだと思います。相手にとって自分の行動がどうなのかを常に考えながら、将来の職業についてさらに考えを深めたいと思いました。

自らの目標を考える視点

本生徒は、相手意識をもって活動することで、働くこととは思いやりの気持ちを持つことが重要であることに気付くことができた。さらに、他の職業にも考察対象を広げ、どんな職業であっても相手への思いやりが大切であり、そのことが働くことの根幹にあるのだと実感した。そしてこのことが、自分の将来の目標を考える視点となり、深く自分がどうあるべきかを考えるようになった。

- 2 2年部 SDGsに関する興味・関心をもち、持続可能な社会づくりに主体的に参画しようとする生徒を育てる。

(1) パッケージの桑原

ごみを資源に

秋田県民一人あたりが一日に排出するゴミの量は全国平均を6%上回っている。そういった状況を踏まえ、私たちは3つの問題点について考えました。

- ①まだ使える資源が使われていない。
- ②まだ使える資源が捨てられている。
- ③プラスチックゴミが増えている。

使えなくなった資源を使える資源にするという視点で考えたとき、「バガス容器を使う」、「間伐材を広め、活用する」という2つのことが手早くできると考えました。地球温暖化やゴミ問題など、世界がかかえている問題は多種多様化しています。ゴミを減らすことによって安全・安心な環境に近づき、リサイクルによって資源が増えることは、各産業の活性化にもつながると考えます。企業側でできる容器の開発、私たちの消費行動が変わることの両面からの取組も重要です。リサイクル、リユース、リデュース、リフューズ、リペアなどの5Rは、個人レベルですぐにでも実践できることです。限りある資源を限りある資源を最大限活用するために、私たちは普段の生活で何気なく出でしまっているごみを、「ひとつの大切な資源」としてみることが大切です。資源の再利用、活用一人ひとりが貢献し、持続可能な社会を築いていきましょう。



環境問題を身近なものとし、実生活にて実践する

本研究を行った生徒は大きな問題である地球温暖化や資源の有効利用等について、様々な視点から「できること」について考えた。地球や自然、動物、自分を含めた人間が、どうすれば快適な環境をつくることができるかということについて、自分の身の回りにあることからの解決を図ることが近道という結論に至る。会社の企業理念等を基にした提案を行っていく中で、結局はそれを使う消費者一人一人の消費行動が大切である事に気付く。そして、自分たちでできる5Rの取組を実践していこうという行動改革へとつながった。

(2) 株式会社ABS秋田放送

ABS秋田放送の強みを生かした秋田活性化プラン

株式会社ABS秋田放送の理念や業務内容を学び、テレビやラジオ、SNSなど、様々なツールで情報を伝えられる発信力を生かした「耕作放棄地の開拓」という地域活性化案を考えました。秋田県は全国的に見ても、今は使われていない農地が多いので、その農地を地域や秋田放送で一団となって耕し、田畑として活用するという取組である。この取組では、土地を有効活用することで、SDGsの項目11の「住み続けられるまちづくりを」を達成できる。また、荒れ地を耕して見た目を豊にすることで、項目15の「陸の豊かさを守ろう」も達成できる。私は、発表では双方向性を意識し、聴き手が楽しめる発表を心掛けた。



SDGsの視点から、自分の生き方をクリエイトする

この生徒は、今年度の研究を通して、SDGsは人類が未来も暮らしていける持続可能な社会をつくるために、世界共通で取り組んでいく目標であることを実感することができた。その中でも企業や自治体など、身近なところで取り組んでいた「11 住み続けられるまちづくりを」にスポットをあてて、秋田県の課題である耕作放棄地の活用と高齢化問題とを関連付け、さらにABS秋田放送の情報発信力を存分に生かした地域活性化プランを班員と共に作り上げた。その鋭い視点にABS秋田放送担当者からも創立70周年を来年に控え、何らかの形で実現したいと高い評価を得ることができた。

(3) ローカルパワー

空き家シェアし交流

秋田と都会を比べると、都会の方が圧倒的に魅力的であると考えられるが、秋田の魅力に着目する視点で活性化策を考えた。県内の空き家を買取りシェアサービスの場として気軽に利用できる施設を作ることで、高齢者が若者と交流し、保存食や衣服リメイクの知識を伝え、インターネットでも配信する。また、作った食品や衣服は空き家を活用した店舗などで販売することで利益も上げられる。さらに、若者は教わるだけでなく、ネット配信のためのIT（情報通信）機器の操作を高齢者に教えることで、知識や知恵を学び、雇用拡大にもつながると考えた。秋田県の高齢化は、豊富な知識を持つ高齢者がたくさんいて、若者一人一人に手を差し伸べることができる良さがあると考えることができた。



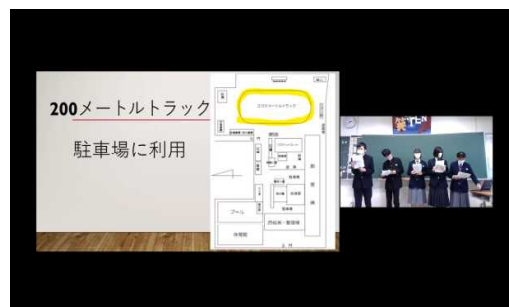
郷土への思い

自分たちが目で見て、心で感じたことをもとに、地元企業の目線に立つてふるさと秋田を見つめる秋田活性化案を提案することができた。活動を通して未来の秋田への思いをはせることで、郷土への思いを深めることができたのではないかと考える。また、自分が自分らしく生きること、現状に満足せず発展的な考えをもつ大切さに気付くことができ、今後の生き方につなげようと考えることができた。

(4) See Visions

「廃校リノベーション」で秋田を活性化

エリアリノベーションに取り組んでいる株式会社See Visionsの理念と業務内容を学び、空き家を壊さずに価値を残しながら時代に合った形に生まれ変わらせる試みについて理解を深めた。その上で、秋田県の少子高齢化と人口減少による廃校の増加、さらにはスプロール現象といった現状の分析を踏まえ、若者の需要も考慮して、廃校をスポーツアスレチック施設に改築する案を提案した。リノベーションによって、新築と比較して二酸化炭素の排出量や廃棄物の削減を実現できることを示しつつ、人と人とのつながりを強めてにぎわいを取り戻し、若者やファミリー層にとっても魅力ある町づくりにつながるアイデアをプレゼンすることができた。実際の小学校の校舎配置図を使用しながら、学校の施設をどのように活用するかを示し、具体的な提案をすることを心掛けた。



SDGsに当事者意識をもつきっかけに

この生徒は、SDGs 11番の「住み続けられる町づくりを」に関心を持ち、今回の研究を行った。研究を進める中で、他の目標も達成されなければ11番も実現できないことに気付き、SDGsの各項目は互いに密接に関わっていることも理解することができた。また、ほとんどの課題が遠い世界の出来事ではなく、身近にあることにも気付くことができた。それぞれの地域や企業に合った観点や目標をもつことが、SDGsの達成に当事者意識をもって取り組むことにつながるという考えをもつことができた。

(5) 株式会社「せん」

秋田を繋ぐ。今より「せん」倍好きになる

2年生70人に「秋田が好きか?」というアンケートをとった結果、「好き30%」「嫌い65%」「どちらでもない5%」という結果になった。好きな理由として「田舎」「犯罪発生率が低い」「伝統的な文化が多い」「秋田ならではの食文化」などが挙げられた。一方、嫌いな理由として「面白いイベントがない」「遊ぶ所がない」「住みにくい」「高齢化が進んでいる」などが挙げられた。これらのアンケート結果から、今秋田に必要なことは「若者が集まるような楽しいイベントや施設」「秋田の伝統芸能、文化、郷土料理を伝承する」「自然環境の保護」「住みたくなるような工夫や取り組み」だと考えた。そこで私たちは、「秋田SDGsアンバサダー」として県内外にSDGsの意義や重要性を広める取り組みをしている秋田舞妓の活動に着目し、秋田をよりよくするために「MIKAKITA結成計画」を提案した。これは、株式会社「せん」の秋田舞妓がアイドルユニットを組み、秋田をPRする舞妓アイドル、略して「まいドル」を結成することである。「まいドル」の収益金の一部は、ウォーターエイドジャパンや被災地の寄付にまわす、自然の保護を目的にボランティア活動を行うなど秋田を伝える企画をする、男女問わず誰でも舞妓体験ができるようにするなど県民と触れ合う場を設ける、舞妓弁当などのグッズや商品を販売する、などによって秋田の活性化を図り、SDGsの啓発を行おうというものである。秋田舞妓がつけている17色の簪は、SDGsを広めるためのものである。この簪からも分かるように、秋田舞妓は、SDGsの17項目すべてに貢献してきたという自信と誇りをもっている。私たちの提案は、秋田の活性化と若い世代の人たちのSDGs啓発によりつながっていくはずである。



SDGsの見識を深めるきっかけに

この班は、「SDGsアンバサダー」として県内外にSDGsの意義や重要性を広めている秋田舞妓の業務内容や理念に着目して、新感覚の「まいドル」結成計画を提案した。昔ながらの文化と若い世代の感覚を融合した新感覚の提案は、劇を交え周囲を楽しませながらの発表になり、工夫された内容の評価も高かった。この活動を通して、班員のSDGsに対する理解や見識も深くなり、地域のために自分たちができることを考えるなど、学びを深めることができた。

(6) 佐野薬局

女性や高齢者が働きやすい環境づくりを

秋田県では、人口の流出が著しく、多くの企業で人手不足が起きている。そこで全ての企業でより多くの人働きやすい環境を作り、生き生きと働けるようにすることが人口の流出を防ぎ、秋田の活性化につながると考えた。そこで、次の二つの活性化策を考えた。

- 1 オンラインの活用を進める。…コロナウイルス感染拡大に伴い、首都圏ではテレワークが推進されている。秋田県では、オンラインでの勤務があまり浸透していないが、テレワークができれば、子育て中の女性や様々な事情で会社に行くのが困難な人も在宅収入を得られ、企業側も貴重な人材を確保できる。
- 2 高齢者を活用する。…秋田県では人口流出に加え、高齢化が進行している。まだまだ元気で働きたいと考えるシニア世代も多いのではないかと考える。経験豊富なシニア世代に働いてもらえる体制を整えることが必要だ。



この二つの活性化策に対する佐野薬局の調剤関係からの評価は、法律面のこともあり、オンライン化は難しいが、その他の部門ではオンライン会議なども進んでいる。高齢者の雇用は健康面と本人の希望により、現在75歳の薬剤師がいるとのこと。この評価を受けて、高齢者がより長く健康で働くためには何が出来るかを今後は考えていく必要があると考えた。

企業の評価からより問題点に目を向けられた

この生徒は、教育に関することに興味をもって調査活動を行ったが、教育には今現在、自分たちが受けているような学校教育だけでなく、子供から大人まで様々な世代や立場の人がともに学べる形態があることを知った。女性が多く働く佐野薬局から女性や高齢者が働きやすい環境を作ることが秋田の活性化につながるのではないかと考え、研究をスタートさせた。企業へのアンケートを基に、調剤師の役を演じながら分かりやすくインタビュー内容を伝えることができた。また今回のSDGsに絡めての研究を通して、ジェンダー平等を実現することを意識し、今の教育の概念をアップデートする必要があると考え、さらに来年度の研究につなげようとすることができた。

3 3年部 SDGsに関する興味関心を高め、持続可能な社会づくりに主体的に参画できる生徒を育てる

SDGs 5 「THE Woman」～日本初女性総理大臣を生み出そう～

1. 2年生までのDOVE研究では、仕事をする上での「やりがい」について関心をもっていった。その後SDGsについて調べ、17の目標について理解を深めていくうちに、SDGs 5番「ジェンダー平等を実現しよう」について追究することが、将来自分がやりがいをもって働くためには必要不可欠であると考えられるようになった。そこで、『日本初女性総理大臣を生み出そう』というテーマでプレゼンテーションと提案動画を作成し「東北の未来株式会社」に提言した。現代の日本社会において、最も女性の進出が遅れているという政界にスポットをあて、女性が活躍できる場を作ることによって、日本が抱えている性別差別問題の解決につながるのではないかと考えた。研究を進めるにあたって、机上の空論や理想論にならないよう、現役で活躍している女性国会議員3人に直接電話をして取材を申し込み、メールやFAXでのインタビューを試みた。そして、議員になるための選挙活動と家庭や子育てとの両立や時間的な制限、高すぎる供託金、妊娠出産期の議決権が担保できないなど多くの問題があることを知った。そして、ディベート大会では、「全ての人々が自分らしいことをしても冷ややかな目で見られないような社会にしたい」「普通という言葉でまとめられない多様性が認められる社会にしたい」と訴えた。女性だからという理由で昇進を妨げられていたり、子育てや家事に追われて職場復帰できなかったりする今の日本における女性の状況を変えたいと熱く語り、多くのディベート参加者や傍聴者からの共感を得た。

ジェンダー平等の視点からスタートし、世界各国における政界での女性の地位や活躍、多様性が認められる社会となるための課題、日本の性別差別による様々な弊害、それによって男性側も生き辛くなっている現在の日本の状況など、多角的な視点で視野を広げて課題を追究し、考えを深めることができた。また、DOVE ACADEMYのディベートでは、様々なチームとの対戦を通して、自分たちの政策の弱みに気づき、分析しながら柔軟に意見や政策を修正することで、「ジェンダー平等の実現」の必要性を再認識し、将来の自分の生き方について考えることができた。

SDGs 1 「貧困をなくすには」

様々な社会問題の原因が「貧困」に起因していると考えた。つまり、貧困を解決すれば、数多くの社会問題を解決できるということである。具体的には、金融機関をデジタル化することを提案した。世界には銀行口座をもっていない人が17億人もいる。しかも、そのほとんどがアフリカに集中している。そこで、誰でも簡単に金融機関にアクセスできるようになれば、それだけで使えるお金が増え、企業を誘致しやすくなると思った。

提案先の北都銀行からいただいた「まずはインターネットインフラが整っている地域のインターネットバンキングを充実させていければよいのではないか」というアドバイスを受け、アフリカの該当する地域を探った。南アフリカ共和国を始め、意外にもインターネットインフラが整っている地域が多いことがわかった。そのことから、金融機関のデジタル化を進めることは可能であり、それによってアフリカの市場はより拡大していくのではないかと考えるに至った。

ディベート大会ではアフリカのインフラを整備する資金の出所を指摘されたが、世界的なSDGsへの関心の高まりを受け、クラウドファンディングを駆使して資金を集める考えを明らかにした。また、金融機関と併せて教育機関もデジタル化していくことで、教育の充実も図れるものと考えた。

アフリカにおけるインターネットの普及率を、具体的な数値に基づいて説明することで、ネットバンキングを広げていくことは可能であり、それによってアフリカの市場はより拡大していくという考えをもつことができた。ディベート大会では理路整然と他者を説得するなど、情報を適切に整理して分かりやすく説明する力が優れていた。

SDGs 8 「世界中の皆に、働きがいをもてるチャンス」

劣悪な経済状況に置かれている国では、人間にとって重要な働きがいと、社会問題を解決するための経済成長との両立が重要と考え、「世界中のみんなに、働きがいをもてるチャンス」というテーマで研究を進めた。具体的には、アフリカに芸能事務所を作ることを提案した。それは、芸能事務所を設置することで、それに関わる多様なジャンルの関連会社が成長することが見込めるからである。また、黒人を主体とするアイドルグループの知名度を上げることで、人種差別の解消という面からも意義があると考えた。提案先のUNIDO東京からももらった「具体的な国を絞って提案を行うべきだ」というアドバイスをうけ、SNSが普及している南アフリカ共和国を想定した。しかし、南アフリカは鉱産資源に依存しているため、資源の枯渇の想定を考えると南アフリカに限らず重要な提案だという発見をした。

ディベート大会では資金の出所を指摘されたが、世界的なSDGsへの関心の高まりを受け、クラウドファンディングを駆使して資金を集めたり、国連機関からの資金援助を募ったりする考えを明らかにした。

自分たちが興味をもっているアイドルグループの設立が、発展途上国における雇用の創出や人種差別の解消という効果があると主張するなど、SDGs No. 8「働きがいも経済成長も」という持続可能な社会作りの課題に対し、多角的な視点をもって提案することができていた。また、提案の問題を克服するために丁寧に事実を調べて改善を試みるなど、主体的に学習を進めていた。

SDGs 6 「トイレから始める国発展計画」

アフリカのコンゴ共和国でのエネルギー事情について、持っている製品やサービスでSDGsの達成に貢献している日立製作所の研究員や技師の方々とディスカッションを行った。研究者・技術者の知見を教えていただき、トイレとエネルギー分野での関りについて研究を深めることができた。

人糞を用いた発電方式や、送電網に関する研究を行った。人糞がバクテリアに分解される際にメタンや豊富なバイオガスが生成され、エネルギーとして再利用できることに着目した。塊を乾燥させ、燃料や可燃性のブロックを作る方法も調べた。

発電はできても、送電をどのように行うか、費用はどれくらいかかるのかという疑問には、マイクログリッドを使用することで費用を抑えられることを知り、ハワイ州マウイ島の例を参考にし、スマートシティの実現の可能性を見出すことができた。

この研究を通して、日本の将来像にも目を向けることができた。電気自動車（EV）のバッテリーを活用して電力のコントロールを行ったり、地域全体のエネルギーを管理するスマートセンターを設置したりするなど、建物間で電力の相互利用や電力融通、エネルギー情報の共有・見える化の実現に向けて考えをまとめることができた。

持続可能な社会づくりに向けて、日本のみならず、世界の電力事情に目を向けて研究を行った。アフリカの貧困地域において、トイレから出される人糞を利用した発電方法を思いつくなど、豊富なアイデアで社会を発展させようと議論を行った。尿尿を活用することのメリットとデメリットのバランスを考えたり、現地のトイレの整備状況や心理的許容度といった導入条件に合った代替案を検討したりし、SDGsに関する興味関心を高め、持続可能な社会づくりに主体的に参画した。